

---

# TAKUMI

水嶋ゆり

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

TAKUMI

### 【Nコード】

N0941G

### 【作者名】

水嶋ゆり

### 【あらすじ】

高校生の周防匠は誰もが認めるスーパー高校生。その匠の周囲で起こる出来事は望むと望まないに関わらず事件となつて彼を巻き込んでしまうのだ。

## 第1話

私立朱雀高校は理事長の得宗寺正一とくそうじが50年前に世界に通用する人間の育成に役立てようと、若干23歳にして設立した学校である。もちろん幼稚園から大学までエスカレーター式に進学できるのであるが、途中入学も可能であり又、別に進路を求めることもできる。私立とはいっても理事長が趣味で設立したような学校なので、学費は公立並みに抑えられていたため、経済面で脱落する生徒はほとんどいなかった。しかも設備や教師に至っては最高級のレベルまで高められており、したがって他の私立校と比べると格段の差があった。1つの難点は、入学する基準が非常に厳しい。ということだった。学力は無論だがそればかりでは頭でっかちになってしまう、という正一の考えで、他に必ず他人より秀でたものを持っている、ということが条件だった。スポーツは元より、勉学とは関係のない家事など、とにかく何でもよかった。正一のメガネに叶えば何でも有り、といったところだ。そこが普通の高校と違うところだった。

しかしその正一も年には勝てず、還暦を迎えると同時に息子の秀一にその座を譲った。すると間もなく力が抜けたのか寝込んでしまいそのまま帰らぬ人となった。その後、跡を継いだ秀一は父の思想を受け継ぎ、より学校の発展に努め、あらゆる分野で活躍する生徒を輩出するようになった。それゆえ学校の名声も高まりと同時に入学希望者が増加し、以前よりも競争率が激しくなりブランド色が一層濃くなった。

名門とまで云われるようになった朱雀高校にまた新たに拍車をかけるような生徒が現れた。といっても昨日、今日馬脚を表わしたというのではなく、彼が小学校に入学すると間もなく頭角を表わしたためそれがどこまで続くのか、といったことが学校関係者の興味の的となった。その生徒の名は周防匠すけいひさ。彼は成績優秀であるばかりではなく、武芸に秀で、高校入学時にはすでに剣道6段、空手5段、

合気道5段の猛者であつた。しかもそれを感じさせない風貌をしており、俗に言うイケメンの持ち主でもあつた。したがって女性にモテないはずはない。ところが彼は女性に対して異常なまで冷たく、特に言い寄ってくる女性に対しては（年令に関係なく）容赦ない言葉を浴びせた。そんな彼が唯一、心を許しているのではないか、と思われる女性がいた。それは幼なじみであり朱雀高校理事長の一人娘、得宗寺沙織であつた。

## 第2話

2人は沙織一家が匠の隣家に越してきた12年前からのつきあいだ。匠の父は周防建設という会社を経営していたが、それは得宗寺家の所有する得宗コーポレーションの傘下に入っていた。従って、明確に言えば、沙織は匠よりも上の立場だった。それにもかかわらず、彼は挨拶に来た得宗寺家の執事と彼について来た沙織を見て、『こいつ、オレにくれ。』と言つてのけた。それ以来沙織は匠の面倒を一切みるようになった。食事の世話、洗濯、掃除 e t c . 全てにおいて匠は沙織にやらせ、第三者（家族も含め）が手を出そうとすると露骨に不快感をあらわにした。それ以後、両親は匠の世話を全くしなくなった。しかし5才の子供が料理をさせられるのだからその苦労は並大抵ではなかった。手にヤケドと切り傷は日常茶飯事で、上手く出来ず泣いた事もしょっちゅうだった。だが匠は彼女の作る料理（当初は料理などとお世辞にも言える代物ではなかったのだが）には一度も文句をつけることはなかった。味を濃くしろ、とか、薄く、といった注文はあったが、作ったものに対してはまずいとはひと言も言わなかった。誰が食べてもまずいといえるものに対してもである。とにかく黙って食べた。その後体調不良を訴えようともひたすら沙織の作ったものだけを口にした。試合で遠征に行つた時などは仕方なく用意されたものを食べたが、在宅している時は必ず、どんな場合でもそうした。

ある意味家政婦のような毎日を送っていた沙織だったが、彼女もまた成績はトップクラスであり、美人で誰にも分け隔てなく優しい女性に成長した。理事長の娘で、望めば何でも手に入るような資産家の家に生まれたというのにツンケンしたところがなく、嫌われる要素の何ひとつない女性だった。しかも趣味が家事といったところも理想の女性という称号を与えられる要因になっていた。唯一の欠点は、体育系に弱いということだ。だがそれは彼女のキャラク

ターに汚点を与えるどころか、かえってかわいらしいという表現に変化していた。そんなところから2人は美男美女の理想のカップルだと誰しも思っていた。しかし一年下に加藤亜紀という生徒が入学してから2人の関係に変化が生じた。相変わらず身の回りの世話は沙織がやっていたが、女性を全く近づけなかった彼が、彼女だけは近付こうが何をしようが嫌な顔をしないし何も言わないのだ。彼女は匠の母方の従妹で、入学するにあたって叔母からくれぐれも亜紀を頼む、と直談判されたため特別なのだろう、という噂が生徒間に広まった。しかもあれで周防は結構女には弱いのではないか、といった尾ひれまでついて。

### 第3話

「お兄さん。お昼一緒に食べましょう。」

その日も亜紀は昼食の時間になると匠の教室にやって来た。朱雀高は男女別に分かれているのでそれぞれの校舎に行くのはかなり勇気がいった。お互い好奇の目で見られるからだ。それに今は携帯電話があるので、わざわざ校舎に行かずとも相手呼び出せるので生徒達は敢えてそんな苦労はしなかった。それにもかかわらず亜紀は男子の、しかも上級クラスに来るのだから噂にならないはずはない。加えて可愛いときている。たちまちのうちアイドルになってしまった。だが相手が匠では表立って彼女にちょっかいをかけようとする者はいなかった。

「ああ。」

匠も愛想良く（彼にしてみれば）答え、亜紀を伴い学食に行った。ここの学食はビュッフェ形式を採用し、学校関係者なら誰でもただ同然の金額で栄養万点の食事を楽しむことができた。しかし匠はそれさえも一度たりとも口にすることはなかった。毎日沙織の美味い手料理を食べていたからだ。

ところが今日に限っていえば、先に来て準備を整えているはずの沙織が来ていない。こんなことは初めてだった。一体どうしたのか。動揺を表に出すようなことはしない匠だったが、内心不安を覚えた。「どうしたのかしら。沙織さん。お兄さんを待たせるなんてひどい人ね。私なら絶対待たせるようなことはしないのに。」

亜紀が可愛いのは顔だけだった。

待つこと30分。ようやく待ち人がやって来た。いつになく慌てているのがその動作からわかる。

「沙織さん！ いったいどうしたのよ！ お兄さんをこんなに待たせるなんて非常識にもほどがあるわ！」  
しびれを切らし亜紀が怒鳴った。

「こ、ごめんなさい。急に用事ができてしまつて。待つたでしよう。すぐ準備するわね。」

そういいながらバスケットを広げ準備をし始める沙織の様子が普段と少し違うことに匠は気付いた。亜紀がキンキン声で騒いでいるのを尻目に、匠は沙織の手首を掴むと何も言わず外へ出た。あまりの素早さに亜紀は言葉を発する事さえできなかった。



## 第4話

中庭まで行くとようやく匠は足を止めた。振り返って沙織を見ると何か気になることがあるのか下を向いたままだ。

「・・・オレは遅れたことについて何も言うつもりはない。何か言いたいことがあるなら言ってみろ。」

「な、何でもないわ。・・・急に用事ができて・・・ごめんなさい。・・・私・・・」

腰まで届くほどの髪がサラサラと音を立てるように流れた。

「・・・幸運なことに午後の授業は休講だ。・・・練習時間までにはまだ時間がある。・・・ゆっくり食べることにしよう。・・・もいい。」

きびすを返すと匠は沙織を残しその場を後にした。

その放課後。意外なところから沙織の遅れた原因が判明した。

同じ剣道部の部員が偶然目にした光景をご丁寧にも匠に注進に来たのだ。

「生徒会長が彼女に告ってたんだ。彼女は急いでいるようだったんだけど、会長に何度も引き止められてたぜ。彼女優しいからイヤだつて言えないみたいでサ、結局最後まで会長のくだらない自慢話につきあわされて、最後になってやっと僕と付き合ってくださいって言ったんだ。オレ彼女が可哀想になってサ、助けてやろうとしたら、やっと急いでるからって言って走って行ったんだ。おい！聞いているのか！お前の彼女だろ？気にならないのか？」

迂闊だった。今まで沙織に男が近寄りそうになると匠は事前にその男を呼び出し脅しをかけていた。100%の男が得宗寺家の名を口にする慌てて自分お過ちを認めていた。すなわち、沙織に告白する勇気のある男はいなかったということだった。それなのになぜ今頃になって。しかも生徒会長だと！あのニヤケた奴が？匠は霧消に

腹が立つてきた。そのまま竹刀を握ったため普段よりも力が入り、練習にもかかわらず、相手をさんざんな目に遭わせてしまった。

帰宅途中もその怒りは収まらず、珍しくイライラしながら歩いていると携帯が鳴った。見慣れない番号だったが、耳に当ててみると低い声が聞こえてきた。

「匠君だね？」

それは確認というよりは断定する響きだった。

「は、い。」

彼の怒りが瞬時に消えた。本能が怒りを抑えろ、と忠告したようだった。

「私ができるかね。」

相変わらず断定的な声だ。

「・・・はい。」

匠にはそれが誰かはつきり認識できた。今まで一度も聞いたことはなかったが、同じ空気を持った人間ならばすぐわかる声だ。

「今すぐここへ来なさい。」

「お戻りになられたのですか。」

彼の問いに対する答えはない。自分の用件だけ言って電話を切ってしまったためだ。呆然とする匠に後ろから来た黒塗りの車が彼を追い越して止まった。中から2人の屈強な男が現れ、匠を両脇から挟み、中へ連れ込んだ。すると再び車は音もなく走り出した。

## 第5話

学校から周防家までは徒歩で30分の距離である。車にするとせいぜい10分、といったところか。匠を乗せた車は周防家には向かわず真つ直ぐ得宗寺家へ入った。周防の家も大きい、得宗寺家に比べればマツチ箱程度だ。得宗寺家は総面積が10万坪、敷地面積だけでも4万坪はあった。したがって正面から玄関まではかなり距離があつた。

執事の榊原の案内で匠はこの家の主、得宗寺秀一のプライベートルームに通された。秀一は電話中だった。フランス語で応対していたが、幼少時から外国語を学んできた匠にとって内容を理解するのは容易だった。取引先でトラブルが発生し、トップである秀一に泣き言を言ってきたのを何とか処理しろ、と命じていた。何とか相手をねじ伏せ電話を切るとようやく視線を匠に向けた。こういった場合、先に目を逸らした方が負け、と決まっている。匠もじつと相手の目を見た。時計の針音だけが異常なほど大きく聞こえた。5分、10分・・・段々と匠の神経は氷のように冷えてきたが、何も考えずただじつと相手を見つめた。

「沙織に見合い話がある。どう思うかね。」

根競べの結末がこの質問だった。予想もしていなかった話に戸惑いながらも匠は物怖じすることなく答えた。

「いつかは。そういう話があると思っていました。相手はどういう男ですか。」

「私に質問する人間がいるとはな。・・・まあ、良からう。相手はある国の皇子だ。」

「皇子。ですか。あなたに見込まれた人間をひと目見てみたいですね。」

「皮肉かね。そういう君はどうなんだ。私が何も知らないと思っっているようだが、沙織に関することは全て把握しているつもりだが。」

「それは僕も承知しております。榊原のすることは手に取るようにわかりますから。なにしろ小さい頃から一緒でしたからね。」

「ならば。この縁談に対して何とも思わんのかね。君は娘のことを顎で使っているようだが。」

「それとこれとは別です。」

「どう違ふのだ。君は将来どうするつもりだね。沙織と結婚するのか。」

秀一は眉をひそめた。

## 第6話

「それは考えていません。考える余地がありません。僕は1人息子ですし、彼女もそうです。お互い家を守っていかなくてはなりませんから。それに・・・彼女と結婚するということは全世界を背負わなくてはならない、ということです。僕にはそんな力はありません。もしそれが心配で今日僕をお呼びになられたのであれば、それは無用というものです。若輩者ですが僕は分をわきまえているつもりです。」

「では娘のことは何とも思っていないのか。」

「そういう質問には答えかねます。個人的な事ですし、僕達2人の問題ですから。」

「沙織はどう答えるかね。」

「さあ。おそらく同じ答えでしょうね。・・・御用がこれだけでしたならこれで失礼いたしたいのですが。」

そう言つて立ち上がるうとした匠に秀一が待ったをかけた。

「・・・君は、得宗コーポレーションという企業に興味はないのか。」

「そう、きましたか。もちろんありますよ。もし自分でできるのならやりたいことがあるんです。得宗グループがまだ手がけていない分野だと思います。」

「ほう！うちのグループでまだ着手していない事業があつたとはね。・・・はて、思いつかんが、良ければ教えてくれないかね。」

「ダメです。教えたら僕の夢じゃなくなる。」

「もし、それが現実となり得るものなら君の才能を私が買うが。どうかね。」

「買う？それもダメです。僕はプレッシャーに弱いんです。」

「よくもぬけぬけとそんな事が言えるものだ。私が君のことを知らないとも思っているのかね。私を見くびつてはいかんよ。君はプ

レッシュャーがかかるほど力を発揮する人間だと見ていたのだが、私の目がね違いかね？」

秀一の目がキラツと光ったのを匠は見逃さなかった。

「あなたは何でもお見通しのようですね。おっしゃる通り、僕はプレッシュャーがかかればかかる程、身体が燃えてくる性質たちのようです。それでも、ダメです。」

「条件を出そう。君の夢に私が差し出すものは、私の所有する全得宗グループと娘の沙織だ。これでは少ないかね？」

「なんですって！そんなバカな！からかわないで下さい！」

「冗談ではない。私は君が幼少の頃から帝王学を学んできた事を知っている。それに君の頭脳と武芸で培ったその精神力。今まで娘のやることに目をつぶってきたのは君を私の息子として世に送り出すためだったのだ。決して悪くない条件だと思うが、どうだろう。引き受けて貰えんかね。」

「・・・お断りいたします。先ほども申し上げましたように僕は周防家の長男です。家を潰すわけにはいきません。それにたかが高校生の僕に得宗グループを預けるですって？どうかしてしまっただんじやないですか？そんなこと誰が信じるものですか！」

匠はこんな馬鹿げた話につきあってられないとばかりに席を立った。

## 第7話

「待ちたまえ。私は正気だ。本当は君の夢がどうだろうと関係なかった。私の後継者は君じゃないとずっと考えていたのだ。娘の縁談が持ち上がったのをいい機会だと思ってこうして君を呼んだのだがね。」

「・・・僕はあなたに会うのはこれで2度目ですよ。そんな僕に得宗寺家をくれるって言っんですか？あまりにも馬鹿げている。話になりませんよ。」

「まあ、座りたまえ。ではテストをしよう。それに君が合格したならグループの覇権をやるう。もし不合格なら・・・10年後。君に譲ろう。無論、娘共々だ。どうだろう。」

「同じ事じゃないか。・・・わかりました。あなたの気が済むならそのテストとやらを受けましょう。それで良いんですね？」

秀一に粘られとうとう匠は根負けした。というよりも『テスト』という響に食指が動いたのかもしれない。秀一は「そうか！やってくれるか！では早速始めるとしよう。」

榊

原。例の物を。」

インターホンで榊原を呼ぶとすぐ見慣れた顔が入ってきた。顔には薄っすらと笑みさえ浮かべている。それを見て匠はこの男に謀られた、と思った。

「見たまえ。これが得宗グループの全容だ。・・・一応、業種別に分けてある。これを見て君の忌憚なる意見を言ってくれ給え。」

そう言っ秀一が差し出したのはかなりの数のCD、DVDだった。1枚のディスクでさえ膨大なデータが入るのに、これだけ数があれば（ざっと1000枚はある、と榊原が口を挟んだ。）見るだけでも相当時間がかかりそうだった。啞然としている匠を見て更に秀一

は続けた。

「どうした。これを見て気後れしているんじゃないだろうね。これは機密文書だ。公開できるものを加えたら数限りないぞ。まずこれを2週間で読破しなさい。その後再びここで会おう。」

秀一は呆気に採られている匠に背を向けると再びどこかへ電話をかけた。榊原に促され部屋を出て行こうとする匠の耳に軽快はドイツ語が聞こえてきた。



## 第8話

奥まった秀一の部屋から玄関まで歩いてくる間、榊原に説明された内容は殆どが得宗グループの社内秘についてだった。初め、匠は榊原に恨み言を言ったが全く効き目がなく、そのうち匠の方が諦めざるを得なくなった。このくらいでなければ到底、得宗寺家の執事なんぞは勤まるものではないのだろう。ふと彼はいったいいくつになったのだろうと匠は思った。

「榊原。」

「はい。何でございましょう。」

「お前、いくつになった。」

突然話題を変えられても顔色ひとつ変えない。

「いくつだと、お思いですか？」

「お前と沙織が家に来てから12年経つが、オレには全く見当がつかない。お前は全然変わらないからな。」

「いいえ。私もそれだけ年をとっております。今年で48になりました。」

「48？まだそんなに若かったのか？オレは60くらいだと思つた。」

「それは失礼というものですよ。人間外見だけで判断してはいけません。お父様からもそう教えられてでしょう。」

確かに、役目柄、榊原は実年齢よりはるかに老けて見えた。匠のストレートな物言いには慣れているのか、主従関係というよりは友達同士の会話のようだ。

「そうだった。悪かった。謝るよ。．．．ところでもう1つ聞いていいか。」

「なんなりと。」

「独身か。」

「また、これは異なことを聞きますね。．．．まア、いいでしょう。」

他ならぬ匠さんのご質問です。答えないわけにはいきません。

このような仕事をしておりますと、家庭というものは煩わしいものです。・・・お察しの通り、私は独身です。」

「淋しくはないのか？」

「考えた事ございません。このお屋敷を仕切るとは私にとって無上の喜びです。おまけにあなたを得宗寺家の跡取りに育てるといふ最高の使命を帯びましたからね。そんなことを口にする暇さえ無くなるというものですよ。」

「お前、オレはこの家に相応しいと思うか？」

「異論はありません。匠さんほど得宗寺家ならびに付随するグループ総帥の椅子に似つかわしい方はいらっしやいません。」

「あの人といい、お前といい、おかしいぞ。高校生のオレに天文学的資産を誇る得宗グループを任せるだなんて。本気で考えているのか。」

「私を見くびらないで下さい。ある意味私は沙織様よりあなたを知っています。今まで数ある誘惑を一切退けてきたのはトップになるためには邪魔だと考えたからでしょう？しかし全く遊ばないわけではない。視野を広げるための遊びは無闇に年を重ねた男より知っている。私が一番あなたを推す理由は、あなたが沙織様ひと筋。というところですよ。もちろん沙織様もあなた以外眼中にありません。」

「そんなことわからないだろう。他人の心などわかる人間なんているわけがない。」

「おっしゃるとおりです。しかし心というものには本人も気付かないうちに態度に表れるものです。私はお2人を幼少の頃から見てきました。確かにあなたは沙織様に対し表向きは非情なほど冷たい。けれど私には愛情表現の裏返しにしか見えないのです。・・・図星のようですね。・・・さあ、今日はここまでにしましょう。なにしろあなたには時間がない。寝食を忘れてかからなければあの膨大な資料を読むことすらできないでしょうからね。」

榊原自ら車のドアを開け匠を促した。家は隣同士でも何しろ広大な

敷地面積を持つ得宗寺家。まともに歩こうものなら30分以上かかってしまう。確かに今の匠にはそれさえも無駄にできない時間だ。思えた。

## 第9話

膨大な資料が収められたCDとDVDは匠が家に到着するよりも前に彼の部屋に届けられていた。それを見て彼は思わず顔をしかめた。1週間後に迫った剣道の全国大会が控えているのにこれら进行处理する時間は2週間しかないのだ。いや、とにかくやるしかない。と気を取り直し、早速パソコンに向かいCDを挿入した。当然のことながらパスワードを入力しなければならない。しばらく考えた後、彼はある文字を押した。『SAORI』  
一発OKだった。秀一が得宗グループを大事と思う同じくらい娘の沙織を可愛がっていたのを思い出したからだ。

1時間、2時間。彼は時間の経つのも忘れディスプレイに釘付けになっていた。それゆえドアがノックされても初めは気付かないほどだった。何度目かのノックでようやくそれに気づき、努めて冷静な声で入室を許可した。

「匠さん。お夕食を持って来たの。」

入ってきたのは沙織だった。日ごろ、両親と共に食事をする匠が一旦部屋に籠もってしまうと食事を摂ることすら忘れてしまうため、そういう時はいつも沙織が部屋まで食事を運んで来るのだ。

「・・・いらん。さっき昼食を摂ったばかりだ。」

振り返ることなく匠は言い捨てた。

「でも・・・もう9時よ。」

沙織の声が段々小さくなる。こういう時の匠は一段と恐ろしい。感情を表に出すことはめったにない彼が、更に冷静な時が一番危険だ、ということ沙織は身をもって知っていた。手を上げる事はせず言葉で相手をねじ伏せるのだ。

「何度も言わせるな。今からオレが良いと言うまでここに来るな。おふくろにもそう言っておけ。いいな。」

ジロリと一瞥すると再び匠はディスプレイに視線を戻した。

「は、い。」

仕方なく沙織はトレイを持ったまま匠の部屋から引き下がった。匠の伝言（命令に等しい）を父の正彦と母の明子に伝えると、2人はヤレヤレという表情をした。

「ごめんなさいね。沙織ちゃんにはいつも厄介ばかりかけるわね。」  
「本当だ。あいつは沙織ちゃんが誰の娘かわかっていないようだな。」

「

社長夫婦といってもこの2人は全く奢ったところがなく社員からも好かれていた。典型的な一般庶民の子を持つ親だ。言ってみれば匠はトンビが鷹を産んだようなもの。と噂する同業者もいた。

「いいえ。私が悪いんです。きつと匠さんの気持ちを逆撫でするようなことをしたのですわ。」

ホウとため息をつく沙織を見た両親は、なおさら彼女が気の毒になった。

「そんなことないわ！悪いのは匠よ。何があったか知らないけど、せつかく沙織ちゃんを作ってくれた料理に箸さえつけないなんて！」

「でもなあ。あいつは沙織ちゃんの作ったものしか食わんし・・・私達が躍起になってもどうしようもないしなア。」

匠のことになるとさすがの正彦も匙を投げているようだ。

「いいんです、おじさま。時間が経てば匠さんの機嫌も直ると思いますから、私のことは気になさらないで。それよりも良かったらこれ、召し上がって下さいな。」

気を取り直し、沙織は2人にトレイを差し出した。その後、冷めても食べられるようにとサンドイッチを作り、匠にお部屋の前に置いた。こうしておけばいずれ皿が空になることを経験から会得していた。

## 第10話

翌朝。沙織が朝食の支度を整え匠の部屋へ行くと皿はそのままになっていた。いつもと違うことに少々不安を覚え、軽くノックしたが案の定、全く反応がない。何度か繰り返すと中から「うるさい！来るなと言ったはずだ！」とイラついた声がした。他人に対しては滅多に声を荒げない匠だったが、沙織にだけは常に怒ったような物言いをした。怒られることには慣れっこになっていた沙織も食事を摂らないという匠の行動に不安を感じたのも無理はない。それを正彦夫婦に告げると。2人は「放っておきなさい。」とひと言、言ったのみだった。

遅刻するから早くでかけましょう。とドア越しに声をかけても応答はなし。やむを得ず沙織は1人で登校したが、結局匠は学校を休んだ。

放課後、剣道部副部長の佐々木から匠の欠席の理由を聞かれた沙織だったが、彼女自身、本人から何も聞いていないので返答に窮してしまった。今までこんなことはなかったことだ。

「周防が来ないと土気も高まらんし、弱ったなあ。来週全国大会があるって時に大将がサボってたらどうしようもないんだがなあ。何とか沙織さんの力であいつを引っ張り出してもらえないですか？」佐々木は本当に困った様子だ。とはいえ、頼まれた沙織もどうしていいのかわからないのだ。

「今日のことは私にもわかりません。今朝も怒鳴られました。」

「えっ。怒鳴る？あいつが？信じられない・・・」

「佐々木さん！」

その時、部員の米田が遠くから走ってきた。

「おい、ここだ。何か用か。」

「キャプテンが！キャプテンが佐々木さんはどこだって捜してます！早く来て下さい！」

「えっ、周防が！来たのか？」

思わず佐々木と沙織は目を合わせた。一体どういうことだ。とにかく一刻も早く戻らなくてはならない。挨拶もそこに佐々木は沙織の前から走り去った。

1日中、いや、昨夕からずっと不眠のまま朝を迎えた匠は、それこそ寝食を忘れ、ディスプレイに没頭していた。身体は心底疲れきっていたが、なぜか頭は冴え、時間の経過と共にそれは増していった。ふと気が付くと午後3時を少し回っていたところだった。練習に行く時間だ。学校は休んでしまったが、練習をサボるわけにはいかない。とにかく彼は家を飛び出し部室に向かった。

## 第11話

「周防！どうしたんだ！　おい！　心配したんだぞ！」

佐々木が米田を伴ってどこから戻って来た。

「すまん。やる事があつて昨日からずっとかかりきりになっていたんだ。悪かった。」

「昨日って？　じゃ、お前寝てないのか？　沙織さん心配してたぞ。」

「沙織が？」

「ああ、お前、彼女を怒鳴ったんだってな。オレらにはそんなところ見せないのに、彼女にはそうなのか？」

「そんなことはどうでもいいことだ。　さあ、練習、練習！」

佐々木の問いを受け流し匠は先に立って道場に出た。

1時間たつぷり汗を流すと、心体ともにスッキリした。帰りにどこかへ寄ろう、という佐々木の誘いを振り切り真っ直ぐ帰宅した。沙織がいるのはわかっていたので、部屋に入るなりインターホンで呼び出した。

「お前、佐々木にオレが怒鳴ったって言ったそうだな。」

「え。あ、ご、ごめんなさい。」

「今のオレはお前に関わっている暇はない。それくらいわかっているはずだ。」

「はい。　わかっています。」

「それなら余計なことで煩わすな。それにオレは今・・・もついい下がれ。」

匠は眉間を押さえ、ぐったりと椅子にもたれた。

今にも倒れそうな様子で出て行く沙織を目の端で追いながら匠はホウツとため息をついた。こんなことで時間を潰すわけにはいかない。約束の期日は刻一刻と迫っているのだ。目頭をギュツと押すとまたパソコンに向かった。彼にとってまた短く長い夜が始まるうとして



いた。

『お前に関わっている暇はない。』とか、『お前なんか眼中にない』等、今まで何度同じ言葉を言われたことだろう。理由はわかっていた。小さい頃から沙織は匠の前でよく泣いた。その顔を見た匠からこんなブスは見たことがないと言われ、それ以来匠の目には沙織は女の子として映っていないのだ。単なる家政婦。それだけの存在だった。それと最大の理由は、沙織が得宗寺沙織である、ということだった。上昇志向の高い匠ではあったが、他人から与えられた地位や名誉、財産には全く関心がなかった。あくまでも己の力でトップを目指す。それが彼の信条だった。だから沙織のバックにある得宗一門は彼の構想に取り入れられてはいない。よって沙織は家政婦以外の何ものでもなかった。しかし改めてその言葉を投げつけられるとこの上なく悲しくなった。好きになつて欲しいとは言わない。けれど嫌いにはならないで！彼女の心は常にそう叫んでいた。だがそれを口にすることはできない。口に出したら最後、オレの前に姿を見せるな。そう通告されそうだった。辛うじて涙をこらえ、キッチンに戻った沙織の脇を亜紀が鼻歌を歌いながら通り過ぎた。

「あ、亜紀さん。今はダメよ。匠さん、忙しいみたいだから。」

悲痛な思いで亜紀に警告すると、彼女はジロリと沙織を見た。その表情は白蛾のようだった。沙織の背中にサツと冷たいものが走った。「何を言っているの、沙織さん。私は特別なのよ。あなたとは違うの。得宗グループだか何だか知らないけれど、お兄さんは私のものよ。少しくらい顔が綺麗だからってでしゃばるんじゃないわよ。」

「わ、私、そんなつもりじゃ・・・」

「そうじゃないって言うの？だったら見てなさいよ。お兄さんがどう出るか。」

亜紀は勝ち誇って匠の部屋へ向かった。そして案の定、そのまま居座った。

## 第12話

匠の亜紀に対する態度に失望し、食事の支度も忘れ屋敷に戻った沙織を榊原が優しく迎えた。いつもと変わらぬ慈しみにそれまで耐えてきたものが一気に崩れ、沙織は彼の胸に顔を埋め泣いた。一瞬榊原は驚いたようだったが、理由は聞かずただ彼女の背中を何度も撫でてやった。そうすることによって彼女が落ち着くことを知っていたからだ。

「・・・ごめんなさい。 私ったら・・・」

ひとしきり泣いた後、沙織は取り乱した自分が恥ずかしくなった。

「大丈夫ですよ。 私はお嬢様の守護天使ですからね。 ・ ・ それよりもだんな様がお呼びですよ。」

「お父様が？」

途端に涙が止まった。 沙織にとって2番目に怖い人物が父、秀一だった。 もちろん1番は匠である。

「はい。」

榊原に守られながら恐る恐る父の部屋へ向かった。

ノックをすると、入りなさい。 という低い声がした。 その超えは彼女にとって死を宣告されるようなものだ。 沙織は榊原の袖を掴み、ためらいがちにドアを開けた。

秀一はたいそう機嫌良く娘を見た（といっても沙織にとってそれはおよそ機嫌の良い顔には見えなかった。 むしろ厄介者扱いされているように感じた。）

「座りなさい。 ・ ・ ・ 榊原。 私は1時間後に出かける。 チケットの手配を。 行く先はフランクフルトだ。 再来週まで戻らない予定だ。」

「はい。 かしこまりました。」

頼みの綱の榊原は用事を言いつけられ、ていよく追い払われてしまった。 これで沙織は天涯孤独の気持ちになった。

「……昨日。匠と話をした。聞いてるかね。」

相変わらず父の声は重々しい。沙織は答えることが出来ずただ首を振った。

「おまえに縁談があるのだ。相手はさる国の皇子だ。」

ハツとして顔を上げた沙織の表情はシヨツクのあまり凍り付いていた。来るべきときが来たのだ。早いか遅いかの差であって、それは彼女が得宗寺家の跡取りとして生まれたための宿命であった。

「……お、とう……さ、ま。」

「なんだ。」

「匠さんは、その話を聞いたの、ですね。」喉に声が張り付き思うように言葉が出ない。

「そうだ。」

「匠さんは何と？」

「それを言う前におまえはどうなのだね。今の話を聞いてどう思った。」

「……しかたがありません。・私には選択の余地は、ありません。」

「では、甘んじて受けるのだね。」なぜか秀一の声には怒りがこもっていた。

「はい。」

「そうか。では決定だ。おまえは今週末来日するその皇子と見合いをしないさい。私は同席することはできないが、堅苦しいものではない。あるパーティに出席するのだ。そこで彼と挨拶を交わすだけだ。いいな。仔細は榊原から聞きなさい。」

それだけ言うと秀一は出かける用意を始めた。心なしかイライラしているようだ。

「お父様。匠さんは何と？」

「なぜ彼を気にする。彼も一人息子だ。そのくらいおまえにもわかるはずだ。私は出かける。もう用はない。」

くもの糸のような頼みの綱もあっさりと切られてしまった。自分という存在は父や匠にとってなんだったのだろうと、これまでになく悲しい気持ちになった。放心状態のまま父の部屋を出た沙織は、自室に戻ると緊張の糸が切れたのかそのまま倒れこんでしまった。

### 第13話

美味そうなロースとビーフの画像を見ているうちに突然空腹感を覚えた匠は、傍に亜紀がいることも忘れインターホンで沙織を呼んだ。だが応答がない。代わって母、明子の声がした。

「沙織ちゃんなら帰ったみたいよ。なんかとっても辛そうな顔をしていたけど。あんた・・・」

明子が言い終わらないうちに匠はスイッチを切った。沙織が自分の許可なく帰る、ということは今まで一度たりともなかったことだ。異変を感じた匠は、すぐ彼女の携帯を鳴らした。しかしコール音だけが響くだけで応答はない。何かあったのではないか。その時、匠の携帯が鳴った。それは榊原からだった。

「えっ。沙織が？」

沙織が倒れたと聞かされた匠は、どこに行くの？と聞く亜紀を振り切って家を飛び出した。勝手知ったる他人の家。匠は沙織の部屋に飛び込んだ。彼女の部屋はおよそ女子高生のものとは思えないようなものだ。生活必需品のみがきちんと整理されて置いてあるだけだ。1日の大半を周防家と学校で過ごす彼女にとって、自分の部屋は寝るためにだけ使用するものだったからだ。その部屋の隅に彼女のベッドがあり、使用人に見守られ沙織は寝ていた。使用人たちは匠の顔を見るなり申し合わせたように部屋を出て行った。すると代わりに榊原が氷の入ったボウルとタオルを持って入ってきた。

「いったい何があった！」

匠は榊原の顔を見るなり彼の胸ぐらを掴んだ。

「落ち着いて下さい。あなたが興奮しても何もなりませんよ！ゴホゴホ・・・フー。さすが武術の有段者の力はすごい。」

掴んでいた手を離すと、榊原はホッとしてひと息ついた。手は離れたものの匠の瞳は怒りで燃えている。

「なにがあったと聞いている。説明しろ。」

「だんな様から今週末、見合いをするように命ぜられたようです。」  
「なんだと！あの人がオレに白羽の矢を立てたのは昨日のことじゃないか！」

「その通りです。ですが断ったのはあなたですよ、匠さん。ゆうべ、だんな様は私に匠さんが承知なさらない場合を考えて2重の手を打つと仰いました。もしこのままあなたが何もしなければお嬢様はご卒業を待たず嫁ぐことになります。」

「じゃ、オレがこれからやろうとしていることは全部無駄ということじゃないか！」

「それは違います。今回の件はあくまで滑り止めの事です。だんな様はあなたを第一候補に、とお考えです。ですからあなたは計画通り。」

「もういい！オレはあの人の言いなりにはならない。得宗寺家などくそくらえだ！」

「そんなことを仰ったらあなたのご両親はどうなると思います？周防建設は得宗グループの傘下に入っておられる。社員もろとも路頭に迷うはめになりかねませんよ。あなたはそのへんの高校生とは立場が異なるということをご存知のはずです。だんな様も無闇にこの話を持ち出したではありません。それに・・・あなたが他の候補者より数段有利なのですよ。あなたはだんな様の一番のお気に入りですからね。」

最後はウインクをして見せる榊原に匠は絶対だまされないぞ、と心に誓った。沙織が見合いをするのは仕方のないことだろう。しかしそれなら自分は候補から外して欲しかった。確かに自分はその態度とは裏腹に沙織を全霊を込めて愛している。だからといって『分』というものはわきまえているつもりだ。それを虎の子を起こすようなことをされた挙句、一瞬にして打ち砕かれてしまったのだ。一般人なら諦めもしようが、匠は榊原が言うように一般の高校生とはわけが違った。相手が誰であれ、こんな屈辱を黙って受け入れるわけにはいかないのだ。

## 第14話

「榊原。」

「はい。」

「オレが浅はかだった。テストなんていう言葉に踊らされ、とんでもない間違いを起こすところだった。オレはこの件から降りる。」  
怒りで身体中が爆発しそうなとは逆に、匠の口から出た言葉は非情に冷たいものだった。

「では、お嬢様をこのまま見殺しにするおつもりですか。」

「誰がそんなことを言った。それとこれとは別だ。オレは得宗グループの覇権など、ひとつたりとも欲しくはない。ただ沙織に関しては問題が違う。あの日。オレはおまえに言った。こいつをくれ、とそれは今でも変わらない。こいつが自分から離れていかない限り、オレは手放すつもりはない。」

「匠さん・・・わかりました。あなたの覚悟がそれほど強いなら、私は総力を上げてあなたの力になりましょう。」

年はかなり下だが、榊原は匠に畏敬を感じた。この人なら余生を賭けても惜しくはないと。

沙織の意識はその後3日間戻らなかった。その間匠は人任せにすることなく看病を続けた。常人なら看護している方が倒れてしまうほど根を詰めていたが、匠の体力はその程度で参ったりはしなかった。

それでも3日目の夜ともなると、疲労が身体全体に押し寄せた。ついウトウトしかけたところを誰かに呼ばれた気がしてハッと顔を上げると、視線の先に沙織の顔があった。

「気が、ついたのか。」嬉しいのだがその感情を上手く表現できない。それでも沙織には十分通じた。

「匠さん・・・ありがとう。・・・傍にいてくれたのね。」

「馬鹿なことを言うな。オレはついさっき来たところだ。」

「・・・そうね・・・」

静かに微笑む沙織に匠の強がりも効き目がない。

「ったく。おまえのせいでオレはずっと食事抜きだ。オレが倒れたらどうするつもりだ。」

「あ、ごめんなさい。次からはちゃんとするわね。」

「おまえ。見合いしろ。」

「え？」

「見合いしろ。」

「そんな・・・」

「おまえだつてわかつていたはずだ。お互い一人っ子だしな。特におまえの肩にはどでかい会社がついている。それなりの男でなければやってないけない。」

「そ、そんな。」長じてから泣くことなどあまりなくなった沙織だったが、匠の言葉にポロポロと涙をこぼした。

「・・・そんなにイヤか。・・・返事がないということはイヤだ、ということか。・・・おまえにはこれまで随分世話をかけた。・・・そんなにイヤなら今回だけは助けてやる。」

「え？」

「助けてやると言ったんだ。何度も言わせるな。」

「ごめんなさい。でも、本当なの？」

「ああ。それにはおまえがその席上にいることが不可欠だ。オレに考えがある。かなり無謀なやり方だがな。」

「匠・・・さん？」

沙織は不思議そうな目で匠を見上げた。



## 第15話

週末。完治しない身体をピンクのドレスで着飾り、沙織は父の命令通り、あるパーティに出かけた。それはナールベルシュタインという欧州の小さな国の皇子歓迎式典だった。匠に任せておけば大丈夫、という榊原の言葉に勇気付けられ来たものの、沙織の心は重かった。ここで失敗すれば得宗グループのみならず、国対国の問題にまで発展しかねないからだ。

型通りの挨拶をしていると、突然、高らかにファンファーレが鳴った。いよいよ今夜の主役ナールベルシュタイン第3皇子、ツェンベルの登場だ。大きな拍手と共に現れたのは、皇子というイメージからはほど遠い、50がらみの小男だった。小さいだけならまだしも、髪も薄く、おまけにかなり太っていた。彼を見た瞬間、沙織は卒倒しそうになった。普段、彼女は外見だけで人を判断する女性ではなかったが、これではあまりにもひどすぎる。そう思った。沙織はギュツと目をつぶり心の中で叫んだ。（匠さん！）しかしこの試練に耐えなければならぬのだ。

皇子はそれぞれの代表者に笑顔で応対しながら沙織の2人前まで近付いた。万事休す！ついに観念した。その時、不思議なことが起こった。皇子がその人の前に立ち止まったまま動こうとしないのだ。侍従が気を利かせ皇子を促してもあいまいな返事をするだけで1人の人物との会話が夢中になっている。対面する。それさえイヤなのにその時間が遅くなるのはもっとイヤだった。重く沈んで行く沙織の耳に後ろからヒソヒソと声がした。

「皇子は男色らしいのですよ。今回はそういう男がいないとタカをくくっていた重臣たちはあれを見て慌てているでしょうね。」

「そうなんですか？確かにあの方はお美しいですわね・・・」云々（あの皇子が・・・）沙織はさらにショックを受けた。お父様はこ

んな人に私を嫁がせようとしていたのだわ。打ちひしがれた彼女の腕をそばに控えていた榊原がつついた。顔をあげるとそれは榊原に扮した匠だった。

「た！」

シツ！と人差し指を口にあて、匠は少しづつ沙織を後方へと導いた。人の目に触れないところまで注意深く移動すると、2人は急ぎ足で会場を出た。外には全てを了解した本物の榊原が車を待機させていた。

その車に急いで乗り込むと、匠はホウ！と大きく息を吐いた。展開の速さに沙織は驚くばかりで何が起きたのか理解できない。問いたげな眼差しに匠は面倒くさそうな表情をしたが、説明が必要だと思ったのか少しづつ話し始めた。

## 第16話

「榊原にツェンベル皇子の行状やプロフィールを調べさせた。

あれで年は35だそうだ。まあ、そうは見えんがな。結果、あいつの異常な趣味が判明した。つまり狩猟と若い男あさりだ。常にホストまがいの男を侍らせて昼夜問わず色欲に耽っている事もわかった。それで榊原に大至急そういった傾向の若く美しい男を集めさせた。もちろん金さえ貰えばどんな相手でも構わない、という条件つきでだ。そしてあの男を選んだ。おまえよりも先にあの男を引き合わさなければならなかったから苦労した。あとのことは心配する必要はない。」

匠の説明でも沙織には納得できない部分があった。

「お父様は皇子のその。」

その言葉を口にするのもおぞましい、とばかりに沙織は語尾を濁した。

「おそらくはな。あの人になぬかりはないだろう。知らなかったのは榊原だ。これは職務怠慢だ。」

「知っていて私をあんな人のところに。」

思い出しただけでもゾツとする。

「想像だが、オレを試していたような気がする。」

「試す？ でも、どうして。」

「見合いの席を設けることでオレがどう出るかを、だ。」

「え？」

「まんまと一杯食わされた気分だ。」

「じゃ、私は。」

「利用されたんだ。だからおまえはバカなんだ。あの子の思惑も読めず、表面の話だけで倒れるなんて。何年あの子の子供をやっているんだ。まったくおまえの頭は脳みそが溶けてしまっているようだな。まあいい。今に始まったことじゃない。」

むつつりと外を眺める匠に沙織はポツと顔を赤らめ下を向いた。

「ごめんなさい。私、匠さんに迷惑をかけてしまったのね。」

「別に、謝らなくていい。これであの人の魂胆がわかった。」

「え？」

「どうしてもオレを担ぎ出したいらしい。」

「どういうこと？」

素朴な疑問に横目でジロリと一瞥し、鼻で笑う匠。

「おまえに言ってもわからん。」

撥ね付けられ再び下を向く沙織。

## 第17話

「それよりもおまえ、亜紀に何か言われたのか。」

「いいえ、なにも。」

「亜紀の性格はオレも知っている。迷惑な話だが、おばさんの頼みだ。辛抱してくれ。」

「はい。」

初めてかけられた優しい言葉に、沙織はうれしさよりも戸惑いの方が大きかった。

「何か、あつたの？」

「なぜそんなことを聞く。」

「だって、匠さん、優しいから。」

「バカな事を言うな。いつもと同じだ。」

「は、い。」

沙織にとって匠の言葉は絶対だ。たとえ反論したくとも身体が全く機能しない。匠以外の人間と応対するときなどは、いかなる場合でも対処できるのに。幼少の頃からの習性が身についているのか、匠の前での沙織の力は無に等しかった。

「もういい。少し静かにしてくれ。」

匠は眉間を強く押さえ、目をつぶった。間もなく軽い寝息がした。その端正な顔を眺めていると、あの皇子よりも匠の方が一国の皇子に相應しいと思う。ひいき目に見なくてもそれは妥当な意見だろう。着替える間もなく車に乗り込んだのだが、その黒燕尾がことさら凛々しい。背丈もある（春の身体測定時に188cmあった）比べたくはないのだが、さっき目の前で見た皇子とは比較にならない。改めて沙織はため息をついた。

「どうした。」

ふいに声をかけられた。

「あ、あの。寝ていたのではないの？」

「そうだ。寝ていた。だが、おまえにジロジロ見られていては寝てなどいられるわけがない。まだ何かあるのか。」

「あ、お、お父様はまた、同じことをさせると思う？」「思ってもみなかった言葉が口を突いて出た。」

「ああ？　またおまえはバカなことを。　あの人はオレを試した、とさっき教えただろう。同じ手を使うような人じゃない。今度は正攻法でくるかもしれない。」

「そ、そうよね。私ったら何を言うのかしら。」

「いつものことだ。おまえは試験の点数はいいが、時々トンチンカンなことを言う。オレは今まで何度もそれで頭を悩ませてきたんだ。少しは考えろ。」

「はい。」

シユンとなり下を向くと、絹のような黒髪がサラサラと流れた。匠の目元が少し緩んだが、第三者がそれを見れば苦痛で顔が歪んだ、としか見えないだろう。それもほんの一瞬のことで、再びその表情はいつものポーカーフェイスに戻った。

## 第18話

「おい。そろそろ着くぞ。いつまでメソメソしてるんだ。」

車はいつの間にか周防家近くまで来ていた。慌てて気を取り直す沙織に、榊原が社内電話でその旨を伝えた。一旦、家に戻り身軽な服装に着替えてから屋敷に行きたいと告げると、ほどなく車は周防家の門前で止まった。車から降りた匠は2、3言榊原と言葉を交わし、そのまま中へ入って行った。置いてけぼりを食った沙織ではあるが、何も言わないと言う事はもう起こっていないことだと解釈した。匠の無愛想にいちいち腹を立てていたのでは身が持たない。なるべく良い方に考えなければならぬのだ。そんな心のうちを察するはずもないのだが、また榊原から電話がきた。

「匠さんはお嬢様をとて心配なさっておられますよ。ご安心下さい。」

「・・・そんな風に言ってくれるのはあなただけよ。ありがとう。」

「本当のことですよ。私はでまかせを言っているわけではありません。本当に匠さんは。」

「いいのよ。わかつているわ。今日助けてもらったからそれで十分よ。」

榊原の優しさは幾度沙織の身体を包んできた事だろう。そのたび泣きたくないのに涙が出てくる。

「それにしても。お二人が会場から出ていらした時は後光が差していました。神々しいばかりでした。アポロンとヴィーナス。とてもお似合いでしたよ。誰もが認めるカップルですよ。」

珍しく榊原が興奮している。匠が美しいのは周知の事実だ。しかし自分が美しいなど、露ほども思ったことのない沙織には、榊原の賛辞も乾燥した砂漠の中で聞いているみたいにしか思えない。それも匠の長年培ってきた技に他ならない。彼女を見た人は口を揃えて美しいと言う。おまけに優しく、金持ち特有の奢り高ぶったところが

微塵もない。したがって榊原の誉め言葉は決して誇張されたものではない。それを匠はずっと否定し続けてきた。ことあるごとに彼女の容姿を皮肉り、その絶対権力をもって彼女に美しさを認識させることなく成長させた。よって榊原の言葉は沙織にとって気休めにしか聞こえなかった。

「気休めを言わなくても私にはわかっているわ。」

「気休め？私にお世辞が言えないことはご存知でしょう。どうしてまた、そんな風に思うんです？」

「匠さんが言うからそう思うの。」

「匠さんが？」榊原は受話器を掴んだまま涙が出るほど笑った。

「何がおかしいの。」

「い、いいえ、しつれい、いたしました。で、でも。こんなにかしい話は久々に聞きました。あははは！」

「おかしい？何がそんなにかしいの？」

「いえ、申し訳、ありません。でも、これは私の口から申し上げるより、匠さんご本人に聞いてみて下さい。くくくく、あー、笑える。」

なおも笑い続ける榊原に、沙織はプツとほっぺを膨らまし受話器を置いた。2人の胸中をよそ目に、高級車は静かに得宗寺家の敷地内へと入っていった。



## 第19話

約1時間後。沙織は周防家のキッチンに顔を出した。匠の父、正彦は仕事で不在だったが、母の明子はソワソワして沙織を招き入れた。何をそんなに慌てているのだろう。

「沙織ちゃん！大変なのよ！亜紀ちゃんが！」

「えっ。」不安がよぎる。

「亜紀ちゃんが匠の食事を作ると言ってきたの！何とかして！」

「おばさま。落ち着いて。」

そんなことか。ホッとした沙織だが、明子の慌てぶりは尋常ではない。それもそのはず、以前沙織の代わりに明子の手作り料理を出したところ、大暴れされた経験があるのだ。それを思い出し微笑む沙織に、明子は矢継ぎ早に言葉を浴びせかける。

「おばさま。大丈夫ですわ。匠さんに任せて下さい。食べてくれれば良し。そうでなければまた私が作りますから。ね？おばさま。」

天使のような笑顔で優しく諭されると、誰もがたやすく暗示にかかってしまう。

「そ、そうよね。食べてくれればもしかしたら私の料理も大丈夫ってことですものね？」

うなづく沙織に明子は更に安堵の表情になった。と、次の瞬間、ものすごい足音がした。（ああ、やっぱり・・・）2人は心の中で十字を切った。

「母さん！なんなんだ、あれは！すぐ止めさせろ！」

匠の顔は怒りで燃えている。明子の隣に沙織の姿を認めると、怒りの矛先は彼女に向けられた。

「おまえもおまえだ！早く来ないから亜紀がとんでもないことをしでかすんだ！早く何とかしろ！」

「お兄さん。いったいどうしたのよ。」

わけのわからない亜紀は匠の後を追って来ると、その腕に甘えながら絡みついた。ところが思い切り手を振り払われ重心を失った亜紀の身体はそのまま倒れた。

「いいか！すぐやれ！」

しかも匠は亜紀を完全に無視した。手を払った時もうるさい虫を追い払う感じだった。

「はい。」

こんなことには慣れている沙織と明子はすぐ行動を起こした。まず、掃除道具を携え匠の部屋へ行き、今や生ごみと化した、在りし日は豪華だったろう料理を片付け、同じく散在した皿やコップ類を集めた。その間匠はただじっとリビングのソファに横たわっていた。状況を飲み込めない亜紀だけがヒステリックにわめき散らし、果ては自分が使った鍋やフライパンを思い切り叩きつけ、こんな家、二度と来ない！と悪態をついて出て行った。

## 第20話

すっかり片付け終えたのがそれから2時間後。外はすっかり暗くなっていた。匠の父、正彦が帰宅し事の顛末を知ると、ヤレヤレとつぶやき胸を撫で下ろした。

「いや、私もね、亜紀ちゃんには閉口していたのだよ。あの子は言っても聞く耳を持っていないからねえ。実際こうなつて正直ホツとしたよ。沙織ちゃんなら大歓迎なんだが、あの子は・・・ね？ さあ！母さん、今晚はお祝いに外食でもしようか！」

外食はほとんどしない匠を置いて（いつものことだが）2人は仲良く出かけて行った。残された沙織は息つく暇もなく匠のために夕食の準備を始めた。

匠の好物のポテトサラダ、ひじきの煮物、サバの味噌煮、鳥のから揚げ、きゅうりの一夜漬け、デザートのにんご。和食が主体のいつも通りの食卓だ。さきほどとは違い、今度の匠はすこぶるおとなしい。作ったのが沙織だとわかつているせいだ。それを見て沙織の心は複雑だった。匠が余人の手料理を口にしないことは本当にうれしい。もしも一生このまま暮らせるのなら・・・逆にそうならなかった場合・・・想像しただけでも身震いしてしまう。

「なんだ。」

黙々と箸を動かしているだけの匠に突然声をかけられ、下手な弁解までしてしまう。

「あ、あの。今日のごはん、どうかしら。お口に合うかしら。」

「くだらん。おまえの頭には考えるという能力がないのか。」

「ごめんなさい。」

「ったく、いちいち美味いかどうか言わないと作れないのか。」

「そ、そういうわけじゃ。」

そこで会話が途切れた。再び箸を黙々と動かす。と思いきや、匠は

パタと箸を置いた。目を見張る沙織を匠はじつと見つめた。

「得宗寺秀一氏からオレは得宗グループの極秘情報を2週間で掌握しろと言われた。見返りは次期総帥の椅子とおまえだ。しかし、オレは断った。どちらにしても荷が重過ぎる。それにお互い一人っ子だ。グループに興味がないのかと聞かれたから、ある。と答えた。するとそれが出来たら即刻社長だと言われ、できなくとも10年後には社長の椅子をやる、と言われた。おまえと共に。オレの性格を熟知したやり方で克服させようという魂胆だ。オレも初めはTryしていたがおまえの見合い話でブチ切れた。オレはこの件から手を引く。決められたレールの上を歩くなんて真っ平ごめんだ。」

つまり、オレの将来は多難ということになる。周防建設は得宗グループの傘下に入っている。オレが秀一氏に齒向かうということはすなわち、周防建設の行く末は見えていってしまう。それで、もあの人の言いなりにはなりたくない。おまえ。いいかげんにオレから離れろ。そうしないとおまえまで巻き添えを食うぞ。」

「えっ。」

「もうこの家に来るな、と言っただ。」

突然の匠の絶縁宣言に沙織は、一瞬、言葉を失った。

## 第21話

「そんな・・・そんなこと・・・」

「オレはおまえのたを思つて言つてゐる。」

「でも、そうしたら匠さんどうするの？食事は？お掃除は？お洗濯は？」

「そんなものはどうにでもなる。おまえがどうこづ氣にする事じゃない。」

「そんな・・・」

「明日からそうしろ。わかつたな。」

「・・・イヤ・・・」

「なに。」

「イヤつて言つたのよ！そんな、そんなのあんまりだわ！」

今まで一度たりとも反抗したことのない沙織が初めて涙ながらに訴えた。

「口答えするのか。」

どんなことでも唯々諾々としてきた沙織の抵抗に戸惑いを隠せない匠。

「だって、だって、私からあなたの世話を取ってしまったら、生きている意味がなくなるわ！お願い、匠さん。他のことなら何でもするわ。顔を見せるなというならそうします。でもそれだけは奪わないで！おねがい・・・」

その場で泣き崩れる沙織に、匠は動揺を氣取られまいとことさら強く言い放った。

「勝手にしろ！」

苛立ちを言葉に変え、キッチンを出るとそのまま匠は自室に再び籠つてしまった。

「榊原か。話がある。・・・来客？・・・そうか、じゃ明日。」

これまで難問が発生すると必ず匠は榊原に相談してきた。沙織の抵抗は匠にとっておよそ皆無に等しかった。他の人間に反対されることはこれまでもあった。匠の性格からして味方もいれが、敵対する人間もかなりいた。それでも本来の姿勢を変えることなく生きてきた。それが絶対あり得ない人間の抵抗にあったのだ。理由はどうか、沙織の口から拒絶の言葉が出ようとは思ってもよらなかった。その優しさから匠が友達をからかったりしたときなどは諷めることは何度かあった。ところが自分のことで拒むことがあるうとは。今でも信じられない。4日後に大会を控え、彼の神経はピリピリと張り詰めていた。

## 第22話

泣きながら食器の片付けを終え、自宅に戻ろうとした沙織は、ふと、裏門の前にたたずんでいる女性を見かけた。黙って見過ごせばどうということはないのだが、彼女にはそれができない。思わず声をかけた。その女性はハツとした様子で立ち去ろうとしたが、素早く沙織に腕を掴まれ顔を背けた。

「この家に何か御用ですか？」

「い、いえ。」

「どなたかをお尋ねになられたのではないのですか？」

「いいえ、違います。」

よく見ればまだ若そうだ。身なりは質素だが、悪印象を与えるものではない。仔細があると踏んだ沙織は自宅へ招きいれようとしたが、その女性は強固にそれを拒んだ。寒い季節ではないといっても夜は冷える。沙織は再び周防家に引き返した。

正彦夫婦が帰宅していないのでその女性をリビングに通し、沈む心を叱咤し、匠を呼んだ。初め、拒否されたが必死で頼み込み、彼を部屋から連れ出すことに成功した。見慣れている沙織にとって匠の出現は心強い限りだが、無表情で現れた匠を見て女性は怯んだ。なにしろ上背がある上に美しい顔立ちをしているのだ。そういう男がムツツリとリビングに入ってきたのだ。並みの人間ならおびえるのも無理はない。

「大丈夫ですわ。この人はきつとあなたの力になってくれます。事情を話して下さいますわね？」

相手を包み込む沙織のオーラは、かたくなな女性の心を開いた。それでも匠に気を遣い顔を上げようとしなない。

「さあ。顔を上げて下さい。私になら話せるでしょう？この人は無視しても平気ですから。ね？　さあ。」

匠は無視、という言葉に眉をひそめたが、こういった場合の沙織には逆らわない方が良く、ということを知っていた。

「は、い。」

ようやく顔を上げた女性はやつれた表情をしていたが、とても美しい顔立ちをしていた。



## 第23話

「・・・何から、お話ししたらいいか・・・」

「そ、う。 それでは私から伺ってもよろしいかしら？」

「え、ええ。 そうしていただければ・・・」女性は持っていたハンカチを握り締めた。

「まず・・・そうですね。 お名前をお聞かせ下さい。」

「名前は、鈴波早苗、と申します。」

「すずなみなえ、さん。・・・そうね、早苗さんとお呼びしてもよろしくて？・・・良かった。じゃ、改めて、早苗さん。・・・おいくつですか？女同士ですからざくばらんにしたしましうね。あ、忘れていましたわ。私は、沙織といいます。沙織と呼んでくださいね。」

人助けをする際、沙織は決して姓を名乗らない。得宗寺と聞いてビビらない人間はいないからだ。（匠を除いて）

「年は、40です。」早苗と名乗る女性は少しづつ落ち着いてきたようだ。

「まあ！私、もっとお若いと思いましたわ。だって、とてもお綺麗でいらつしやるから。」

（出た。沙織の得意とするおだて戦法）匠は心の中でほくそ笑んだ。  
“美しい”沙織にそういわれて落ちない女はいないのだ。・・・これでこの女性は饒舌になるだろう。

「そんな・・・」頬を染める早苗。

「そうですね。ね？匠さん。」

「あ、ああ。（こいつ。さっきの仕返しをしゃがって）」

ふいに声をかけられ匠は返事のあと心の中で毒ついた。

「この近くにどなたかお知り合いの方がいらつしやいますの？」

「え？え、ええ。まあ・・・」再び口ごもる。握ったハンカチがボロボロになりそうだ。

「私達で捜して差し上げますわ。何と仰る方をお探しですか？」

「い、いいえ。その人には会って来ました。」

「そうです。それで、その方に何か言われましたか？」真剣な顔で覗き込む。

「いいえ。何も・・・もう来るな、と言われただけです。」

「まア！なんてひどい事を！私、ひと言、言っただけですわ！どこのどなたですか！」

匠の眉がピツと上がった。オレと同じことを言うヤツがこの近辺にいるとは。

「いいえ！いいんです。私があの人との約束を破って来たのが悪いんですから。」

そこで早苗はさめざめと泣き出した。

## 第24話

「まあ。どんな約束をなさっていらしたの？」

沙織の問いにも早苗はただ首を振るばかり。何とか重い口を開かせようとなだめたりすかしたり、沙織の努力は並大抵のものではない。いつもこんな風にして情報を聞き出しているのか、匠はある意味沙織の手腕を誉めなくなった。ところがそれでも早苗は口を開かない。途方に暮れたかと思いきや、沙織は予想外の行動に出た。急に立ち上がると一旦リビングを出て行き、しばらくして戻って来るとその両手には2人分の料理を載せたトレイがあつた。

「匠さんはさつき食べたからいらないわね？ さあ、早苗さん。おなか空いたんじゃないやありません？ 実は、私、おなかぺこぺこなんです。一緒にいただきますしょう。私が作ったものですからお口に合うかどうかわかりませんが。どうぞ。」

沙織は早苗の手に箸と茶碗を握らせると自分から先に食べ始めた。いくら空腹だとはいえ、沙織は良家のお嬢様だ。ガツガツ食べるはずはないのだが、今回に限り、匠の目には焦って箸を口に運んでいるように映つた。しかもろくに味わっていない様子だ。早苗に対し、どう対処していいのか方法を模索しているのかもしれない。それでも早苗の目には沙織の食べ方は優雅に見えたようだ。再び泣き始めた。

「あら、ごめんなさい。私ばかり。・・さあ。ご遠慮なさらず。もしかしたらこの人のことを気になさっているの？ この人は。」

そう言いかけたところで早苗の口から意外な言葉が出た。

「周防匠様。ですね。存じ上げております。そしてあなた様は得宗寺沙織さま。」

「え?!」

驚きのあまり匠と沙織は顔を見合わせ、目をしばたいた。なぜオレ達、私達のことを知っているのだらう。2人の驚きぶりを見て早

苗の口元にかすかな笑みが浮かんだ。

「申し訳ありません。びつくりさせてしまいました。．．私．．お2人のことを存じ上げております。．．特に、沙織様のことはご出生の際から。」

相変わらずハンカチをもみくちやにしているが、その表情には落ち着きが見えてきた。

「私が？生まれた時から？ いったいどういことですか？」

「はい。私も立ち合せていただきました。それは美しいお嬢様でございました。奥様は元々お身体の丈夫な方ではございませんでしたが、それはもう、とてもお喜びになられて．．．昨日のこのように思い出されます。」

早苗の目には懐かしさだけではないものが浮かんでいた。

「．．．本当はこちらに伺うべきではありませんでした。でもどうしても主人に会わなければいけなくなつて．．．」

「ご主人？あなたのご主人がうちにいらっしゃいますの？ いったいどなた？」

2人を良く知つていふというこの女性の言う主人とはいったい誰なのだろう。さすがの匠も思案が浮かばない。なにしろ得宗寺家で働く人間といつたら数知れないのだ。それを1人だけに特定することなど不可能に近い。もう少し情報が欲しい。匠の頭は徐々に回転してきた。

「いいえ。私がここに來たせいでご宗家に迷惑がかかつてはいけません。これで失礼いたします。あ．．．本当にお2人とも大きくなられて．．．奥様もお喜びでございましょう。」

あとは嗚咽ではつきり聞き取る事ができない。早苗は沙織が止めるのを振り切つて周防家を飛び出した。

## 第25話

「・・・匠さん、どう思います？」

さっきの勢いはどこへいったのか、沙織の口調は不安げだ。

「・・・あれではどう思うもないだろう。勝手に推測するしかないが、それは偏見を持つことになる。慎重にならないといけない。」

「いったい誰なのかしら。うちにいる人って。」

「憶測だけで判断するな。いずれにしても、そのうち何らかの進展があるだろう。」

「進展？どうしてわかるの？」

「おまえ、さっきの話、聞いてなかったのか。うわさ好きのババアよろしく、根掘り葉掘り聞いていたじゃないか。」

「ババアって！ まあ、そうなんだけど。」

「ったく。おまえのバカさは天然か。」

「ごめんなさい。」

「あの人は止まれぬ事情があつて主人に会いに来た。と言っただろう。あの様子ではかなり切羽詰まつた事情のようだ。・・・やはり、もう少し様子をみよう。おまえは屋敷に戻つてそれとなくいつもと違う行動をする人間がいなかチエツクしろ。少しでも不審な行動を起こす奴がいたらすぐ知らせるんだ。いいな。」

「はい。」

半信半疑のまま、沙織は屋敷に戻つた。はからずも、家にいる使用人達を疑つてかかることになつてしまつたわが身を恨みたくなつた。悪事を働いたわけではないが、1人1人を疑つてかからなければならぬということがとてもイヤだった。それでも匠の言葉に逆らう事はできない。沙織の本質的な部分がそうさせてしまうのだ。

疑つてかかると得宗寺家の男達全員が怪しく見えた。父である秀一は除外してもいいだろう。それ以外はダメだ。圏外に置く事は出来ない。忠実な榊原しかり、である。新しく加わつた使用人は・

・いけない！いけない！そういう先入観が物事の判断を狂わせるのだ。それは匠がよく口にすることだ。沙織はそれと気付かれないように、注意深く彼らを監視することにした。

## 第26話

剣道大会の当日。匠はいつもと変わらぬ様子で自宅を出た。このところ練習不足のせいかどうかとも調子が出ない。増して神経を悩ます出来事が多すぎて練習に身が入らないのだ。オレは普通の高校生活をしたいんだ！そう叫びたくなるほどだ。しかし周囲がそれを許さない。それを痛感するたび、新たな血が沸きあがるのはもっと悔しい。沙織はあの日以来、逐一報告してきているが、内容にはほとんど変化はない。本当に細かくチェックしているのか疑わしいほどだ。

準々決勝までは大将の出る幕はなかった。ところが準決勝戦で思わぬ伏兵が現れた。やはり私立の烏城高校。名前が表わすとおり、部員全員が黒づくめだ。部員ばかりではない。応援団全てが真っ黒だ。朱雀高校は清潔をモットーにしているため胴着は上下真っ白だ。見た目も正反対なら流儀も異なるらしい。正攻法で攻める朱雀の面々に対し、相手は反則ギリギリのところで攻めてくる。先鋒、次鋒が倒れ、中堅が倒されれば終了、というところで何とか持ちこたえ、とうとう大将である匠の出番が回ってきた。卑怯な技が大嫌いな匠ではあるが、相手の出方次第では同じ手を使おうと決めていた。相手も大将。どうするか。

始め！の声と共に、匠は基本どおり、正眼に構えた。相手も同じ構えを見せ、とまさにその時、一挙に打ってきた。あまり早さに匠は受けるのが精一杯。じりじりと後退していく。相手の眼光鋭く、真剣なら一刀両断に負けていたかもしれない。それでも匠の実力は並ではない。いったん、体制を立て直すと、大波が押し寄せるが如く攻めていく。これには大将といえどたまらない。気迫に押され、危うく面をとられそうになった。というのも場外に出てしまったおかげ、としかいいようがない。本来なら負けていたのだ。仕切りな

おし後、2度同じ手は使わせまいと、匠は先手を取り、小手を狙った。それを相手は一瞬にかわし、その手で右の胴を狙いに來た。匠も巧い具合に切り抜ける。両者一步も譲らず、制限時間が過ぎ、合図が鳴った。いったん、席に戻り延長戦の声を聞く。匠の呼吸は一寸も乱れていないが、相手は相当息が上がっているようだ。伯仲した試合の場合、それが命取りになるのは明白だ。そこが好機でもある。

再び匠は敵と向かい合った。延長戦は先に一本取った方が勝者となる。匠の心は凧のように静かだ。相手はじりじりと足を詰めてくる。足元を見ると匠を中心に時計回りに少しづつ回っている。敵に後ろを見せては負け。相手に合わせ匠も回る。半分近く回ったところで相手の足が止まった。その時、何かが光った。まぶしい！匠に一瞬の隙ができた。そこをすかさず敵が大上段に構え、竹刀を振り下ろした。



## 第27話

「1本!」

見事な面打ち1本だった。

主審の声と共にワツと歓声が上がる烏城高校。一方、大きなため息を漏らしたのは朱雀高。今まで不敗神話を築いてきた周防匠の連勝が止まる! 校内新聞の見出しは決まった! とばかりに新聞部が駆け出す。ところが2人いる副審の1人が何やら抗議を主審に申し出た。身振りで窓の方を指差している。かなり長い時間3人で話し合っていたが埒が明かず、放送係を呼んだ。この大会は全国に向け生放送されているため、当然、映像が残る。主審はそれを利用しようとしているのだ。時間をかけ、最後の部分を再生してみた。そして、  
・・納得の答えが出たようだ。説明のため副審たちは席に戻った。

「ただ今の試合についてご説明いたします。面打ち1本で烏城高校、佐藤君の勝ち、といたしました。副審の申し入れにより検討いたしましたところ、烏城高校に不正行為があったものとみなし、朱雀高校、周防君の勝ちといたします。従って3対2で朱雀高校が決勝進出となります。」

主審の宣言により朱雀高校が勝者となった。慌てて新聞部を呼び戻す応援団。烏城高校は当然抗議を申し立てた。それにもかかわらず、不正行為を盾に審判員は負けを覆さない。次の試合時間が迫っているため抗議はそれで打ち切られた。

決勝戦はいとも簡単に決着がついてしまった。大将が出るまでもなく副将すらお呼びがかからず仕舞いだった。個人戦にいたっては予想通り、匠が圧勝し、不敗神話を更新した。勝利に酔った匠の写真を撮ろうと各メディアが押しかけた。それを振り切つて車に乗り込む匠の表情は苦虫を噛み潰したようで、さながら予選で敗退した選手のようにだ。これまでの匠も勝利した後、特に浮かれたことはなかったが、今回ほど苦しそうな顔を見せたことはなかった。残さ

れた他の部員達も一様に冴えない顔をしている。マネージャーだけがメディアの対応に追われ、さんざんな目に合った。

## 第28話

夜。昼間の試合などすっかり忘れたかのように、匠は沙織から今日の得宗寺家の様子をうんざりした顔で聞いていた。

「・・・それで？　　ったくおまえは話はいつも同じだ。　　が何をしました。　　が××という女優のウワサをしていました。

　　が何を食べました。　　いったいおまえには考える、という技は使えないのか。　　話にもならない。」

八つ当たりだとはわかっていたが、匠は沙織の話す内容にイラついていた。

「ごめんなさい・・・」

今日の一件を知らない沙織は、匠の怒りは自分が招いたものだと思つた。試合は絶対見に来るな、と釘を刺してあるため、今まで一度も沙織は匠の勇姿を目にしたことがない。全て後から誰かに話を聞かされるだけだ。それで十分だと沙織も思っていた。試合をしている匠を見てしまったら最後、叶わぬ夢を見てしまいそうだった。その代わり、殆どの試合を榊原が見に行っていた。彼の話しぶりからあらましを知るのだ。

「おまえの調査ではいつになったら解決するのか見当がつかない。オレが行って調べる。」「え？」

沙織の驚きぶりを背中で聞きながら匠は家を出た。近道すればほんの3〜4分の距離だ。

「数日前、この家の前で沙織が女の人を拾った。」

沙織を遠ざけた匠は得宗寺家の執事である榊原と対峙した。得宗寺家のことは全て把握していると見越しての事だ。沙織が傍にいれば何かと話しぶりいこともあろうかと、わざと席を外させた。

「女の人、ですか。いくつ位の方でしょう。」

「年は40と言っていた。沙織に言わせれば美人らしい。オレは普

通だと思つがな。」

「それは匠さんご自身が美しいお顔をなさっているから世の女性は全部、並に見えるのでしょうか。」

「からかつているのか。オレの顔程度は掃いて捨てるほどいる。話をはぐらかすな。」

「からかつてなどいけませんよ。本当のことです。それでその方のお名前は？」

「スズナミサナエ。と言っていた。」

何気なく口にした名前だったが、珍しく榊原の表情に変化が現れた。  
「スズナミサナエ・・・様、ですか。」

「ああ。おまえ、何か知ってるな。」

「とんでもありません。私は何も存じませんよ。」

「オレの目をごまかすつもりか！オレは騙されんぞ。おい！何とか言え！」

榊原の胸倉を掴み、グイと迫る。

「・・・らしくありませんね。匠さん。」言いながら匠の手を静かに払う。

「オレらしくないとはどういう意味だ。」

「いかなる場合でも感情を表に出すな。と教えられてきたではありませんか。それとも今日の試合の影響ですか。」

「なんだと！ もういつペン言ってみろ！」再び胸倉を掴む。

「あなたは試合に勝って勝負に負けた。あれが真剣なら即死でしたね。相手は卑怯な手を使ってまでもあなたに勝ちたかった。それを見抜けなかった自分に腹を立てている。そうじゃありませんか？」  
榊原の一句一句は、匠の触れてはならない琴線に触れてしまった。  
スツと掴んでいた手を離すと、匠の目は冷たい光を帯びていた。

「スズナミサナエの本名は榊原サナエ。つまり、おまえの妻だ。」

「背筋が凍りつくような声で告げると、匠はそのまま部屋を出て行った。その背中を見送った榊原は呆然と立ち尽くしていた。」

## 第29話

心配そうに部屋の前を右往左往していた沙織は突然ドアが開き、匠が出てきたので声をかけようとしたが、その形相を見て思わず怯んでしまった。匠はといえば、沙織など全く視界に入らない様子で、わき目も振らず裏口から出て行った。わけがわからず部屋に入った沙織の目に呆然と立っている榊原の姿が映った。

「どうかしたの？ 匠さん、怖い顔をして出て行ったわ。何かあったの？」

沙織の声で我に帰った榊原は慌てて取り繕った。

「でも。変よ。・・・あなたも、いつものあなたじゃないわ。どうしたの？」

「い、いえ。何でもありません。」

彼も変だ。沙織は問い詰めようとしたが、難なく榊原に切り抜けられてしまった。あちらもこちらダメ。困った沙織はどうすることもできず、どちらかが話してくれるまでひたすら待つしか術はなかった。

翌日の新聞には昨日の試合が大きく掲載された。烏城高校の不正とは？という見出しで始まった新聞は、その模様が写真入りで載っていた。窓から差し込む太陽を背にした佐藤（烏城高）の後方で鏡を持ち、太陽光を反射させ、周防（朱雀高）の目を眩ませる烏城高生。と注釈がつけられている。欄外には連盟理事長名で烏城高校の失格処分と、今後1年間、公式試合出場停止の検討について述べられていた。とかく悪い噂の絶えない烏城高校は、他の部門への影響も懸念される。と社説は締めくくられていた。

朱雀高校には新たなメディアが殺到し、匠の輝かしい経歴に花を添えた。また、烏城高校にも同じように押しかけたが、校内はひっそりとし、レポーターやカメラマンなどの怒号が迷惑だと警察が

出向く場面も見られた。

### 第30話

その試合結果を友人から聞いた沙織は、昨日、何故匠が不機嫌だったのかを悟った。汚いやり方も許せないが、それを見破れなかった己を許せなかったに違いない。そう解釈した。

「匠さん。もうすぐ期末試験ね。私、自信がないわ。」

不安げに肩を落とす沙織。周囲が昨日の一件を騒ぎ立て、うんざりしている匠にとってこういう時の沙織の存在は心底、癒された。

「・・・スズナミサナエの正体がわかった。」

「え？」

話が別方向に向かい始めたのはいい傾向だ。匠の機嫌が上向きになつてきた証拠だから。その機会を逃してはならない。

「ご主人で誰でしたの？」ぐつと身を乗り出す。これも作戦のひとつだ。

「誰だと思う。」

美味そうな（実際美味い）昼食用に沙織が用意したロースとビーフサンドをかじりながら逆に問いかける匠。

「ええと・・・コックの白井さん？　ちがう。・・・じゃ、室田さ

ん・・・え、違うの？リネン室の柳さん。・・・えー・・・っと。ボイラーの・・・じゃ、運転手の水口さん・・・じゃないの？・・・じゃあ・・・

「

いちいち首を振りながら匠は沙織のカンの鈍さにあきれてしまった。

「全っ然違う！おまえ、ホントにわからないのか？オレをからかうのもいい加減にしろよ。」

「からかうなんて。そんなつもりないわ・・・」

嬉々として名前を連ねていた気分が一気に下降してしまう。

「・・・ったく。よく考えてみる。おまえが生まれた時お袋さんの傍にいたんだぞ。そんな女が一介の使用人の家族のわけがないだろう。かなり重要なポストにいた人物とみるべきだ。おまけに今、言

った連中の年齢を考えてみる。白井は60だ。室田も58、柳は65、水口に至っては28だろう。年相応の男を言ってみる。」

「えーと・・サナエさんが40だから・・相応しい人というと・・榊原さんしかないわ。でも、それだけはないと思うの。だって。反論しようとする沙織をジロリと見やる匠。」

「なぜそう言い切れる。事実が事実だ。榊原が結婚していたらおかしいか。」

「で、でも。そんなこと、あり得ない・・わ。」

「でも、はない。あるのはそういう事実だ。おまえに頼まず初めからオレが行けばこんな時間に時間を取らなかった。あいつと話していてふと気付いた。それを直接ぶつけたら見事的中した。というわけだ。何があつたか知らないが、何年も隠し通してきた事に敬服するよ。まさかおまえの親父は知っているんだろ。あの人までも騙してきたとなると由々しき問題だ。」

「まさか、そんな。お父様からそんな話、聞いたことがないわ。」  
眉をひそめながら反論する。

「親父とおまえが必要以外のことを話題にする方が珍事件だ。」  
匠は冗談を言つたつもりだが、沙織には通じなかったようだ。元々沙織に対し、笑いかけたり、増してジョークを飛ばすことなどなかった匠だから、明らかにおかしい話をしたからといって素直に笑えるものではない。

「そ、そうね。お父様がいくら使用人だからといってプライベートを私に話すはずがないわね。」声こそ出さないが、沙織がうんと唸っているように見えた。

「午後の授業が始まる。よく考えてみるんだな。先に行くぞ。」  
やおら立ち上がる匠に慌ててその手元をみると、すでに彼の分のサンドイッチとコーヒーは空になっていた。急いで片付け、大またで歩いて行く匠の後姿を小走りに追う。



### 第31話

突然、物陰から沙織は呼び止められた。声のした方に目線をやると、生徒会長らしき人物が手招きしている。恐る恐る近づくと、やはりそれは会長だった。モジモジしていて先日自信たっぷりの雰囲気がるでない。別人のようだ。それでも会長には違いない。

「あの・・・」

ちょうど良かった、と沙織は思った。あの時の返事をするべきなのに機会が見つからず返答できずにいたのだ。はつきり断らなくてはならない。手短に話をつけよう、と言おうとした時、会長の口から思わぬ言葉がでた。

「この間の件はなかったことにしてくれませんか。僕が思い上がっていたようです。・・・じゃ、これで。」

そむけた横顔の頬が紫色になっているのがわかった。なぜそうなったのか知る由もない沙織だが、裏で匠が糸を引いている事など会長のプライドから鑑み、公表することなどもってのほかだろう。なんだかしらないが断る前にフラれてしまった。残念なようなホッとしたような複雑な印象だ。沙織は友人がよくやるように肩をすくめてみた。そうしてみると意外にいい気分になれた。（これはクセになりそうだわ。）浮かれ調子で校舎に戻ろうとすると、突然匠が現れた。ドキッとして立ち止まる沙織。

「会長は何の用事だって？」

腕を組み、ジロリと沙織を見る。その姿が閻魔大王のようで何とも言えず恐ろしい。

「え、あ、あの・・・この間の件はなかった事にして欲しいって。」

「そうか？」

「匠さん。知ってたの？会長のこと。」

「親切な友人を持ったおかげでな。残念だったな。おまえのこと大切にしてくれそうな男が現れたと思ったのに。」

憎まれ口をたたくわりには何故か嬉しそうに校舎へ向かう匠。

「匠さんたら！私にいじわるして楽しんでるのね！」

真つ赤な顔で怒る沙織に、匠は歩きながら人差し指を立て、「正解！」と言った。その肩が震えている。笑っているのだ。それが一層沙織の怒りに拍車をかけた。しかし彼女の怒りなど匠には柳に風、または、暖簾に腕押しだ。

「知らない！」

すねる沙織にいつもならそのまま行ってしまう匠が笑いながら引き返してきた。不思議そうに見上げる沙織に、何を思ったのか匠はその頬にキスをした。おまけにゾクゾクする声で「愛してるよ。」とささやいた。あまりのことにショックを受ける沙織。その場にヘナヘナと座り込んでしまった。それを見た匠はまた笑いながら言った。「It's a joke!」と。その言葉は全く彼女の耳に入らなかった。言葉そのものよりも行動に驚いたのだ。今度は振り返ることなく匠は校舎に戻った。その光景を一部始終見ていた人物がいたのを2人は知るよしもなかった。

### 第32話

亜紀だった。匠に自分の作った料理を拒否され、二度と来ない！とタンカを切ったものの諦めきれず、こっそり匠の後をつけていたのだ。ストーカーというほどではないにしろ、友人には公然と私の彼よ。と言つてはばからない。匠と沙織の関係を知らぬ者はどこを探しても校内にはいないので、亜紀のひとりよがりと陰口を言う者がほとんどだった。しかし表立ってそれを咎める者もいなかった。どうなるか高見の見物といったところだろう。

亜紀の身体から猛烈な怒りがほとばしった。（絶対許せない！この私にあんなことをしておきながら、あの女にあんなことをするなんて！）当然怒りは匠に向けられた、はず、だった。ところが彼女の怒りの矛先は沙織に向けられた。（私の匠兄さんにあんなことをさせるなんて！許せない。）匠がいなくなると亜紀は音もなく沙織に近寄った。

「あなたにいったいどういふつもり！ふざけるのもいい加減にしなさいよ！」

手を腰にあて、さながら女王様気取りだ。前に立つたのが誰なのかも判断できぬうちに高飛車に怒鳴られ、沙織は戸惑った。

「え？ あ、亜紀さん？ どうかなさったの？」立ち上がるのも忘れ、ペタンと座ったまま呆けたように答えた。

「どうかしたもないものだわ！さっきのこと忘れたとは言わせないわよ！立ちなさいよ！あなた、お兄さんにもう近づくなつて引導渡されたんじゃないの！それなのに何よ！どういふつもり！」

「ごめんなさい。 何のことだかわからないわ。 なんだか変なのよ、私。・・・どうしたのかしら。 え？さっきのことって何かしら。 私・・・ああ、どうしたのかしら。 思い出せないわ。・・・変な気分だわ・・・ごめんなさい。 私、失礼するわ。」

頬に手を添え、もう一方の手にはバスケットを携え、校舎とは反対方向へ歩き出す沙織。亜紀の怒りのオーラはいつの間にかしぼんでいた。

### 第33話

ガラにもなく沙織に優しくしてしまった上にあんなことまでした匠は、それを隠すように眉間に皺を寄せ教室に戻った。あとから冗談だと弁解したとしても、よくもあんなことができたものだと、やってしまったことにどう説明をつけようかと悩みだしてもいた。なぜあんなことをしてしまったのだろう？どう解釈をつけようか・

「うーん。」

両手を組み、渋面を作った匠が唸ったものだから、黒板に例題を書いていた教師が驚いて振り返った。

「す、す、すおうくん？ な、なにか、もんだいが、あ、ありましたか？」

かなりビクついている。常日ごろ、匠に間違いを指摘され、このクラスに来るのを嫌がっていた彼は、匠のうめき声に泣きそうな顔を見せた。その上匠が目を閉じたままの姿勢を崩さないため、チョークを持った手がブルブル震えだした。見かねたクラスメイトが匠のわき腹をつついた。現実に戻った匠はその生徒をジロリとねめつけたが、彼は臆することなく（慣れているため）教師を顎でしゃくり匠の注意を前方に向けた。ホッとため息を漏らし、教師はカラカラに乾いた声を出した。

「す、すおうくん。．．こ、このもんだいは、ま、まちがって、いますか？」

「え、あ、．．はい。いいえ、正解です。．．何かありましたか？」

「い、いや。さっき君がうなり声を上げたのでもしかしたら私が間違っていたのかと．．」

声も聞き取れないほど小さいばかりか、存在そのものも消えてしまっている。

「そんな声を出しましたか。」

キョトンとする匠にクラス全員が何度もうなずいた。生徒に勇気付けられたのか、少し元気を取り戻した教師は、

「けっこう大きな声でしたよ。何かあったのですか？周防君らしくありませんが。」

「いいえ。申し訳ありません。先生の邪魔をしてしまいました。」

スツと立ち上がり、深々と頭を下げる匠を見て、教師はかえって萎縮してしまつたが、折り良く終業のチャイムが鳴り、挨拶もそこそこに教室を出て行つた。隣の席に座っていた本山という生徒（匠を小突いた者）がすかさず椅子ごと身体を寄せてきた。

「さつきはどうしたんだ。おまえらしくないぞ。」

興味津々な態度に匠は眉をひそめ無言で答えた。

「ま、何かあつたことは確かだよな。わけもなくおまえがあんな声を出すはずないしな。なあ、何かあつたんだろう？」

ニヤニヤ笑いながら肩に手を掛けてくる本山のその手を払い、匠はなおも沈黙を保ち続けている。ところがそんなことに驚く者はこのクラスにはいない。なにしろ１日中、匠と肩を並べ授業を受けているのだ。彼のダンマリにいちいち驚いていたのでは神経が持たないそれがわかつているだけに彼もまた、黙して語らずの姿勢を崩せない。とどのつまり、持久戦になり、結果、いつも匠が勝者となる。女性徒ならまだしも、男はいつまでも芸能レポーターよろしく、他人のプライベートを探る続けようという意思の強い奴はいないのである。本山しかり、である。彼は肩をすくめると、わかつた、とばかりに匠の肩をポンポンと叩き、椅子を元の位置に戻した。

### 第34話

亜紀と別れ、1人、校舎を後にした沙織の足は近くの公園で止まった。子供達の声に誘われるように中に入って行くと、4〜5人の男の子たちがすべり台やジャングルジムで遊んでいた。沙織はベロンチに腰掛け、彼等の姿を見ているうちに自分の幼い頃を思い出していた。

しばらくすると子供達はいなくなっていた。代わりに屈強な男が3人、彼女の前に立ちはだかっていた。得宗寺沙織さんですね？と声をかけられ、頷く間もなくハンカチで口を覆われた。甘酸っぱい匂いが広がり、ほどなく彼女は意識を失った。本来なら沙織にはSPを付けるべきなのだが、常にすぐ腕の匠が傍にいたためSPは不要だった。それが仇となってしまい沙織は何者かに連れ去られてしまった。

『得宗寺沙織の身柄を拘束した。無事返して欲しければDUE L 1のCDを明日12時に朱雀公園のすべり台に置け。警察に連絡すれば彼女の身の安全は保障しない。』

この内容の脅迫状が届けられたのは午後6時頃。近所に住む小学生が見知らぬ男から得宗寺家の榊原に直接渡すよう頼まれたものらしかった。手紙を読んだ彼はすぐ匠に連絡を取った。ところが当の匠は報道陣が待ち構えている自宅には戻らず、周防建設の建物内に隠れていた。そこは彼専用の部屋で、電波類は完全にシャットアウトされており、中から連絡を取ろうとしない限り、存在すら確認できない場所だった。周防建設は一応、匠の父親である正彦が社長になっているが、実質経営を任されているのは長男の匠であった。その秘密の部屋にこもり、新構想を立てるのが彼の仕事だ。

### 第35話

その部屋を何度も叩く者がいる。初め、匠はそれを無視した。それでも鳴り止まないため、インターホンで静かにするよう命じた。すると返ってきたのは榊原の怒声だった。匠はいかなる場合でも冷静であれ、と言いつつその声には焦りといら立ちが混同していた。

「なんの用だ。ここにいる時は一切邪魔するなど言っておりだ。」

「それどころではありません！匠さん出てきて下さい！大変なんです、お嬢様が！」

ただならぬ声に匠はドアを開けた。

「沙織がどうした。」

榊原が中に入ると匠は反射的にカギをかけた。

「誘拐されました！これを見てください！先ほど私の手元に届いたものです。」

匠はそのメモを引たくりサツと読んだ。怒りが全身に湧き上がる。メモを一握のもとに握りつぶすと、視線を壁に向けギリギリと口の中で唸った。

「DUEL 1だとオ！そんなもののために！」

「匠さん、それはいつたい何なんです！」執事の榊原が知らないモノとは？

「来年発売される新ゲームソフトだ。アニメゲイトが総力を上げて開発した体験型ゲームでシリーズ化される予定だ。おまえ、知らないのか」

「私はそうだったものには全く興味がなくて・・・申し訳ありません。それよりもアニメゲイトといえば、得宗グループの1つじゃないですか。」

「そうだ。その社長はオレの友人だ。彼から開発に協力してくれと頼まれて3年前から携わってきたんだ。会社の威信をかけたプロ



ジエクトだ。それを！・・・いつたい誰が・・・こんな卑怯な行為は絶対許さない！」

「はい！」

匠はじつと考え込んだ。しばらくして再び榊原の顔を見たその唇にはゾクツとする冷笑が浮かんでいた。

「・・・榊原。犯人の目星がついた。」

「えっ！わかったんですか？」

「ああ。おそらくな・・・行くぞ！」

言うが早いか飛び出す匠。遅れるものか、と後を追う榊原。匠はいつたいどこへ行こうとしているのだろう。

### 第36話

その頃、得宗寺家では主、秀一の突然の帰宅に蜂の巣をつついたような大騒ぎになっていた。執事の榊原は慌てて出て行ったまま戻らないし、娘の沙織もまだ学校から帰っていない。何とかしようにも手立てが見つからないのだ。とりあえず、秘書の沢木に時間稼ぎをもらい、榊原を探すことにした。

「大変です！だんな様が悪にお帰りになれました！」

榊原が育成している次期執事候補の米田が受話器の向こうで慌てふためいている。

「なに！だんな様が！」

匠と一緒に沙織を救いに（おそらくそうだと榊原は確信していた）行く途中、車の中で突然携帯が鳴り、出てみると米田だった。ただならぬ様子に、匠が怪訝な目つきをした。

「だんな様がお帰りになったそうです。どういたしました？」

榊原の不安をヒシヒシと感ずることができた。匠は少し考えてから運転手に得宗寺家に向かうよう命じた。

「匠さん！」

「大丈夫だ。まだ時間はある。秀一氏に相談してからにしよう。」

「なんだか屋敷の中が騒がしいな。」

秀一は自分の帰宅が原因だということに全く気づかないらしい。沢木は笑いたくなるのをこらえ、ことさら事務的に答えた。

「会長が突然お戻りになられたからでございましょう。」

「私が？・・・榊原を呼びなさい。」秀一の目つきが変わった。

「あいにく、留守のようでございます。」即座に答える沢木。微塵も恐れを感じていないようだ。

「留守？執事が留守とはどういう事だ。」

「私にはわかりかねますが・・・米田に聞いてはいかがでしょう。」

「では米田を呼べ。」

「かしこまりました。」

沢木が姿を消すと間もなく米田が恐る恐る入って来た。

「榊原はどこに行った。」

眼光鋭く問い詰められ、益々彼はちぢこまっている。

「は、はい。・・ああの、初めは何も仰らず出て行かれたのですが、だんな様のご帰宅を伝えようと電話いたしましたところ、匠様と一緒にということがわかりました。すぐこちらにいらっしやるそうでございます。はい。」

「なに？匠と一緒に？わかった、下がってよい。」

待ってましたとばかりに米田は足早に逃げ去った。入れ替わりに沢木が戻って来た。

「会長はお嬢様よりも匠さんの方を大事にしていらっしやるように見受けられますが、私の見間違いでしょうか。」

「ふん。おまえの悪いところは齒に絹を着せぬ物言いをするところだ。」

言葉とは逆に秀一の目にはいたずらっ子のような輝きが表れている。要するに怒っていないということだ。それを経験から会得している彼は素直に謝った。

「申し訳ございません。分もわきまえず余計なことを申しました。」

「心にもないことを言うな。まあいい。確かにおまえの言う通り、私は匠を気に入っている。どうしても私の跡を継がせたい。しかし、

・

「匠さんに断られてのですね？」

「またおまえの悪い癖がでた。なぜ私が言い終わらないうちに言うてしまうんだ。」

「そうでなければ得宗寺秀一氏の秘書など務まりません。」

「なに。確かにおまえは一流の秘書だ。そのおまえから見て、匠は私の跡継ぎに相応しい男か。」

秀一の目からいたずらっ子の輝きが消え、得宗グループ総帥の目つ

きに変わった。少しの間、沢木は目を伏せたが、次に目を開いたときには何かを決意したような顔になっていた。

「正直に、申し上げても宜しいでしょうか。」

「かまわん。おまえの正直な意見を言ってくれ。」

「では申し上げます。今の匠さんに会長の跡を継げ、というのは無理でございます。高校生ということもありますが、力がまだ充分ではありません。ただ会長が直々に指導すれば4〜5年後には誰も文句のつけようのない後継者になるでしょう。もともと素質のある方ですから。」

「そう か。ではおまえはどうだ。」

「私は二代続いて秘書ができれば本望でございます。私も会長や榊原さんに負けないくらい匠さんが好きですから。」

「ふん。おまえがそういう気持ちでいるなら改めてそうすることにしよう。」

「はい。」

### 第37話

匠と榊原は勢いよく玄関のドアを開け、そのまま秀一の部屋へ飛び込んだ。ちょうど秀一と沢木の話が終わったところだった。

「どうしたのだ！」

「も、申し訳ございません。だ、だんなさま。一大事でございます！」

冷静であるべき執事が取り乱している。

「一大事？ いったいなんだ！」

「は、はい。お、お嬢様が、お嬢様が、ゆうかいされました！」 榊原の声は今にも途切れそうだ。

「誘拐？ どういうことだ。」

鬼のような形相に榊原は震えながら例のメモを差し出した。

ざっと読み下すと秀一はそのまま沢木に放り投げた。それを見た沢木はすぐ電話をかけようとしたが秀一にさえぎられ、怪訝な顔で主を見た。秀一は彼を見てはいず、ものすごい目つきで匠を見据えていた。

「君に期待していたんだがね。」

その口から出た言葉には全く感情というものが感じられなかった。生まれて初めて匠は世の中には目に見えない恐ろしいものがあることを知った。それでもあらん限りの勇気を振り絞って恐怖を撥ね付けようと試みた。2度、ブルブルと身体を震わせるとようやく恐怖に対抗する力が湧いた。

「私にDUEL 1のダミーを作らせて下さい。お願いします。」

「匠さん！」

沢木と榊原が同時に叫んだ。匠は2人に自信たっぷりの目を向け頷いた。

「ほう！ 何か考えがあつてのことなんだろうな。」

相変わらず秀一の声には人間らしさは感じられない。

「はい。犯人の目星もついています。」

「なに！いったい誰だ！」初めて人間の声らしくなった。

「それを言う前にダミーを作る許可を下さい。」

「許可するもなにも。あれは君のスタッフが作ったものではないか。いわば君に著作権があるということだ。好きにするがいい。」

「ありがとうございます。」ホツとした表情になる匠。

「でも。大丈夫でしょうか。」と榊原。

「大丈夫だ。こんな事態は予測していなかったけれど、試作として作っていたモノを奴等に渡す事はできるんだ。」

「やつら？」沢木は優秀な秘書である。

「ああ。アニメゲイトをクビになった連中だ。やつらはDUEL

1の構想時点でクビにされている。新作の名称は知っていても中味は全く知らないはずだ。それに他社の者ならアニメゲイトの新作すら知らないと思う。半年前に新作を発表したばかりだからな。沢木、おまえはあらゆる手を嵩じて沙織が囚われている場所を捜してくれ。榊原、おまえは屋敷内の者が動揺しないよう注意するんだ。いいか2人共、限られた時間内で全てやらなければならないということをお忘れな。オレはデモ機に手を加える。わかったな。・・・行け。」匠の号令で2人は即座に行動を移した。匠も負けじと部屋を出ようとして、ふと自分を見つめる視線を感じ足を止めた。

### 第38話

「何か。」

振り返った匠の瞳は黒々とした光を放っていた。

「いや、なんでもない。早く行きたまえ。」

曰くありげな秀一の目はじっと匠を見つめている。それに対し、匠は言いかけた言葉を飲み込み、何も言わず部屋を後にした。閉まる扉の向こうで意味ありげにほくそ笑んでいる秀一には全く気づかずに・・・

うつすらと瞼を開いた目に真っ先に飛び込んできたのは真っ青な海・・・の絵だった。起き上がろうとすると頭に痛みが走った。手を当ててみると大きなコブができていた。8ここはどこなの? ゆっくり周りを見渡すと、製図用の(たぶん)電気スタンド付きの事務机が1つと丸い小さなテーブルがあるだけのシンプルな部屋であることがわかった。その風景に全くといっていいほどぞぐわな海絵の絵。沙織はその見覚えのない部屋にすることで自分が何かしら事件に巻き込まれたのだらうと悟った。それにしてもここはどこなのだらう。立つてみようとしたとき、初めて自分の足が紐で縛られている事に気づいた。手は拘束されていないが、口にはガムテープが貼られていた(ここはどこなの?)不安が押し寄せる。窓がないので今が昼なのか夜なのかさえ判断できない。

その時、唯一、外界との連絡が取れるドアが開き、若い男が入ってきた。一見サラリーマン風の容貌をしているが、それが真実かどうかわからない。クセなのだらうか、常に口元を歪めているのがカンに障る。それがなければ整った顔立ちなのだらう。瞬時に沙織はそう感じたが、怖い気持ちに先に立ち身体が硬直した。

### 第39話

「大丈夫ですよ、お嬢さんを傷つけたりしません。昼までの辛抱です。取引が成立したら無事に帰してあげますから。・・・そんなに睨まないで下さい。綺麗な人に睨まれると非常に怖い。」

「んんん！」口を塞がれているので不明瞭な言葉しか出せないのが悔しい。

「あなたは誰、そう言いたいのでしょうか？すみません。私も役目柄、あなたにこんな手荒い事はしたくないのですが。でも、テープは外してあげたいなア。」

薄ら笑いを浮かべ、男は沙織に近づいた。プン、と安っぽいコロンの香りがして沙織は眉をひそめた。（日本語の使い方間違っているわ）心の中では全く別の事を考えられる余裕があることに沙織は自分でも驚いた。

男の手がテープに触れ、ペリペリとゆつくりはがした。ゆつくりされると逆に痛いのだ。それを顔に出すわけにはいかないじつと我慢する。それが男の本能をくすぐったのか、いやらしい笑みを浮かべた。

「キレイな人はどんな顔をしてもいいねえ。フフフフ。」

沙織は身体全体がゾゾツと総毛立つような気がした。匠の冷たい目も恐ろしいが、この男の恐ろしさは常軌を逸するものがある。尋常ではないのだ。更に身体が硬直する。（さわらないで！）叫びたかったが、言葉が喉に張り付いて出ようとしてくれない。

「もう大丈夫ですよ、お嬢さん。」

男は剥がしたテープをもみくちゃにし、ゴミ箱に捨てようとした。しかし手にくつついてしまい、ブツブツ文句を言いながら何とかそれを手から剥がし落とした。それからニヤケた顔を沙織に向けた。

「さあ、これでいい。私もあなたの声が聞ける。一石二鳥です。」

男の期待に応えるように虫唾が走るほどイヤだったが、自分の置か



れている状況を少しでも早く把握しなければならない。ここはじつ  
と我慢、我慢。

「あ、あなたは、だれ？」

## 第40話

しわ枯れた声が出た。それでも相手には聞こえたようだ。

「ああ！ファンタスティック！素晴らしい！お嬢さん！あんたは最高だ！　私が誰かって？　そうですね。私は黒猫のジョージ、でも言っておきましょうか。どうです？似合っていると思いませんか？　あはははは！」

黒猫のジョージと名乗る男は自画自賛し卑屈な高笑いを上げた。

「ここは、どこなの。」

「あんたの知らない所だ。でも安心しろ。外国じゃない。フフフフ。」

「またいやらしい笑いだ。」

「私をどうするの？こんなことをしてタダで済むと思っているの。」

今すぐ私を解放しなさい。そうすればこの事は不問にしてあげるわ。」

「

「不問にして、あ・げ・る？　バカを言うな！あんたなんてツメの

先ほどの価値もあるもんか！得宗グループの1人娘だからさらった

までだ！ブツを頂戴したら用無しなんだよ。バカげてる。まったく・

・」

続きはモゴモゴとして沙織には聞き取れなかった。それからまたイヤな笑いを浮かべ紐をつかむと沙織の両手を縛り始めた。それまでは意識がなかったので不要だったのかもしれないが、気が付いた今となつては両手足を拘束しておいた方が良くと判断したのだろう。

「悪いね。でもこうしないとボクの身が危ないからね。さて、

と。もう10時か。腹が空いているだろうけど我慢してくれ。水しかないから水はやれるけど、それ以外はないんだ。」男は初めて申し訳なさそうな顔をした。

「いらないわ。あなたからは何ひとつ恵んでもらわなくて結構よ。」

「なんだと！」

途端に顔がひきつり、あつという間に平手が沙織の顔に飛んでいた。

口の中が切れ、じつとりと血の味が全体に広がる。

「親切で言ってやったのにその言い草は何だ！今度そんな口をきいてみる、タダじゃ済まないからな！」

狂ってる。目つきで感じた。こういう人間は何を言ってもムダだ。

言う通りにしないと何をされるかわからない。ひとまず沙織は男の言うなりになってダンマリを決め込むことにした。

## 第41話

5分、10分。時間が経つにつれジョージは沈黙に耐えられなくなってきたのか、机をトントンと叩き、足を小刻みに動かし始めた。そのうち部屋をウロウロと歩き出した。何度も腕時計を見るが思ったほど時間が経過しないのでその都度舌打ちをする。ふと沙織の脳裏にあることがひらめいた。もしかしたらこの男は使われているだけで首謀者は他にいるのではないかと。そういえばさつき男は役目柄ガムテープを貼った。と言っていた。そうだ、ほぼ間違いない。この男、黒猫のジョージと名乗る男は見張り番としてここにいるにすぎないのだ。そうとなれば対応の仕方があるというものだ。沙織は身体が熱くなるのを感じたが、それが何であるのかはわからなかった。彼女の身体には得宗寺秀一の血が受け継がれている事に気づけば明白なのだが、普段、父と匠に押さえつけられている彼女にはそれと気づくにはまだまだ未熟だった。

「ジョージさん、でしたわね。」自分でも驚くほど冷静な声でた。

「なんだ！いきなり！」ジョージも同じように驚いたようだ。

「さつきから何度も時計を見ているようですけれど、何か急ぎの用事がありになるのならどうぞ、いらして下さい。私はこのままじっとしていますから。」

「なに。そんな子供だましは相手を見て言っただな。」

「見ていますわ。私は逃げたくても両手足を縛られているから逃げることはなんてできません。それに、あなたを怒らせると怖い。ということは先ほど知りましたもの。」

『あなたを怒らせると怖い。』その言葉に気を良くしたのかジョージはふん！と鼻を鳴らした。その時、携帯の着信音が鳴り、また舌を打った。（この人は顔はキレイかもしれないけれど、ものすごくわがままで短気なんだわ。年は下だけれど匠さんの方がずっと大人

だわ。いつい匠と比べてしまう。もしかしたら2度と匠の顔を見ることができないかもしれないという考えが頭をよぎった。涙が勝手に零れ落ち、まるで生きているかのようにどどん流れ出た。

「ボクがそんなに怖いのかい？わかったよ。もういじわるはしないよ。それにちよつと用事ができてね、少しの間ガマンしてくれよ。ね？・・じゃ、ボクは行くよ。カギは閉めさせてもらうからね。」  
ネコなで声のジョージではなく、黒猫のジョージはそう言っで急いで部屋を出て行った。1人残された沙織には怖いとか淋しいという感情はなかった。ただ匠に会いたい、それだけが全身を占めていた。

## 第42話

匠の仕事は早かった。アニメゲイトの社長、日下洋を呼び出すと簡単に事情を話し、早速作業に取り掛かった。日下もDUEL 1の主要関係者3名に連絡を取り、沙織の件は伏せたまま匠を手助けするよう命じた。そして日下本人は沢木と共に沙織の居場所を突き止めるべく、匠の指示した場所へ向かった。犯人の目星はついている。匠からDUEL 1の件を聞いた刹那、直感した。あいつとあいつの部下数名だ、と。

あらかじめテスト用に制作していたデモ機をもとに、匠たちは絶対攻略不可能な完成品を作り上げた。あらゆる方面から攻略してもあと一歩、というところまでくるとその先へ進めない。しかもそれが簡単に見破られてはならないのだ。ほんの少しの作業なのだが、彼らの脳細胞はフル回転させられた。なにしろ時間が迫っているのだ。無論、助っ人達は詳細をしらない。だが匠に全幅の信頼を受け、また、彼らも匠を信じているため異論を唱える者など1人もいない。ただ黙々と手を動かし頭脳を最大限に働かせた。そして完全なる不完全品が完成した。名付けて『どんな美味いものでもいい加減に作れば路傍の石ころ』“DUEL I”である。完全なものが“DUEL 1”であるのに対し、コピー作品は“DUEL I”・“いいネーミングだ。彼らはソフトの完成も嬉しかったが、何より名前に歓声を上げた。1とI。見ようによつては同じに見えるが発音が全く違う。意味を聞いたらのけぞって世間は笑うだろう。その時のことを考えただけで小気味よい。彼らの姿を見て匠は真実を話そうと思った。沙織が誘拐され身代金としてDUEL 1を差し出せと要求されたことを。それを聞いて益々メンバー達は奴らの悔しがる顔を想像し、笑った。

「みんな。ありがとう。これで沙織は救われる。あとは日下た

ちが居所を突き止めてくれれば万事OKだ。」

「匠さん。オレ達はあなたの下で働けて最高に幸せです。なに、社長のことです。すぐお嬢さんの居所を探し出すでしょう。大丈夫ですよ。さあ、みんな！前祝だ！」

主任の木所が号令をかけると他のメンバー達の意気は大いに盛り上がり、揚々と仕事場をあとにした。残された匠は胸に湧き上がる感謝の思いで喉が詰まり、目の奥が暑くなるのを禁じ得なかった。

## 第43話

外に出てみると白々と空は明けていて秋風がひんやりと顔を撫でた。匠はその風を顔にたっぷりすりつけるように手で擦った。すると足の先から力が湧き上がってきた。

「よし！」

ひと声かけると更に力が加わった。紙袋にディスクが入っているのを確認すると一旦、得宗寺家へ足を向けた。沢木達から未だ連絡がなかったし、指定された時間にはまだかなり余裕があった。秀一に経過報告もしなければならぬ。

交差点を渡ろうとした時、スツと脇に車が止まった。見慣れぬ軽自動車に匠は訝しげな表情をした。もしや犯人？

左側の窓を開き、顔を出したのは沢木だった。何も言わず助手席に乗り込むとすぐ車は動き出した。

「わかったのか。」前方を見たまま匠が聞く。

「ええ。犯人達は発覚を恐れてでしょうか、隠れ家を4箇所ほど準備していました。ただ、いずれの家にもお嬢様はいらっしゃらず、捜すのに手間取ってしまいました。日下君がいなかったら捜し出せたかどうかわかりませんでした。」

「それで、首謀者はやはり駒木か。」

「はい。駒木裕一、高田譲二、森河準、城瀬俊彦の4名です。奴らはアニメゲイトを解雇されるとすぐドリームボーンという会社を立ち上げましたが、思うように軌道に乗らなかったらしく、ここ半年ほどは赤字が続いていたようです。」

「そこで以前から開発中だったDUEL 1に目をつけたのか。」

「おそらく。ところで奴らが解雇になった本当の理由は何なんですか？私は会長にあらましか伺っていないので全てを把握してないんです。」

「アニメゲイトが3番目に手がけたカリクレインというゲームを知



つてるか。」

「カリクレイン？・・・ああ、狩獵に見立てた人生ゲームですね。それが何か。」

「その一部のデータが他社に流出したという噂が流れただろう。あれは噂ではなく奴らがこっそり売っていたんだ。それも数社にね。そのあと似たようなゲームがあちこちから次々と発表された。噂が真実とわかった時点で奴らをクビにした。新スタッフとして柏木達が入ってきた。それからのアニメゲイトの業績は周知の通りだ。」

「そうだったんですか。それにしてもヒドイ奴らですね。」

「ああ。ところで沙織はどこにいるんだ。」

匠は助手席のシートを倒し、疲れた身体を休めるように目を閉じた。目を開けていると太陽の光で目の奥がジンジン痛くなってくるのだ。しかし耳と脳はフルに回転させている。

「第3埠頭の商南倉庫です。駒木名義で1つのプレハブを1年ほど前に仕事場と称して借りています。」

沢木は前を向いたまま運転し続けている。行き先は告げなかったが阿吽の呼吸で察知するだろうと匠は踏んでいた。

案の定、車は得宗寺家の玄関に横付けされた。少しウトウトしたおかげで匠の頭はかなりスッキリしていた。こめかみを押すと瞼の奥でパチパチと音がしたような気がした。今まで生きてきた中でこんなに疲労を感じたことがないほど神経が参っていたが、弱音を吐いている場合ではない。一刻も早く沙織を助けなければならぬのだ。

## 第44話

「万事抜かりはないんだろうな。」

薄暗い蛍光灯の下で3人の男があたりを気遣いながら話し込んでいた。

「大丈夫だ。譲二がしくじらなければオレ達の勝ちだ。・・・それにしても譲二のヤツ遅いな。呼び出してから1時間は経つぞ。あそこからここまで30分もあれば来るんだが。まさか、しくじったんじゃない！おいトシ！見て来いよ！」

トシと呼ばれた男は無言で立ち上がりドアを開けた。その時1人の男が息咳切つて駆け込んできた。

「遅くなつてすんません！車が混んでて！」男は黒猫のジョージだった。

「ったく！おまえはいつもそうだ！時間にルーズな人間はもつての外だ。」

「モリ。そのへんで許してやれ。譲二も急いで来たようだし何事もなかったんだから。」

「でも駒木さん・・・」

モリこと、森河準は不満げに抗議しようとしてリーダーの駒木にジロリと見据えられ押し黙った。

「いいか。この計画はオレ達ドリームボーンの命運がかかった大仕事なんだ。全て正確に事を進めなければならない。それぞれこれらの行動を再チェックしよう。・・・おっと、その前に譲二、お嬢さんはどうした。よもやケガなんかさせていないだろうな。オレ達はそういう輩とは違う。」

熱っぽい口ぶりに黒猫のジョージは赤くなり狼狽したが、薄暗いせいで誰も彼の変化には気づかなかった。沙織をぶつたことが知れたら大変なことになる。他の3人と比べ外見は良くても少々知能の低い黒猫のジョージこと、高田譲二は背中汗が噴出すを感じた。

## 第45話

彼らは駒木裕一をリーダーとし、常に各々役割が決められていた。駒木はアニメゲイト設立当初からのメンバーであり、将来ゲームソフト界を背負って経つだろうと目されていたほどの人物だった。現在、アニメゲイト社長の日下とは高校時代からの仲間だ。黒猫のジョージこと高田譲二はいわば2人の子分みたいなもので、学業の成績は中の下、というところだが、生まれつきキレイな顔立ちをしていたため、駒木たちの格好のいい広告塔になっていた。役割としては雑用が主で、アニメゲイトに入社できたのも2人の後押しがあったからだ、と噂されていた。他の森河と城瀬はあとから入った工業系の専門学校出身で、趣味が嵩じてゲームソフトプログラマーになった。先輩であるが雑用係の譲二を見下しているところがあるのも技術の有無のなせることかもしれない。とにかく彼らはお互いを駒木は別として『モリ』『トシ』『ジョージ』と呼び合っていた。黒猫のジョージとは譲二が勝手につけたあだ名で、他のメンバーは誰も知らなかった。知れたとしてもバカにされるだけで同調する者などいないということを彼自身、身をもって知っていた。

そういう彼らがなぜアニメゲイトをクビになったかという、匠の存在が一番の原因。と彼ら、少なくとも駒木は考えていた。匠が会社に関わってこないうちは駒木と日下の関係は至極上手くいった。ところが当時中学生だった匠がひょんなことから新規開発のプロジェクトに首を突っ込んだ事から日下の信頼はずっと年下の匠に向けられ、駒木はないがしろにされがちになった。社長の日下としては毛頭そんな気持ちはサラサラなかったが、それまで全てにおいて2人で相談しながら進めてきた駒木にしてみれば面白くない。年は下であったが駒木の匠への感情は嫉妬から憎悪へと変わり、ひと泡吹かせてやろうと企んでいた矢先、他の会社からデータ流出の誘いが舞い込んだ。謝礼金にも魅力があったが、何より周防匠の存在

を抹殺したい。それだけで駒木はそれに応じた。言われるまま数社に当時開発中だったカリクレインという名前のソフトを売ってしまった。それが日下に知れることとなり、駒木と部下3名は即座に解雇された。それまでの日下と駒木の友情に免じ、刑事事件にすることをしなかった匠たち。しかし駒木は日下やアニメゲイト、そして匠に復讐するべく新会社、ドリームボーンを設立。資金はもちろんカリクレイン売却で得た数千万だ。数社から得た金額の合計は億単位になったのだが、アニメゲイトから請求された損害賠償金を支払ったため手元に残った分で何とか自社を立ち上げる事ができたのである。初め、ドリームボーンは儲かった。それを元手に事務所を構え、それぞれ所長として森河らを配置したのだが、いかんせん、彼らは経営及び営業はド素人。段々と経営が行き詰まり、結局この事務所と沙織が囚われている倉庫の2つしか残せない始末。そこで計画したのが彼らが辞める時にアニメゲイトが制作していたDUEL 1の強奪。しかし、ただ盗むといっても相手はこの数年の間で飛躍的に伸びた会社だ。簡単に出入りできるものではない。考え抜いた拳句、行動に移されたのがアニメゲイトの親会社である得宗グループ総帥の一人娘沙織の誘拐。そして身代金として要求するのがDUEL 1のデータ・・・金品を要求するよりその方が金になるということを彼らは熟知していた。それをまた他社に売りつければ莫大な現金を手中に納めることができるのだ。誘拐の計画は綿密に練られた。そして実行された。あとはデータと人質を交換すれば完璧の・・・はず。駒木たちは半ば自己陶醉に陥っていた。彼らは又、日下達が警察沙汰にするはずはないとも考えていた。公にすれば新商品の存在が世間に公表され、会社としては大損害を被る事になるからだ。いつも冷静な駒木だが、気持ちの高揚を押さえる事ができなくなっていた。

## 第46話

「いいか。今日は長い1日になる。各自、仮眠してから9時にここに集合だ。オレと森河はその足で朱雀公園に向かう。城瀬はここで待機。譲二は連絡があるまでお嬢さんの見張りだ。いいな。では、解散。」

駒木の合図で3名は事務所を出て行った。黒猫のジョージは再び沙織のいる倉庫に取って返し、彼女が縛られたまま横たわっているのを確認した。そして用心のためにと、ハンカチに含ませたクロロフィルムを嗅がせ、沙織が気を失うのを見てから自分もその場にうずくまった。現在の時間、午前4時30分。約束の時間まであと4時間半……

秀一に経過を報告すると匠と沢木は再び外へ飛び出した。時計を見ると6時半を回ったところである。どちらともなく腹がグーッと鳴った。考えてみれば2人共、昨日まる1日何も食べていなかった。匠などはおとといから殆ど口に入れてはいなかった。

「沢木、何か食べよう。」

「え？ そんな暇ないでしょう。」

「オレ、おとといから何も食べていないんだ。」

「そうなんですか！ わかりました。何か調達して来ましょう。匠さんは車に乗っていて下さい。」

沢木は得宗寺家の厨房に走り、料理長に手早くサンドイッチを作ってもらい、コーヒーをポットに入れると車に舞い戻った。

匠は助手席でそれをパクつき、沢木もハンドルを握りながら片手でサンドイッチを腹に流し込んだ。2人の腹はものの10分もしないうちにそれらを全部平らげてしまった。ようやく人心地つくと、匠は意外なことを言った。

「沢木。車を警視庁へ付けてくれ。」

「え？ けいさつ・・・ですか？」

「そうだ。」

「でも沙織さんは。」珍しく沢木がうろたえた。

「大丈夫だ。いる場所はわかっていいるんだから、捕り物はプロに任せた方がいい。」

「わかりました。」

その他の理由は聞かず、沢木はアクセルを踏み込んだ。

## 第47話

応対に出たのは幸いにも沢木も面識のある真田という刑事だった。事の仔細を話すと、それ！大事件！とばかりにすぐ対策本部が設置された。相手が得宗寺家というのもだいぶ影響していたかもしれない。人質である沙織の身柄の安全を考慮し、捜査は極秘裏に進められた。とはいっても、すでにどこに囚われているのか判明しているの、彼女の救出と犯人の逮捕のため直行できる限りの人数を揃え、1班と2班に別れ現場に向かった。

警察との折衝はプロである秘書の沢木に任せ、匠は電話で日下を呼び出した。彼は駒木が借りている事務所近くの物陰に隠れ、刑事よろしく見張りなどしていた。匠からの呼び出しに、何かあったんですか！とすぐ指定されたカフェにやって来た。

「何かあったんですか？」日下は息せき切って匠の前に座ると同時に言った。

「そういうわけではないが、1つやってもらいたいことがあってね。」

匠は日下のためにコーヒーを注文すると、手タレのような美しく長い指で自分のコーヒーを飲み干した。そして長い足を邪魔そうに組み直し、グイと身を乗り出した。

「実は・・今回の件を警察に届け出たんだ。」

「とても簡単に言う匠に日下は思わず目をむいた。」

「そそんなことしたら、お嬢さんは！」

「居所はわかっているから救出はプロに任せた方がいいんだ。それよりもやってもらいたいことなんだが・・・12時きっかりにDUEL 1の新作発表をしてもらいたいんだ。メディアを使ってね。」

駒木たちが他社に売りつける前に先手を打つ。あいつらはDUEL 1が完成したことは知らないはずだ。それを利用する。沢木にもそれは言っている。早すぎでは失敗する恐れがあるから、だいたい

「11時半を目安に警察は行動を起こす計画だ。できるか？」

「できるか。とじつと見つめられ、日下は年下の匠に気圧されそうになった。ただでさえモデルのようなスタイルに“超”がいくつ付くかわからない程の美しい顔に見つめられているのだ。できない。な

どと思っけていても口にできないだろう。

「は、はい。やってみます。」額に吹き出す汗を手の甲で拭いながらそれだけ言うのが精一杯だ。

「頼む。DUEL 1の運命は君の肩にかかっている。頼むよ。」

頼む、と言われ、日下の心は弾んだ。これまで社長という肩書きのせいで、自分の身体を動かして何かをする、ということが殆どなかった。そのせいか、常日頃何か物足りなさを感じていたのだ。だから頼まれもしないのに、勝手に気を利かし駒木の事務所の見張りな

どしてみたのである。やっとな本来の仕事ができる！そう思うと運ば

れてきたコーヒーに手もつけずカフェを飛び出した。匠は仕方がな

いな、と言わんばかりにそのカップを手を取った。



## 第48話

得宗寺家では榊原が沙織の安否を気遣いながら匠の手腕を信じ、使用人たちの動揺（主である秀一の帰宅が原因）を押さえようと躍起になっていた。当の秀一は書斎に籠もったまま沈黙を保っている。それが彼らの不安に拍車をかけていた。

朝になり匠と沢木の登場で今度は別の不安が広がった。沙織の不在が彼らにバレてしまったのだ。これまでも沙織が帰宅しないことはあったが、それらは全て匠が絡んでいた。しかし今朝に限っては全く違っていた。匠の後ろにいるのは秀一の秘書の沢木。何か重大な事件が持ち上がったであろう事は誰の目にも明らかだった。その後再び出て行った匠たちの表情は暗く、心なしか焦りが感じられた。それは榊原もすぐ感じた。その変化をそのまま使用人に広がってはならないと、ことさら細かいことにもいちいち指図を出した。忙しくしていれば余計なことを考えずに済む。その時、呼び鈴が鳴った。主人の呼び出しに榊原は持っていた鉢植えの花をその場に置いたまま書斎に駆けつけた。

「お呼びでございますか。」

「用があるから呼んだのだ。」

「申し訳ございません。」ジロリと睨まれ、榊原は少し萎縮した。

「先ほど匠が来ていたのを知っているだろう。」

「はい。沢木さんと一緒でした。」

「うむ。今回の件の中間報告に来たのだ。」

「では！ 解決でしょうか！」思わず気色ばむ。

「そう焦るな。そうではない。そうではないが、大方解決だ。犯人の目星も沙織の居所もわかった。あとは山谷君の領域だ。任せておけばいい。」

「山谷？・・・警視総監の山谷五郎氏ですか！ししかし！警察に知らせたらお嬢様の身の安全は保障しないと。」

狼狽する榊原に秀一の目もとが微妙にほころんだ。

「私もそう言ったのだが、匠の考えは違うようだ。私も一応、親だからな。沙織の身が心配だ。しかし餅は餅屋。あいつはそう言っていた。なるほど、と私もそう思った。だから許した。・・・榊原。」

秀一は一呼吸置いたために立ち上がり、太陽の光をたくさん取り込めるように設計された大きな窓の傍に近寄ると、タバコに火をつけた。

「はい。」

その様子を不安そうに見ていた榊原の動揺が返事に現れていた。

「おまえの推挙がなかったら私はあの男の芽を幼いうちに摘み取っていた。沙織をくれだなどと、とんでもない事を言った男だ。たとえ子供でも許す事はできない。ところがおまえはそのとんでもない子供を私の後継者にしろ、と言つてきかなかった。あの時私はおまえをその場でクビにしようと思ったほどだった。・・・それについてはおまえとおまえの妻子には申し訳ないことをした。」

思いがけない告白に榊原の身体が硬直した。

「・・・あの時。私はおまえに匠を取るか、妻子を取るか、と迫った。まさかおまえの匠に対する想いがあれほど強いとは考えもしなかったからだ。・・・すまなかった・・・おかげで私は何年後になるかわからんが、安心して引退することができる。」

冷徹無比と謂われ、寸分の感情もない。といわれ続けてきた秀一が他人に対して初めて見せた優しさに、榊原の目から大粒の涙が流れ落ちた。喉に声がへばりつき、嗚咽となつて吐き出された。

「わわわたくしは・・・」

「もし、おまえ達夫婦の仲が修復可能ならここに呼び寄せるがいい。そして息子はここから学校に通わせ、最高の教育を受けさせるのだ。良いか、私がここににいるうちに2人を呼びなさい。」

「は、はい。あ、りがとう・・・ご、ざいます。」

ついに榊原はこらえ切れず、床にひれ伏して泣いた。

## 第49話

第3埠頭、商南倉庫付近をじわりじわりと取り囲み、真田以下、十数名の警官隊が今か今かと突撃の号令を待っていた。第一斑が現場に到着したのが8時40分。彼らは知らなかったがあと少し遅ければ黒猫のジョージは沙織を連れ出すところであった。もともと、沙織は薬できつちり眠っていたし、ジョージも前日からの疲労のせいかぐつすり寝込んでしまい、駒木からの電話音で目を覚ましたのが11時。というお粗末だった。

第二班が到着し、建物周辺は次第に緊迫した空気に包まれていった。ひっそりとひと気のなさそうな倉庫を囲み、じりじりと時間の流れを待つ隊員達。

外が物々しい光景になっているとは露知らず、ジョージは着信音でビクツと目が覚めた。

「は、はい？」

『何をやってるんだ！早く来い！』

森河の怒鳴り声が耳にガンガン響く。

「す、すみませんッ！すぐ行きますッ！」

慌てて時計を見ると既に約束の（といってもジョージには連絡があるまで待機。という指示が出ていたためそれほどの問題ではない。）時間を2時間も過ぎているではないか。これは大変！とばかりに、まだ薬が効いてぐつすり寝入っている沙織を揺り動かした。

「おい！起きろ、おい！」

何度揺すっても起きない沙織に、駒木からの命令も忘れ、ジョージは平手でその頬をぶった。乾いていた血の跡のそばを新しい血が流れた。ゴフゴフ！苦しさにようやく沙織の意識が戻った。

「足のロープは外してやる。これからある所へ移動しなきゃならな  
いからな。」

「いどう？ どこへ、行くの？」

「もうすぐあんたともお別れだ。短いときあいだったがお別れるとなると情が湧くつてもんだ。・・・どうだ、オレのコレになんねえか。いい夢見さしてやるぜ。」そう言つて薄笑いを浮かべ小指を立てて見せた。

「・・・いいわ、なつてあげる。その代わり、得宗寺家を本気で背負つていく心構えがあるならね。どう？」

得宗寺家。その名前を知る者にとっては三つ葉葵の印籠を出されたと同じ効果があるのだ。大概の人間はそれだけでしり込みしてしまう。黒猫も例外ではないらしい。突然キョロキョロとあたりを見回し、口数さえ少なくなり、とにかく早くここから出たいという素振りを見せ始めた。

「は、早くしろ！」

効果てきめん。沙織はゆっくりと立ち上がった。少しめまいを感じたが、ここで弱みを見せてなるものか。ぐつと足に力を込めた。

「行きましょう。」

弱腰になったジョージを引つ立て、ドアを開けさせ外に出た。・・・一斉にパパパとフラッシュの光を浴び、一瞬、2人は目が眩んだ。そこを複数の人間が取り囲み、あつという間に1人は捕えられ、1人は保護された。ものの5分とかからないあっけない幕切れだった。すぐ真田は本庁に連絡し、本庁から沢木へ被害者無事保護。の連絡が入った。11時36分のことである。

## 第50話

匠が沢木からその結果を聞いたのは朱雀公園の駐車場で指定された時間になるまで待機していた時だった。顔には出さないが匠は心底ホッとした。何より沙織が無事だったということが嬉しかった。残るは自分達と日下だけだ。匠は深く息を吸った。

「良かったですね。」沢木もホッとしたようだ。」

「ああ。沙織に何かあったら、オレはあの人に対して合わせる顔がない。」

沢木の瞳がチラツと動いた。（それだけです。あなたはお嬢さんを心底愛しているではありませんか？）言葉が喉まで出かかったのだが、これから始まる大捕物を前に匠の心を乱してはならないと、沢木は敢えてそれらを飲み込んだ。それは全てが終わってから聞くことにしよう。

「そうですね。さあ、そろそろ時間です。それは私が持つてましようか？」

主の安全が第一と考えた沢木の申し出に、匠は首を振ると無言のまま車を降りた。

「1人で大丈夫ですか。相手は武器を持っているかもしれないですよ。」

「心配するな。その時はその時さ。むしろオレは日下の方が心配だ。じゃ、行って来る。」

茶封筒にディスクを入れ歩いて行く様は、サラリーマンが仕事でちよつと外出、という印象を与えた。本当に大丈夫だろうか。沢木は匠のうしろ姿を目で追いながら日下に電話をかけた。

ビジネスホテル、“アクティ”の大宴会場は新聞記者、TV関係者でこった返し、いつになく騒然としていた。それというのも突然、各社、各テレビ局に得宗寺秀一の名で重大発表がある、と極秘

にFAXが届いたからだ。得宗グループ会長自らの名を出す、ということは余程のこと！と各上層部は判断し、すぐ記者やレポーターを差し向けた。もちろんそれは秀一が承認したものではなく、独断で匠が指示したことではあるが、報道陣にしてみれば得宗寺秀一の名前が重要なのだ。しかも12時になるまでは報道はもちろんのこと、こういった会見があることすら一切流してはならない。と厳戒令まで出たほどだ。彼らが色めき立ったのも無理はない。

その中で日下洋は極度に緊張していた。ハンカチを何度ももみくちやにし、ひっきりなしにボタボタ流れる汗を拭っている。こんなとき匠がいてくれたら！と彼は何度も思った。チラツと報道陣をカーテンのすき間から盗み見るたびにその数が増えている。いくら断れない状況にあったといっても、こんなことになるのなら土下座してでも拒否すれば良かった。日下の後悔は例に漏れず先に立ってくれなかった。

## 第51話

時間が迫るにつれ、日下は泣きなくなっていた。トイレに行く回数は数知れず。ホテルの従業員が心配し、医者呼びましようかと言ったほどだった。そんな時、沢木から電話がかかってきた。ところがあまりの緊張に声が出ない。

「日下君、大丈夫か？」

匠の言っていた、日下の方が心配だ。というのはこれのことだったのかと納得した。

「あああ。しゃしゃわきしゃん・・・わわたひは・・・ぼう・・・ダミ・・・れ・・・す。」

日下の声は震え、ガチガチと歯の鳴る音まで聞こえる。

「何を言ってるんだ！匠さんはきみを信じてこの役を任せたんだぞ！年下の匠さんが頑張っているんだ。きみがシャキツとしないでどうする！しっかりしろ！いいか、きみは1人じゃない。姿はなくても私達がついていることを忘れるな。安心して会見してくれ。主役はDUEL 1であつてきみじゃない。深呼吸をして・・・そうそう・・・そうだ。やればできるじゃないか。・・・よし！その調子だ。・・・オ？匠さんが戻って来た。・・・電話代わるうか？いい？　いいのか。代わらなくても・・・そうか、じゃ、成功を祈るよ。」

沢木の優しさが心に染みた。そうだ。オレにはアニメゲイトの社運がかかっている。こんなプレッシャーに負けている場合じゃないんだ！日下は自分に言い聞かせ、全身を奮い立たせた。しかし彼は沢木がついたウソを見破るにはあまりにも世慣れていなかった。沢木は日下を元氣付けるため、戻っていない匠を登場させたのだ。その効果は抜群だったようだ。日下は上着の襟に乱れがないかどうか確かめた。

12時の時報が鳴った。平日だが朱雀公園は子供を連れた母親が数人いた。それでもすべり台周辺は小さい子供が気軽に遊べる器具が少ないのかひと気はない。5分前に匠は紙袋をすべり台のてっぺんに置いた。何気ないふうを装い、そこから離れ一旦公園の外へ出た。その後、すべり台が見える位置に移動し物陰に隠れた。

まるで時報が合図だともいうように、サングラスをかけた1人の男がどこからともなく現れた。はじめ、人待ちしているように遠巻きに公園をブラブラしていたが、誰もあたりにいないのを認めると、すべり台に向かって脱兎の如く駆け出した。男はまっしぐらにすべり台のてっぺんに登ると紙袋をわしづかみにしそのままジャンプ。着地したかと思うとよろけながら走り去った。それを確認すると匠は目下に電話をかけた。あらかじめ自分からの電話を待つよう目下には言い含めておいた。

「目下か。奴らは予定通りやって来た。手筈通りやってくれ。すぐ始めるんだ。」

電話を切ると今度は沢木の待つ車へ急いで戻り、記憶した男の跡を付けるよう命じた。沢木も慌てて出てくる男の身なりをしっかりと眼に焼き付けていたらしく、すぐさまハンドルを切った。



## 第52話

「あの男に見覚えはありますか？」慎重に運転しながら沢木が口を開いた。

「おそらく、森河だろう。駒木自ら来ることはないだろうし、城崎は頭脳派だ。」

「どこへ行くんでしょう。」

「さあな。まっすぐ隠れ家に行くようなら初めから奴らの計画は失敗だ。クッションを置くなら・・・まあ・・・見込みはあるかもしれない。・・・しかし・・・」

「匠さんが相手ではどんな悪巧みも徒労、ですね。」

「そうだな。・・・フン。バカな奴らだ。」

とあるビルに入って行く男を見送って匠が呟いた。

「あのビルは？」

「駒木が事務所として最初に借りた所だ。所有者は商南物産。社長が駒木の縁者、と聞いたことがある。いずれにしても得宗グループの足元にも及ばん会社だ。」

「どうします？張り込みますか？」

「このままアクティに向かえ。日下が気になる。」

「はい。わかりました。」

2人の乗った軽自動車は商南物産ビルを通り過ぎ、一路、アクティに向かった。

たくさんのフラッシュを浴び、落ち着いたはずの日下の緊張が舞い戻った。とにかく正規版DUEL 1の発表をしなくてはならないと、懸命に力を振り絞り、記者団の前で口上を述べた。いくつかの簡単な質疑応答をしている最中、従業員に案内された匠が入ってきた。堂々としたその姿に、日下の目頭がジーンと熱くなる。新たな人物の登場に、記者たちの目がその若い男に向けられた。

匠は日下の隣に用意された椅子に悠々と腰を下ろした。DUEL 1の関係者らしいと気づいた記者たちはすぐ匠に質問をぶつけた。

「あなたはいったいどういう方ですか？」

「遅れて申し訳ありませんでした。私はアニメゲイト取締役。周防匠と申します。今日はお忙しい中、このように多くの方々に集まっていたいただき感謝いたします。」

匠は大きな身体を折り曲げ、丁寧に頭を下げた。

「取締役が会見に遅刻ですか？」

辛辣な言葉だ。しかし匠は表情を変えない。

「所用で少し遅れました。申し訳ありません。」

「所用って何ですか。この会見以上に大切なことだったんですか。」  
執拗に食い下がるレポーターに匠はややうんざりした様子で、

「申し訳ありません。そのことについてはのちほど説明いたします。この場合はDUEL 1についての応答に限らせていただきます。」  
ジロリと睨まれ、そのレポーターは他のレポーター達に後方に追いやられた。

「改めてアニメゲイトが総力を挙げ結集いたしました体感ゲーム、DUEL 1を明日、午後6時より発売いたします。」

いつの間に明日発売になったのかと、日下は驚いて匠を見た。ところが匠の表情には自信に溢れ、不安のかけらさえ感じられない。両手で現物を掲げたサマは、さながら王侯貴族のように神々しい。日下は吹き出す汗を拭いながら報道陣の集中攻撃に耐えることになった。

## 第53話

ジョージが警察に拘束されたことは露知らない駒木たちは計画通り森河が変装し、朱雀公園に行つてディスクの入った紙袋を持ってきた。あまりにも簡単だったため、駒木は不審に思った。窓から外をのぞき尾行が付いていないか確認した。至つて平穩なお昼の風景が広がっているとわかると、はやる心を抑え、ディスクを本体に差し込んだ。パスワードはいつもの0000。子供でもすぐ覚えられるようにと初期設定は0000にしてある。発表の段階でそれは省略されるのだ。

パツと画面が変わり、DUEL 1の文字が鮮やかに映し出された。森河と城崎が左右から覗き込む。やはり興味津々だ。指令に従いボタンを操作していく。彼らは一喜一憂しながらゲームに没頭していった。

部屋が薄暗くなり電気をつける頃になつて違和感に気づいた城崎が「ジョージに連絡してませんよね？」と言つた。はじかれたように駒木と森河が画面から眼を離れた。

「忘れてた！」

すぐジョージに電話をかける駒木。しかし圏外もしくは電源云々・との機械的な声がするだけで全く反応がない。すでに黒猫のジョージこと、高田譲二の携帯電話は警察の手で没収され、仲間の居所を吐かされるべく取り調べを受け始めていた。そうとは知らない他の3人は、肝心なときに役に立たないと雑言を吐きながらジョージが隠れているプレハブに向かおうと事務所を出た。

その時。目の眩むようなライトを浴びた。彼らは一瞬ひるんだ隙に数人の男達に押さえつけられた。ジョージのときと全く同じ、あつけない幕切れとなつた。証拠のディスクは押収され、3人は意外におとなしく連行されたが、駒木は不敵な笑いを浮かべ、なぜか

勝ち誇ったように堂々としていた。しかし、パトカーの移動中に街頭にしつらえられた大型スクリーンに匠の顔と共にDUEL 1の正規版緊急発売のにゅーすが映し出されているのを見ると、ガツクりと肩を落とし、悔しそうに「やられた。」と呟いた。

## 第54話

駒木以下、2名の逮捕の知らせを買い堅固のレセプションで聞いた匠は、日下にだけ耳打ちし、こっそり会場を抜け出した。そして沢木と共に警視庁に赴いた。そこでは真田が今か今かと2人を待っていた。駒木たちを乗せたパトカーは少し前に到着しており、3人は各々別の部屋に入れられていた。駒木に会って話を聞きたいと申し出た匠だったが、現時点では不可能だと真田に言われ、あつさり引き下がった。ダメ元で聞いてみた。と匠が言くと、真田は苦笑いし、当然でしょう。と付け加えた。

沙織が警察病院で治療を受けていると知らされた匠と沢木はすぐ病院へ直行した。真田によると、口の中を切っているのと精神的なショックを受けているため病院へお連れしたというのだ。

受付で案内を請うと、510号室に入院したということだった。エレベーターで5階まで行き、一番奥の部屋のドアを開けると、死んだように眠る沙織と、見たことのある女性が傍らの椅子に腰掛けていた。

「沙織！」

滅多に感情を表に表わさない匠が、沙織の腫れ上がり紫色に変色した顔を見て逆上した。沢木とその女性が必死で押さえ、何とか椅子に座らせた。

「今、薬で眠っておられます。ケガも数日で直るそうですから、どうぞお静まり下さい。」

女性の訴えがなければどうなっていたか。沢木は改めて匠という男がわからなくなった。

「本当に大丈夫なんだろうな！」

搾り出した声に女性は怯んだ。

「は、はい。ああの、私、先生を呼んで来ます。」

どちらに向かつて言ったのか定かではなかったが、女性は一刻も早くこの場を去りたいと言わんばかりに病室を飛び出した。

医師を待っている数分の間で、どうにか匠の身体から発せられていた怒りは収まったようだ。事実、医師と看護師を連れ戻ってきた女性に「さっきは取り乱して悪かった。」と本人にだけ聞こえるよう謝罪していた。

詳しいケガの状況を聞き、匠たちはひとまず胸を撫で下ろした。医療用語などチンプンカンプンの沢木だが、匠には全て理解できるのか更に突っ込んだ質問をしている。しまいには綺麗な発音のドイツ語を話し医師たちを仰天させた。

## 第55話

医師たちが帰り、どうにか落ち着くと、沢木は目の前にいる女性に気になりだした。匠とは面識があるらしいというのも不思議だ。単に匠だけの知人なら沢木が知らないのも無理はないが、沙織のベツドに付き添っているとなると事情は違ってくる。もちろん、奥向きのことは執事である榊原が仕切っているので沢木が知らないのも当然だ。それにしても妙だ。怪訝な日表情を察知したのかその女性が無言で口を閉ざし、身を乗り出した。ところが彼女に先んじて匠が口を挟んだ。

「鈴波早苗。榊原の妻女だ。」

え？と驚いたのは沢木ばかりではなかった。早苗の方が驚き、まじまじと匠を見た。

「いいんだ。もうわかってる。あなたから聞いた話から、もしか、と榊原を問いただした。あいつは何も言わなかったが、態度でそうとわかった。」

「榊原さんに奥さんがいたなんて・・・驚きです。でも、名字が違うのはなぜですか。」

「それはオレにもわからない。いくつか考えは浮かんだが、こればかりは夫婦間の問題だから。」

匠はつい、と早苗の顔を見た。早苗は下を向いたまま縮こまっている。

「それに。」匠は続けた。

「なぜこの人がここにいいのかもわからない。あんなに自分の正体を隠そうとしていたのに。これでは沢木のみならず誰もが不審に思う。名字云々はさておき、これだけは説明してもらいたい・・・どうです？もしあなたができないのなら今すぐ榊原をここに呼んで説明させますが。」

「と、とんでもありません！そんなことをしたらあの人に何て言わ

れるか！」

その態度から想像すると、よほど榊原の出現が怖いらしい。

「では、説明してもらおうか。なぜあなたがここにいて沙織の看病をしているのか。」

4つの目にじっと見つめられ、早苗は手が白くなるほど握り締めた。



## 第56話

「・・・10時頃でしたでしょうか。あの人から電話がありました。理由も言わず、今すぐお屋敷へ来い。ということでした。私がすぐ駆けつけるとあの人は裏門で待っておりました。お暇をいただいてから足を踏み入れた事がなかった私は、どんな理由があるにせよ、中へ入るのをためらいました。けれどあの人はどんな様の命令だからと、ただひと言だけ言って私をどんな様の私室へ連れて行ったのです。奥様にお仕えして数年、どんな様のお顔を拝見したことなど数回したなかった私にどんな様は今まで苦勞をかけた、これからは榊原の正式な妻としてこの家を切り盛りしてくれ。と仰つて・・・」

感極まつたのか早苗は顔を押しさえた。必死で涙をこらえている姿が痛々しい。匠と沢木は彼女が落ち着くのを辛抱強く待った。

「・・・そのあと・・・私はあの人から使用人たちに正式な妻としてまた、沙織様が成人になられるまでの女主人代行として紹介されました。そのうち警察からどんな様に電話が入り沙織様が入院されたお知らせがありました。そこであの人のお命令で使用人たちに詳しい事情は伏せて私がここに参ったのです。・・・こんな、こんなお姿にな、ら、れて・・・」

沙織のそばに近寄り、いとおしそくにその顔を撫でる早苗。匠はその様子をじつと見ていたが、やがてポン！と膝を叩き、「なるほど、わかった！」と言って立ち上がった。無言で顎をしゃくり、沢木に外へ出ると促した。そして早苗の背中を優しくポンポンと叩くと、「あなただけが便りです。沙織を頼みます。」と声をかけ廊下に出た。

「どう、思います？」

さっそく沢木が口を開いた。早苗の話がすぐには信じられないとい

った口調だ。

「おそらく、彼女の言う通りだろう。それしか考えられない。沙織の看病をしていることもそうだが、彼女は榊原の影に隠れて生きてきた。決して出すぎたことはいらないと思う。・・・とにかく一旦戻ろう。秀一氏に報告もしなくてはならないし、おまえもいつまでも自分の仕事を放っておくわけにはいかないだろう。」

「いえ。私は会長がご自宅にいらっしゃる限りフリーですから。その間何をしようと呼び出しがないうちは全く問題はありません。それにこんな経験。匠さんと一緒になければできませんからね。」

ニツと笑った沢木は秘書という立場より悪ガキ集団の1人に見えた。「ふん。遊びじゃないんだぞ。・・・でも、まア、いいか。終わりをければ全て良し。だ。」

「そうですね。」

2人は事件が無事解決した安堵感で胸が一杯になり、足取りも軽く得宗寺家へ戻った。

## 第57話

「それで？事件は前面解決したのだな。」

秀一の目に真つ向から見つめられ臆することなく匠は堂々と「はいすべて。」と答えた。脇で控えている沢木でさえ未だに秀一の目は怖いというのに、目前にいる周防匠という高校生はどれだけ計り知れないのだろう。

「警視庁の山谷から連絡があつた。おまえの手際の良さに感心していたぞ。」

「痛み入ります。なんとか解決できたのは私の力ではありません。沢木始め、榊原やアニメゲイトの社員全員のおかげです。私はただ傍にいただけにすぎません。買いかぶらないで下さい。図に乗ってしまいますから。」

「ははは。図に乗るか。これは愉快だ。しかし全員の力を結集できたというのは心強い話だ。よし！それぞれに褒美をやろう。各自、何がいいか、近日中に調べて報告するよう。」

秀一が高笑いをしたので沢木はギョツとなった。秀一の高笑いなど聞いたことがない。

「沢木。聞こえたのか。」

既にいつもの得宗グループ会長に戻っている。あれは幻だったのか？

「は、はい！」

「は、が余計だ。返事は1つにしろ、と言ってあるはず。」

「はい！申し訳ありません。」

「まったく。おまえといい、榊原といい。どうしたというのだ。」

「それはあなたのせいですよ。あなたに睨まれると非常に怖い。」  
喉の奥で笑いをこらえながら匠が口を挟んだ。

「なに。私のせいだと！」秀一の右眉が上がる。

「はい。そうです。かくいう僕も怖くて仕方ありません。」その顔は怖がっているようには到底見えない。

「ふん。そうは見えんな。おまえと話していると私の方がやり込められる。」

「とんでもありません。ホラ。今も僕の手は震えていますよ。あなたが恐ろしくて、恐ろしくて。」

「おまえのは笑いたいのを我慢しているからにすぎん！いいか。とにかく、さっき言った事を早急に伝えろ！」

「はい！」

慌しく沢木が出て行こうとするのを匠は呼びとめ、榊原にここへ来るようにと伝言を頼んだ。

## 第58話

「鈴波早苗。という女性ですが・・・」

沢木が出て行くと改めて匠は切り出した。

「すずなみ？誰だ。」

「ご存じないのですか？榊原の妻女ですが。」

「おお！彼女は鈴波というのか。それなら知っている。それがどうした。」

「沙織の枕元に付き添っていました。あの人なら安心と思い、そのまま看病してくれるよう頼んできたのですが。」

「沙織の？それは知らなかった。おそらく榊原の配慮だろう。」

「なぜ今まで彼女の存在を公にしなかったのですか。ぼくも、いや、沙織でさえ彼女の存在を知らなかったんですよ。なぜなんです？」

「・・・彼女を見ると沙織の母親を思い出すからだ。琴絵。沙織の母親だが、琴絵と早苗は主従関係を超えた絆で結ばれたとても仲の良い姉妹のようだった。常に行動を共にし、片時も離れなかった。私もそんな2人を見ているだけで癒され、仕事のことなど忘れてしまうほどだった。ところが琴絵が沙織を出産し、その後遺症でいとも簡単にこの世を去ってしまうと、私には早苗の存在が疎まれて仕方がなくなった。あの当時、早苗は榊原との結婚を控えていたのだが、私のわがままのせいで彼らは止む無く別れ、早苗だけがこの屋敷を去った。その上私は2度とこの家に近寄ってはならん。と禁止令までつけた。その後2人は極秘に結婚したらしいが、一切私には報告がなかった。当然だろう。私のひと言は天の声と同じ・・・前の料理長が老衰で死ぬ間際に言っていた。そういう主人に意見など言えるはずがないと。それから20年。ようやく私に謝罪の気持ちが生まれたのだ。だから榊原に妻子を呼び寄せ一緒に暮らすよう命じた。」

「そ、」反論しようとしたが、榊原の出現により中断された。

「お呼び、と伺いました。ご用件は何でございましょう。」

「・・・呼んだのはオレだ。」

「匠さんが？」

「そうだ。おまえに聞きたいことがある。」

「何でしょうか。」

「真面目に答えるんだ。いいな。」

「はい。」

「さっき、病院で鈴波早苗に会って来た。そして今、おまえ達のことを会長から聞いた。・・・何か言いたいことはないか。不平不満、何でもいい。言ってみる。責任はオレが取る。言いたいことが絶対あるはずだ。全部吐き出してくれ。」

「責任を取る。　　いつたいうことでしょうか。私には何もありません。それに高々高校生のあなたに何ができるといふんです。それにあなたはいつたい、私たちの何を知っているといふのです？　思い上がるのもいい加減にして下さい！　　だんな様。ご用がないのでしたら私は失礼いたします。」

一礼して立ち去ろうとする榊原に秀一が声をかけた。

「待ちなさい。」

## 第59話

「榊原。 匠の質問に答えなさい。 もしおまえが心の中に私への恨みがあるのなら遠慮などは無用だ。 全部吐き出しなさい。 そうしてくれた方が私の気持ちも休まる。」

「 お言葉でございますが。 私にはだんな様に対し、そのような気持ちを抱いたことなど一度もありません。 早苗にしても同じこと。 奥様と早苗の繋がりを目のあたりにしていた者なら誰もが感じたことでございます。 それに私たちが極秘裏に結婚した後など生活に困らないようにと、 だんな様はお気遣い下さいました。 それだけをもつてしても感謝こそすれ、 恨むなどもつての外でございます。 本来なら私も職を解かれ、 路頭に迷っても当然の身ですのに・・・」

頭を垂れ訴える榊原の足元に大粒の涙がこぼれ落ちた。

「・・・わかった。 ・・・オレが出すぎたようだ。 ・・すまなかった。」

「榊原。 匠もおまえのことが心配でお節介をしたのだ。 私に免じて許してやってくれ。」

「それはダメです！」 間髪を入れず匠が拒否した。

「なんだと？」

「ぼくは榊原の榊原の立ち入ってはならない部分に勝手に入り込み、傷つけてしまいました。 この責任は非常に大きいものです。 ・・・ぼくは一身をもつてこの責任を取らなくてはならないと思います。」

「何を言うか。 大げさな。」

「いいえ。 この過失は重大です。 ぼくは今から得宗寺家との関わりを絶ちます。」

突然の絶縁宣言に2人は驚いた。 とりわけ榊原のショックは筆舌し難いほどだ。

「たたた！」

顎が外れたかと思うような榊原のうるたえぶりは尋常ではない。それは秀一とて同じこと。違うのは動揺が顔に出るか出ないかの差だ。「とは言っても。周防建設は得宗グループの傘下に入っています。ですから関わりを絶つのはぼく個人、ということにして下さい。お願いします。」

「いったい。何をもってそういう結論に出るのだ。」と秀一。「ぼくは幼少の頃から沙織や榊原と親しくしてきました。しかし最近、それではいけないということに気づいたのです。他人であるぼくがこの家の人たちと必要以上に馴れ合ってはいけなかったのです。これからは安易に出入りしたりすることのないよう気をつけます。お世話になりました。」

匠は2人に頭を下げ、それぞれにありがとうございました。と言って部屋から出ようとして一旦、足を止めた。

「榊原。最後の頼みだ。聞いてくれるか。」

「た、く、みさん。」榊原の顔はすでに涙でぐしゃぐしゃになっている。

「なんだ、その変な顔は。オレの頼みっていうのは沙織のことだ。あいつはもういようだが強情なところがある。おまえの長年の経験でやつで面倒を見てやってくれ。頼むよ。」

「そ、そんな、できませ・・・ん・・・」

「できない？そんなに難しいことか。今まで通り接すればいいだけのことなんだがな。」

「できません！私に匠さんの代わりなど・・・だんな様、だんな様からも仰って下さい！」

「榊原。私は言うのは容易い。しかし、この男がその程度で前言を撤回するような人間か。それはおまえが一番良く知っているのではないのか。」

秀一は中立の立場を保っている。あくまでも自主的に解決させようという腹積もりらしい。

「その通りです。だからな、オレのことは初めからいなかったと思



つてくれ。」

「イヤです！小さな頃から手塩にかけ、得宗寺家の後継者として育ててきた匠さんを手放すなど。私には……」

とうとう榊原は執事という立場も忘れ、オイオイと泣き崩れてしまった。これには冷静なはずの匠も驚かされた。榊原の言う通り、匠にしてみれば本当の両親以上に面倒を見てもらった、いわば恩人が自分の目の前で泣き出したのだ。それを見た秀一はようやく自分の意見を口にした。

「匠。榊原の気持ちを汲んでやってくれ。私はすぐにまた屋敷を留守にしなければならん。今度の出張は少し長くかかりそうだ。それには家の中に心配事があつては安心できない。おまえの気持ちもわかるが、ここは私の顔を立ててくれんか。」

「……わかりました。得宗グループ総帥ご自身の口からそう言われては仕方ありません。前言を撤回します。その代わり……出かける前に沙織の顔も見てやって下さい。お願いします。」

「わかった。そうしよう。……榊原。これでいいか。」

秀一は泣き続けている榊原に優しく声をかけた。

「は……い。あり……がとう……ごさい、ます……」

なおもしやくりあげる榊原は2人に向かって手を合わせた。

「バカだな。こんなことくらいで拜んだりするな。オレは神様じゃないぞ。ホラ、しっかりしろ。」

匠は榊原の脇を支え、どうにか立ち上がらせた。

「もうしわけ、ありま、せん……」

「わかったからもう泣くな。そんな顔、他の奴に見られたら一生の恥だぞ。しばらく部屋で休め。いいですよ？」同意を求めるように秀一の顔を見る。

「当たり前だ。二目と見れぬひどい顔をして人前に出てはならん。これは命令だ。しばらく部屋で休み、その後、匠の指示に従いなさい。いいな。」

「はい。」

トボトボと部屋を出て行く榊原の背中が小さく見えた。彼が自室に入るまでに他の使用人に見咎められたかどうか2人にはわからなかった。

## 第60話

榊原が出て行ってしまうと、匠はため息をつき、近くのソファに腰を下ろした。

「どうしたのだ。ため息など、おまえらしくない。」

振り返った秀一の表情にはさきほど見せた優しさのかけらも窺えない。

「榊原のあんな姿は見たことがありませんでしたから。正直、ショックでした。」

「私もだ。早苗と別れると通告した時でさえあんなに取り乱したりはしなかった。よほどおまえが好きらしい。」

「これからは言葉に気をつけるような心がけます。外であんな風にやられたらたまりませんからね。」

「はははは！もうせんだろ。おまえがこの家を縁を切るなどと馬鹿げたことを口にさえしなければな。」

「そう、ですね。ところで、沙織をいつまであの病院に置くのですか？」

「明日にでも退院の手続きを取るよう沢木に命じよう。」

「そうですか。それで、出発はいつですか。」

「明日の午後1時の飛行機でスペインへ行く。」

「沢木も一緒ですか。」

「いいや。今回は私1人だ。向こうで現地秘書の初柴と会う予定だ。なぜそんなことを聞く。」

「ジロリ、と見られて匠は肩をすくめた。」

「今回の件で沢木は非常に良く働いてくれました。できるなら休暇を与えていただきたいと進言しようと思ったのですが、それを伺って安心しました。」

「最初からその予定だった。おまえにもそのうち紹介しよう。世界を大きく10ブロックに分け、それぞれ現地秘書を配置してある。」

中にはその地で雇い入れた者もいるが、全員男だ。女性秘書はスキヤンダルになる要素は初めから排除していたのだ。現在独身の私は格好の餌食だからな。」

笑顔も見せず冗談を言う秀一に、匠は笑っていいのかダメなのか計りかねた。

「そう・・・ですね。」辛うじて返答した匠の顔は不自然に歪んでいたかもしれない。

「沙織にはお会いになりますよね？」

「そうだな。これから行ってみるか。おまえも一緒に行くか。」

「申し訳ありません。徹夜したので少々疲れました。明日になれば警察から改めて呼び出しがあるでしょうから少し休みたいです。」

確かにその目の周りには薄っすらと隈が現れている。

「ふん。一晩や二晩の徹夜で疲れたなどと。鍛え方が足らんのではないか。私の若い頃は1週間、ほとんど眠らず仕事をしていたこともあった。それをおまえという奴は。たるんどるぞ。」

秀一の愚痴も今の匠には雲の上から聞こえる宇宙語にしか聞こえない。

「何とでも仰つて下さい。とにかく、ぼくは帰ります。」

余力を総動員して（周囲からは普段通りにしか見えないが）匠はやつとの思いで立ち上がり得宗寺家をあとした。外は既に真っ暗で、街灯だけが道しるべとなったが、10年以上も通っている道だ。迷うわけもなく自宅に戻るとそのままバタツとベッドに倒れ、翌日、母の明子に起こされるまで夢も見ることなく爆睡した。

## 第61話

「・・・たく・み・・・たくみ・・・匠ッ！ 起きなさい！警察から電話よッ！」

けたたましく母、明子の声がキンキンと耳に痛い。匠はベッド脇の受話器を手探りで取った。

「・・・はい？・・・」

寝起きというのがはつきりわかる程のしゃがれ声だ。

「真田ですッ！お疲れのところ大変申し訳ありませんが、これからご足願いたいのですが、いかがでしょうかッ！」

母に負けないほどの大きな声が受話器の向こうから響いた。ソワソワしているのが声の調子でわかる。時々、「ハッ！ただ今！」と誰かに返答している。その都度、声がぐくもるのは送話部分を手で押さえているからだろう。話ぶりから相手は偉い人のようだ。それでも寝起きの匠は思考能力がほぼゼロの状態にある。それが誰であれ、お構いなしだ。

「オレは・・・いま・・・さい・・・うに・・・きげん・・・がわるい。ジャマするな！」

最後は怒鳴りながら電話を切ってしまった。再び爆睡。次に目が覚めたのは夕日が窓から差込み顔を照らし、その眩しさに耐えられなくなっただからだ。

（朝か・・・ん？・・・たいへんだ！）

時計を見ると5時半。しかし午前と午後が逆になっている。ベッドから飛び起き、部屋のシャワーを浴びるとすっかり身体は元の調子に戻っていた。今度は空腹を感じ、キッチンに下りていくと、母と別な声が軽やかに談笑している。その人物は匠に背を向けて座っていたが、明子の表情の変化でくると振り返り、親しそうな笑顔を見せた。

「お待ちしていました。朝、電話をしたときは怒鳴られてしま

いましたからね。失礼かとは思いましたが押し掛けてしまいました。

「真田だった。ところが匠には電話を受けた記憶がない。増して昨日今日会ったばかりの人を怒鳴るなんて・・・あり得ない。そう思った。」

「冗談でしょう？ぼくは電話など受けていませんよ。」

冷蔵庫から牛乳を取り出し、コップに注ぎながら言った。

「あら？私、あなたに電話取り次いだわよ！」脇から明子が口を挟んだ。

「ウソだろう。全然覚えがないぞ。」

あつという間に2杯ゴクゴクと牛乳を平らげ、コップを置いた。

「本当よ。確かに警察の方だったわ。真田さん、というのはさっき知ったんだけどね。」

明子の助け舟に真田はどうです？とばかりに胸を張った。匠にとっては信じがたい話ではあるが、そう言われてみれば、おぼろげに電話を取り怒鳴ったような気がしてきた。あれは夢ではなかったのか、一応聞いてみることにした。

「もしかすると。ぼくは。あなたに、失礼なことを。たとえば、

怒鳴ったりしました、か？」

半信半疑な口ぶりに真田は微笑みながら頷いた。

「いやあ、今朝は本当にびっくりしましたよ。電話を切ったあと心配になりましたね、沢木さんに聞いてしまいました。周防さんにこういうわけで叱られましたってね。そしたら沢木さん、何て言ったと思います？匠さんに怒鳴られるなんて余程のことだ。間が悪かったなあ。なんて、まるで他人事のように言っんですよ。それからとにかく匠さんの機嫌が直るまで待つことですね。とも言われ、失礼かと思ったのですが、私も仕事上やむを得ず、お邪魔したわけなんです。」

失礼とは言ったものの、真田は心にもないことを言っている、と匠は感じた。しかし仕事上と言われると（警察からの呼び出しは予想

していたので、言い返すこともできない。しぶしぶではあるが、匠も納得せざるを得ない。

「そう、でしたか。申し訳ありませんでした。それで、いつからお待ちなんですか。」

「そおねえ。１０時くらいでしたかしら。ここにいらしたのは。お昼に一旦戻られて、またいらしたのは１時だったかしら。」と明子。「１０時。ですか？ 声をかけて下さればお待たせせずに済んだでしょうに。」今度は心底申し訳なく思い、頭を下げた。

「いいえ。とんでもありません。待っているのも私の仕事ですから。署までご足労願えますか？」

物腰は柔らかだが有無を言わせぬ口調だ。

「むろんです。さっそく行きましょう。じゃ、行って来る。」

明子に声をかけ、真田に先んじて玄関を出た。あたりはすっかり暗くなっており、待機していた自動車の色合いと相まって危うく行き過ぎるところだった。時計を見ると６時４０分。秋の日暮れは早いのである。

## 第62話

警視庁に着くとすでに沢木と日下が来ていて匠の到着をクビを長くして待っていた。匠は2人に改めてねぎらいの言葉をかけ、あわせて待たせたことを詫びた。沢木はともかく、日下などは恐縮して身体が力チ力チになっている。それを横目でチラツと見て、匠はかすかに肩をすくめた。視線を戻すと沢木が微笑みながら頷いた。匠と同じ気持ちでいることを伝えたいらしい。行動を共にするうちに情が移ったのかもしれない。しかし匠の心中は違っていた。(ゲームしか知らない日下に社長職を担わせるのは酷か。次の会議での検討事項に加えなければならぬ。)使う側とされる側の違いなのであろう。既に匠は経営者の顔になっている。ほんの数秒の間にこれだけの思惑が錯綜した。

2人に対する聞き取り調査は一通り終わっていて匠だけが別室へ通された。そこには大きな体躯をしたメガネの意地悪そうな男が尊大に座っていた。真田が脇で直立で控えており、匠にその男が警部の有馬であることを、有馬には匠を名前だけ紹介した。あいさつしようとした匠が一步前に出ようとすると、有馬はジロリ、とメガネの奥から睨みつけ、無言で椅子をしゃくった。座れ、という意味なのだろう。ハナから匠をバカにした態度に、それならこちらも同じやり方で、とばかりに長い足をわざと高く上げ、癩に障るほど格好をつけて腰を下ろした。現役の高校生と知っている真田でさえ人知れず赤くなった。(これほどまでに完璧な人間がいるだろうか。)考えとは無しに脳裏に浮かんた。しかしそうとは知らされていない有馬は、匠の動作がカンに障ったらしく、なおさら横柄になった。

「名前は。」

さつき真田から聞いただろう。喉まで出かかったが、真田の顔が目に入りやめた。有馬の後ろで小さく両手を合わせ、拝みながら匠を見ているのだ。それでも気持ちは収まらず、目には目を、とばかり



に鼻で笑ってやった。

「なんだ、その態度は！」

ツバがパパッとテールに飛び散り、顔をしかめる匠に有馬の怒号が飛ぶ。

「私をバカにしているのかッ！」

激昂しやすいのか、威圧的な態度を取って相手を萎縮させるの戦法なのか、現段階では判断しかねるが、それに対抗するのはあくまでも冷静な態度。これしかないだろう。

「今朝といい、今といい、おまえは警察をナメとんのかッ！」

匠が黙っているのをいいことに大声で畳み掛ける。

「ああ。思い出しました。朝の電話で真田さんの隣でゴチャゴチャ言っていたのはあんただったのか。真田さん。ようやく思い出しましたよ。確かにぼくはあなたと話をしました。今まで半信半疑でしたが、今、この人に言われ・・・そうです。確かに電話を受けました。そうだ！そうだ！」

顎を撫で、うんうんと頷く匠に有馬がブチ切れた。

「きさまあ！ひとの話を聞いとんのかッ！」

匠の襟を掴みかからんばかりに目をむき、ぐつと身を乗り出す。

「うるさいな。耳元でそんなに大声を出されたら頭にキンキン響く。真田さん。ぼくは容疑者ですか？この人の物言いは100%ぼくを犯人扱いしている。こんな態度を取られるなら捜査に協力しませんからね。もちろんしかるべき代理人を立ててあんたを告訴することもできる。おそらく前の2人にも同じことをしたのでしょから、得宗寺家と真つ向から戦おうという覚悟はおありなのでしょうし。」

有馬を容赦ない目つきで睨む。慌てたのは真田である。間違った権力に屈服するつもりは毛頭ないが、この件に関しては匠の言う通りだ。相手が得宗寺家ではなおさら分が悪い。

「ぶぶぶぶちよー！この人は高校生なんですから、押さえて下さいッ！お願いします！」

何とか取り繕うと必死だ。両方に気を遣い、ハラハラしている姿が

痛ましい。気の毒に、とは思ったが、この有馬という男に対しては徹底的にやつつけてやろうと決めた。ところが有馬はそんな真田の心がわからず、ピリピリと青筋を立てて怒った。

「高校生だとオ！未成年の分際で大人をコケにするとは言語道断！ようし！やれるものならやつてみる！得宗寺家だとオ！だいたいな、おまえら高校生はそういった権力者の名前を出せば事が済むと考えているところが気に食わんだ。まったく！高校生だア？ウソをつくな。生意気に年上の私に向かってその口のききかたは何だ！」  
ゆでダコみたいな顔でがなり続ける有馬の後ろでオロオロとどうしていいかわからない真田。対照的な2人に匠は笑いをこらえるのに必死だ。それにしても得宗寺家の名にまったく怖気づかない有馬という男。いったいどういう人間なのだろう。匠はそちらに興味が沸いた。真田の顔も立てねばなるまいと、努めて穏便に試してみよう。そう思った。

## 第63話

「申し訳ありません。ぼくが悪かったです。有馬さんの立場を軽んじたつもりはありませんでしたが、気分を害されたのならこのとおり、謝ります。」

一転、下手に出た匠に、有馬のみならず真田までもが目を見張った。付き合いの長い人間ならそれが匠の手法だとわかるのだが、付き合いのない2人にとっては面食らう事だったに違いない。

「わ、わかればよろしい。私も少し言い過ぎた。これからは穏やかに話し合おうじゃないか。え？周防君。」

最後の『え？周防君』が余計なひと言なんだ。いつもそれで敵を作ってしまう。・・・真田は匠が今にも怒り出すのではないかと気がではない様子だが、匠にとっては具にもつかない程度のこと。冷たい目線で有馬を見やった。

「そうですね。ところでひとつ、伺いたいのですが、宜しいでしょうか。」

「な、なんだね。」一変して有馬の口調が優しくなった。とはいうものの、尊大な態度に変わりはない。

「ぼくが先ほど得宗寺家の名前を出した時、有馬さんは堂々となさってましたね。普通の人なら名前を聞いただけで震え上がってしまうんですが、なぜですか？差し支えなければその理由を教えてください。」

「ハッ！そんなことか。簡単なことだよ。私はああいう輩が大嫌いでね。権力を笠に何でも通そうとする。おまけに財力があるから始末におえん。こちら毎日タバコ代もケチっているのに、今日のランチはホテルだの、ディナーは会館だのと、いい加減にしろって言いたいね。まったく馬鹿げとる。身を粉にして働いても俺たちは一生うだつの上からん生活だ。だいたいだね。」

両肘をテーブルに付き、人差し指を立てて講釈を始めそうになった

時、いいタイミングで真田が割って入った。

「警部。周防さんをお呼びになったわけは。」声に焦りが感じられる。

「おお、そうだった。ええと、なんだったかな。ああ、駒木たちのウラを取るんだったな。失敬、失敬。」

真田から供述書を受け取ると、有馬は改めて匠の顔を下から上へ、上から下へ舐めるように見てから口を開いた。

「これによるとだな。駒木たちはアニメゲイトという会社のゲームソフトの奪取目的で得宗寺沙織さんを誘拐した、とあるけれども、それで間違いはないかね。」

「ええ、間違いありません。」

別段、低姿勢になる必要はないのだが、この手の人間は下手に出たほうが用事は早く済む。ただ身体的にどうしても下手に出られないのがその長い足だ。普通に腰掛けていると有馬に当たってしまうため、匠は当初から足を組んでいた。それが有馬には許せないらしい。「き、きみイ！その足は何とかならんのか！」

「すみません。ですがこうすると。」足を下ろし、真正面を向くと、ゴツン！と有馬の足にぶつかった。

「こんな風になるんですよ。申し訳ありませんが、このままでお許し願えませんか。」

「ん？うつむ。」

有馬も現に足と足がぶつかってしまっただけでどうすることもできず、しぶしぶ承知した。後ろで真田が必死に笑いをこらえている。

「これが、脅迫状です。これに従ってばくはデイスクを持って公園に行き、指定の場所に置いてきました。その後、犯人とおぼしき人物の後を付け、あのビルに入ったのを見届けて真田さん達に連絡したのです。その後の逮捕劇については多くの関知するところではありませんので聞かれてもお答えしかねます。」

脅迫状を見せられ、有馬は勢い良く引いたくった。食い入るように読み、匠の簡単な説明で納得したようなしないような、どちらとも

つかない顔をした。

「もつと詳しく説明してくれ。初めからこれは誰がどのようにして持って来たのか、きみはこれをどこで受け取ったのか。その後の経緯を詳しくだ。」

どうしても有馬は匠を解放したくないようだ。極力長期戦には持ち込みたくない匠は、一方的にたたみかけることにした。

「では。最初から説明いたします。」

それからの話には案の定、筆記者が根を上げるほどになった。

## 第64話

「ここは？」

「お嬢様のお部屋でございますよ。」

柔らかな声に沙織は顔をその方向に向けた。しかし腫れあがった顔では思うように動かすことができない。

「ご無理をなすucciやいけません。まだ直られていないんですから。」

声の主は労わるように優しく濡れタオルを交換してくれた。沙織はようやく目の端でその人物を見とめた。

「さ、なえ、さん？」

「はい。」

「どう、して。あ、あなたが？」

「榊原の言いつけで私が看病させていただいております。ご気分は如何ですか？」

「ええ。ありが、とう。私、すっかりあなたに、甘えてしまったの、ですね。ごめんなさい。でも、どうして、ここに？」

辛うじて声が出ている状態の沙織を早苗は不憫になった。この世に生を受け、実母である琴絵が亡くなってからというものずっと気にかけてきたのだ。

「そのことはお嬢様がお元気になられてからゆっくりお話しいたしますから。今はお身体を休めることが第一です。もう一度、目をつぶって。まあ！どうなさいましたの！？」

突然ベッドから起き上がるうとする沙織に、早苗は彼女のどこにこんな力があつたのか、と驚くと同時に慌ててその身体を押しとどめた。

「た、たくみ、さんは？ 私、じつとしてなんかいられないの。」

「匠さんは今、警察です。ご心配なさらずお嬢様はお休みになってさあ。」

「でも。」

「大丈夫ですよ。戻れたらすぐ起こして差し上げます。ですから今はゆっくり・・・ね。」

母の愛情を知らずに育った沙織にとって、早苗の言葉はまるで魔法の如く彼女を従順にさせた。目を閉じた沙織の耳元で、早苗は優しく子守唄を歌った。そして再び沙織は深い眠りに落ちた。

## 第65話

柱に掛けてあつた時計の針は既に11時を回っていた。有馬、真田、そして筆記をしていた刑事は皆、心身ともに疲労困憊していた。それでも匠は今回の事件のあらましをしゃべり続けている。いい加減やめてくれと言いたげに有馬が手を振っても気づかぬふりをして声を大にしてしゃべる、しゃべる。普段の匠ならおよそ考えも及ばないことだが、有馬に対し、かなり頭にきていたので、やつつけてやるうという心積もりだ。巻き添えを食つたのは真田と筆者の刑事。ようやく長い話が終わったのはそれから1時間後のことである。

「……簡単ですが、ぼくから言う事は以上です。ご質問があればどうぞ。」

キレイな手を有馬に差し出し言葉を促す匠。しかし口を動かすことさえ億劫になつていた有馬は、ガックリ肩を落とし、もう帰つていいというように手を前後に振った。待つてました、とばかりに匠はそれじゃ、と言つて急いで部屋を出た。すぐその後を真田が追う。

「申し訳ありません。」

何度も頭を下げる真田。匠はその肩に優しく手を掛け、自分よりずっと背の低い刑事を見下ろした。

「真田さんもああいふ人を上司に持つと苦労しますね。」

思いがけない労いの言葉に、真田は声もなくうつむいた。まもなく小刻みに肩が震え始め、足元にポタポタと涙が落ちた。日ごろの苦労がひしひしと伝わってくる。

「近いうちにきつといい事がありますよ。それまでの辛抱です。……それでは。」

ポンポンと軽く叩き、匠はウインクをして警視庁を後にした。



## 第66話

3日ぶりに登校した匠は、何十人という在校生に取り囲まれた。みな口々に昨日の事件の真相を聞いたがった。新聞部の連中はここぞとばかりに匠の顔をアップで撮ろうと躍起になっている。あまりの騒々しさに神経を逆なでされ、匠はジロリと彼らをねめつけた。一瞬にして水を打ったように静まりかえる生徒達。匠の進路を妨げぬよう自然に道ができる。

かろうじて1時限目に間に合ったものの、学校へ行く。ただそれだけのことが非常に難しいということを痛感した。クラスメイトは匠の性格をおおよそ把握しているので、他生徒のようなあからさまな態度は示さない。しかし物言いたげな目つきが癢に障った。

「何か言いたいならはつきり言え！」ついに声を荒げてしまった。

「いいの、か？」1人の生徒が口火を切った。

「ああ。そんな目で見られるくらいなら、はつきり言われた方が楽だ。」

その生徒は廊下にいた誰かを手招きした。すると3名の女性徒がビクビクしながら入ってきた。

「あ、ああの。得宗寺さん。きょう、けっせきですか。」消えそうな声で1人が言った。

「なに。」

「あ、ごめんな、さい！」

「謝らなくていい。オレの方こそ悪かった。あいつは休みだ。それがどうかしたのか。」

「そう、ですか。わかりました。」

「わざわざそんなことを聞きに来たのか。」

「す、すみません！で、でも。何の連絡もないし、あたし、今日、当番なので、先生に報告しな、あ、わ、わかりました。ありがとうございましたッ！」

彼女たちはそれだけ確認すると足早に逃げて行った。当番だと言ったのは里見京子といって沙織とは仲の良い部類の生徒だった。

ところが、彼女たちがいなくなっても教室全体の重苦しい雰囲気は消えない。

「まだ何か言いたい奴がいるならはつきり言ったらどうだ。」匠の低い声が響く。

だが誰も口を開かない。そのうち遠巻きにしていた生徒が静かに授業の準備をし始めた。それが合図だったのか、始業のオルゴールが鳴った。すると誰ともなくホッとため息をついた。隣の席にいた上田がポンポンと匠の肩をたたいた。それで終わり、ということなのだろう。匠はつくづくクラスメイトのありがたさを感じた。野次馬根性で事件のことを聞きたがるだろうと、あえて自分から提起したにも関わらず、誰ひとりとしてそれを口にする者はいない。精神的に疲れていた匠にとって、教室が安らぎのひとつになった。

## 第67話

昼。昼食はどうしようかと考えていると、来客があると同級生が教えてくれた。いったい誰だろう、と指定された場所に行くと、得宗寺家の料理人の1人が所在なげに立っていた。匠の姿を見つけると初めてホツとした笑顔になり、嬉々として頭を下げた。足元には何やら大きな包みがあった。

「どうしたんだ。何か用か。」

「はい。お嬢様から匠様の昼食のお世話をしてくれと言われてきたのですが、この学校、広くて道に迷ってしまつて。ちょうど通りかかった生徒さんをお願いして匠様を呼んでいただいたのです。ご迷惑だった、でしたでしょうか。」

加賀美というその料理人はまだ20代半ばで、料理学校卒業後すぐ得宗寺家に入った。匠と年も近いこともあり、目にかけている使用人の1人だった。彼は暑くもないのにしきりに額の汗を拭っている。朱雀高校の規模の大きさに圧倒されたのだろう。

「そうか。悪いな。・・・今日のメニューは何だ。」

そう言つて匠は近くのベンチに腰掛けた。加賀美は即席のテーブルを組み立て、その上で大きな包みを広げた。

「匠様がお疲れ、と伺いましたので、好きなものを作りました。

舞茸のおこわ、にらの卵とじ汁、ナスの浅漬け、白和え、若鶏の香草焼きでございます。デザートは巨峰と洋ナシのコンポート、お飲み物はいつもの得宗玉露をお持ちいたしました。」

得宗玉露とは、得宗寺家所有の茶畑から採れるほんの一握りの超極上茶葉である。これは世界の銘茶5選の1つであり、飲むことはおろか、一般民は見ることもすらできない代物だ。それを匠は常用している。いわば匠のためだけに作られている茶葉といっても過言ではない。当主である秀一でさえなかなか飲むことができない。それだけをとつてみても匠に対する得宗寺家の扱われ方の重さがわかる。

「そうか。うまさうだな。」

まともな食事をしたのがいつだったか忘れてしまった。匠は美味そうに並べられた料理を全て平らげ、ごはんは3杯もおかわりした。加賀美は匠の食欲に驚くと同時に、沙織以外の人間が作った食事を食べたのを見たことがなかった。それも全部である。絶句してしまつた彼を見て、初めは不思議に思つた匠も、ああ、そうか。と珍しく笑顔を見せた。

「うまかつた。こんなに美味いと感じた料理はなかった。一流の料理人になれる。・・・いや、既に一流の腕前だな。ところで、沙織の具合はどうだ。」

お茶を飲みながら気になっていたことを聞いた。

## 第68話

「は、はい。ずっとお休みでしたが、朝、一度気がつかれて榊原さんをお呼びになり、匠様のお世話を頼まれた後またお休みになられたそうです。」

料理人として一流と褒められ気もそぞろになった加賀美は頬を上気させ答えた。後片付けをしている彼を見て、匠は何を思ったか、突然その腕を掴んだ。ハツとして顔を向けた鏡の顔は一変して恐怖で引きつつている。これだけでも匠の存在がかなりの恐怖を与えているかがわかるというものだ。

「そんなに怖がらなくていい。それより紙とペン持ってないか？」

「は？ かみと、ペン？ ですか？」

「ああ。ペンは持っている。紙だ、紙。何でもいい。」

匠は加賀美がポケットから出したコピー紙に（表は朱雀高校内の地図が書いてあった）何やらサラサラとしたためそれを四つ折にし、また加賀美に手渡した。

「いいか。これを榊原に渡せ。それまで絶対、誰にも見せるな。もちろん、おまえも見えてはいけない。いいな、万が一守れなかったらおまえは即刻クビだ。わかったな。あとで様子を見に行く。」時計を見ると1時半になろうとしていた。午後の授業は間もなく始まるが、幸運なことに匠の選択科目ではないため、沙織の欠席理由を説明するべく教官室へ足を向けた。

回廊で加賀美からメモを受け取った榊原は開口一番、そんなバカな！と声高に叫んだ。その表情はより加賀美を不安のどん底に突き落とした。何か不始末をしてしまったのだろうか・・・目の前に家族の顔がじわっと浮き上がってくる。

「本当に、匠さんがこれをおまえに渡したのか？」

2度、3度とメモと加賀美の顔を見比べる。喉に声がへばりついて  
いる加賀美は返事をするこゝとさえできず、ただ小刻みに頷くばかり。  
「確かに筆跡は匠さんのものに違いないが・・・本当に本当なのだ  
ね？」

何度も念を押す榊原に加賀美の恐怖は頂点に達し、そのまま気を失  
った。

## 第69話

「おい！しっかりしろ！加賀美！おいッ！」

頬を叩かれようやく気が付いた加賀美だったが、今度は身体中震えがおこってきた。歯と歯がガチガチ鳴っているのが第三者にさえ聞こえる。

「ねえキミ！料理長を呼んできてくれ！」

榊原は近くを通りかかった掃除係の女の子にひと声かけると加賀美の身体を抱き起こし、傍らのソファに横たえた。

榊原からの伝言を聞いた白井は何事か、と巨体を揺らして走ってきた。

「いったいどうしたんですか？」

ハアハアと息遣いも苦しそうだ。榊原は例のメモを無言で渡すと、別の女の子に濡れタオルを持ってくるよう命じた。

メモを読んだ白井の驚きは榊原以上だった。

「何かがよほどお気に召されたのでしょうか。私としても一概には信じられないことですが。ご命令とあらばいたし方ありません。今晚からそうして下さい。あ、それからこの男の待遇を変えねばなりませんね。」

榊原と白井はヒソヒソと何やら相談し、それが終わると白井だけがその場に残った。本来なら平手を打ってでも加賀美の目を覚まさせるところだが、例のメモが白井に与えた衝撃が大きすぎて容易に次の行動に移れないでいた。副料理長が心配して様子を見に来たときには、加賀美の側でぼうつと座っていた。

「料理長！いったいどうしたんですか。榊原さんに呼ばれて行ったと思ったらそのままだなんて！今晚のメニューのチェックをお願いしますよ。料理長！」

肩を揺すられ、初めて彼の存在に気づいた。と、ほぼ同時に加賀美も目を覚ました。

「あ？あ、ああ。中井か。と、加賀美。加賀美はどうした！」

「は、はい。ここにいます。すみません。ご心配かけて。」

「おまえ、大丈夫か？」

「はい。大丈夫です。でも、オレ、どうしたんだろう。」

額のタオルを取り、鏡は身体を起こした。

「まあ、あんなことがあつては倒れるのも無理はないな。ワシでさえ卒倒するかと思つたからな。」

「あんな事？」

2人、口を揃えた。



## 第70話

「則之。おまえ、匠ぼっちゃんの昼食に何を作って差し上げたんだ。」

白井はいつも通り、加賀美を名前で呼んだ。思いがけない質問に加賀美と中井はお互いの顔を見た。

「どうした。ワシは何を作ったと聞いている。別におこっているわけではないから正直に答えなさい。」

「は、はい。あ、あの。お疲れのご様子と鈴波さんから伺いましたので、舞茸おこわとにらの卵とじ、ナスの浅漬けに若鶏の香草焼きと白和え。それから身体が疲れている時は煮豆がいいと祖母に聞いていたのを思い出してそれをお出ししました。あ、デザートは巨峰と洋ナシのコンポートで、お飲み物はいつもの得宗玉露です。」

それが、なにか・・・再び加賀美の心に不安がよぎる。

「そうか・・・おまえ、今晚から匠ぼっちゃんの食事の用意をなさい。これはぼっちゃん直々の命令だ。」

普段のままの言い方に、2人は気の抜けた顔で白井を見た。先に状況を把握したのはやはり中井で、突然素っ頓狂な声を上げた。

「なななんですってえ！こ、こいつに匠さんの食事を作らせるですってえ！！ああ！なんてことだ！料理長、い、いったいどういうことなんですッ！」

尋常ではない中井の態度から、加賀美もそれがとんでもないことだと気づいた。でもなぜ、副料理長はこんなに興奮しているんだろう。と思った。それも当然のことだ。匠が沙織以外の人間が作った料理を一切受け付けない、ということを彼は知らなかった。習慣から沙織が食事の世話をしているのだ、と勝手に思い込んでいたし、その事実を誰も彼に教えてくれなかった。既成の事実として得宗寺家ではそれについて特に話題に上る事もなかったからだ。そもそも白井にとってお昼に匠の食事をコックに作らせる、ということ自体、信

じがたいことだった。増して、若い、経験の少ない加賀美に作らせるなどもつての外だ。それがどうだろう。匠自身の口から（自筆でそう書いてあるのだから言っているのと同じである。）加賀美を自分付きの料理人にしろ。だなどと言ってくるとは。

「ののりゆき。あー！なんてことだ！悪い事は言わん。このままここを辞めて実家に帰れ。匠さんにはお嬢様から何とでも言い訳してもらうから。な！」

中井の狼狽ぶるが白井にもわかる。しかし料理長として前途有望な若者にチャンスを与えてやるのも仕事である。

「まあ待て、中井。いいか、則之。匠ぼっちゃんの食事を作る、ということは得宗寺家の料理場としては名誉あることなんだ。おまえは知らんだろうが、ぼっちゃんは沙織嬢ちゃんの作ったもんしか口にしなかった。他のもんが作るとものすごく暴れてな、手が付けられんのだ。それは今でも変わらん。それがどういうわけかおまえだけは別らしい。これは最大級のチャンスだ。認められれば故郷に錦を飾る事も可能だ。どうだ、やってみる気はないか？」

白井の後ろでヤメロというそぶりを見せる中井だったが、白井の優しい態度に後押しされ、加賀美は思わず頷いていた。

「そうか。ではグズグズしておられんぞ。すぐ今晚の献立を考え、支度しなさい。ただし、他の者は一切手を出さんから。手を出したのがわかったらその時点でおまえとそいつはクビだ。いいな。必ずひとりでやるんだぞ。」

## 第71話

「いいんですか？ やつぱり則之1人じゃムリなんじゃないですか？」

調理場へ戻りながら中井は顔を強張らせ本音を漏らした。

「まず。ムリだろうな。」眉間にしわを寄せ白井も同意した。

「えっ？ じゃ、料理長はできないとわかっていてあいつにやらせようとしているんですか？」中井の語尾が荒くなる。

「バカなことを言うんじゃない！ ワシはあの子が可愛い。だからこそ、この試練を与えたんだ。匠ぼっちゃんは並の高校生じゃない。あの若さで人を見る目もある。そのぼっちゃんが、たとえ一時でも嬢ちゃんの代理を任せる、と言ってるんだ。ワシはあの子の可能性

に賭けてみようと思う。

「可能性・・・で、でも、もし失敗したら・・・あいつはどうなるんです？」

「失敗を恐れていては何もできん。だが、もしそうになったら・・・その後は我々の出番だろう。それでもワシはそうならないと信じている。だからおまえも影ながらあの子を見守ってやってくれ。ただし、他の奴らにこの件は他言するな。パニックになるからな。則之に第3調理室を与えてやれ。」

白井は中井に命じると、何食わぬ顔で調理室に戻った。

「あ、匠様。」

沙織の部屋に音も立てずに入っていくと、早苗が付きっきりで看病していた。腫れ上がった顔で寝ている沙織を見て、匠は今更ながら犯人を絶対許さないと思った。その険しい目つきを見て、早苗は怯え身体をすくめたが、相手を包み込む匠の落ち着いた態度に人知れず赤くなった。

「具合は。」

「は、はい。ずいぶん良くなりましたようでございます。」

早苗の心中に全く気づいた風もなく、匠はホウと息を吐いた。

「そうか。悪いね。あなたに迷惑をかけてしまった。疲れただろう。代わるから少し休んでくれ。榊原に用意させたから気兼ねなく休めと思う。」

噂に聞いていた匠とは全く違うことに早苗は戸惑った。これが本来の姿なのだろうか。冷酷で無情というレッテルは虚構であり、温厚で情け深いというのが真の姿なのではあるまいか。ギャップの違いに混乱しながらも早苗は言われるがまま榊原の元へ向かった。

## 第72話

慣れた手つきで額のタオルを交換し、今まで早苗が座っていたソファに腰を落ち着けた。

数分もすると匠は長い手足を持て余し気味にぐつと伸ばした。日ごろこんな風にただじつと座っている事などしたことのない彼にとつてこれは大変な苦痛だった。苦痛以外の何ものでもない。身体を使わないときは頭脳が動き、頭脳が働かないときは身体が動いていた。だから今のこの状況は彼をすこぶる不安にさせた。何かしていないとどうにかなりそうだった。次第にタオルを絞る回数が増えてしまふ。間近に中期実力テストがあるのを思い出し、参考書をバッグから取り出して開いたものの、文字を目で追うだけで一向に頭に入らない。こんなときは何をやってもムダなのはわかつている。ほどなく参考書は元の場所に戻された。どのくらい時間が経ったのかと時計を見ても長針はほとんど動いていない。チツと舌打ちをしてからおもむろに立ち上がり、さあ、何をしよう。差し当たって部屋を行きつ戻りつ、してみた。それにしても、と立ち止まる。

（それにしても、女性というのは凄い。ひたすら看病だけにじつとしていられるのだから。）などと一般人なら普段考えないような事で感心する匠である。

クスクス・・・そんな匠の耳にさざ波のような忍び笑いが聞こえてきた。声の主は寝ていたはずの沙織で、いつ間にか目を覚まし、匠の様子を見ていたらしい。自分が笑われていたのは明白だ。ムツとした表情で匠はベッドに近寄った。

「何がおかしい。」それでもバツの悪さは隠しきれない。

「ごめんなさい。でもさつきから匠さんがウロウロしていて寝ていられないのですもの。見て、額だって何度も冷やされてこんなに冷たくなってしまったわ。」

「オレにそんなことをさせて、さぞ気持ちがいいだろうな。」

沙織の額に手を当てるとなるほどとても冷たい。悪かったと言おうとしてつい憎まれ口が出た。

「そうね。でもあなたに心配されると落ち着かないわ。私の顔、変でしょう？」

「ああ。普段でも変なのに、今は最高に変だ。四谷怪談の岩が出てきた感じだ。それより腹は空いてないか。」匠の精一杯の優しさだ。

「少し、空いたかもしれないわ。」

変な顔と言われ、沙織は掛け布団を頭まで引っ張った。

「誰かに持つてこさせよう。」

そう言つて壁に掛けてある電話を取り、白井と料理長の名を呼んだ。すると眼前にパツと調理室が映った。

### 第73話

調理室はまさに戦場の様相を呈していた。夕食の準備に忙殺されている。それでも白井は柔和な微笑をたたえ、カメラの前に立った。

「どうかなさいましたか。」

「沙織に何か作ってやってくれ。それからオレの夕食もここに運んでくれ。」

オレの夕食、と匠が言った途端、白井の顔に緊張が走った。強張った口調で「かしこまりました。」と答えるとパツと画面が消えた。というより匠が切ったのだ。その後の調理場がどうなった匠は知る由もない。

かなり待たされた後、ようやく2人の食事が運ばれてきた。けが人である沙織には滋養のあるあわび粥とすっぽんの吸い物が用意された。匠の分はフランス料理のフルコースといっても過言ではない豪華な皿がテーブルにとろ狭しと並べられた。それを見た匠の表情がいつぺんに険しくなった。

「これは誰が作った。」

機械的な声に給仕の動きが止まった。

「は、はい。加賀美というコックが。」

「呼べ。」

「は？」

「加賀美を呼べ。」

「はっ、はい！」

一目散に走っていく給仕を見て沙織が心配げに呟いた。

「大丈夫かしら。やはり私がやるべきだったんだわ。」

「おまえは口出しするな。」

「でも。」

「二度も言わせるな。」

加賀美が車での間、匠は眉間にしわを寄せじつとソファに身を沈めていた。

しばらくして耳を済ませていないと聞き取れない程度のノック音があった。

「入れ。」

低く沈んだ声にわずかにドアが開き、真っ青な顔をした加賀美が入ってきた。

「遅い！何分待たせるんだ！」まず一発目。

「ひえっ！す、すみませんッ！」途端に加賀美は腰を抜かした。

「なぜ呼ばれたのかわかるか。」

抑揚のない声ほど冷たいものはない。今の匠はまさにそれだった。加賀美はただワナワナと震えるばかりで、口から飛び出す言葉はただ謝罪だけだ。

「オレの言ったことに答える！」

手こそ出さないが、匠は加賀美の前に仁王立ちになった。



## 第74話

「い、いえ、わ、わかりませ・ん。す、すび、ば、しええん」  
最後は聞き取れない。

「そうか。じゃそのまま聞け。オレの夕食はおまえが考えたのか。」  
「かすかに頷く加賀美。」

「そうか。誰がこんなものを作れと言った！ オレは斜陽族じゃない！全部作り直せ！ 1時間だけ待ってやる。いいか。わかつたらさっさと行け！」

2発目のカミナリが落ちると加賀美はギョツとして何度も転びながら駆けて行った。その背中に向かって匠は叫んだ。

「オレは今、ものすごく気が立っている。それを忘れるな！」

「大丈夫かしら。加賀美さん。」

身体をクッションに持たせかけ、粥の入った碗を見つめ沙織が呟いた。もう自分の身体はどうでもいいらしい。

「匠さんにあんな風に言われて加賀美さんも可哀想だわ。一生懸命作ったのに。」

「あいつはプロだ。おまえが口を挟む筋合いのものじゃない。それにあれくらいのことではダメになるようならそこまで、ということだ。ヒントは与えた。それがわからなければ一流にはなれない。」そう言って匠はまたソファに身を沈めた。

1時間を少し回った頃、ドアがノックされた。沙織が入室を許可すると、静かに扉が開き、ワゴンに乗せた料理を携えた加賀美が入ってきた。

「遅くなつて申し訳ありません。」

「ごめんなさいね。私がこんな風にならなければ、あなたに手数料をかけずに済んだのに。」

「いいえ、とんでもありません！私が至らないばかりに匠様のご不興を買ってしまつて。」

沙織のいたわりに加賀美は恐縮して答えた。落ち着かないのか、しきりに前掛けをいじっている。

「ごちゃごちゃ言つてないで早く支度してくれ。今度は何だ。」

「は、はい。」

加賀美は返事もそこそこにまずホーロー鍋の蓋を取つた。するとホワーツと湯気が上がり、何とも言えない爽やかなミントの香りが辺りを覆つた。

「まあ、いい香り。これは何ですか？ミントのような感じですか？」

「はい。その通りでございます。先ほど匠様からヒントを頂きましたので。まずお気を静めていただこうと思ひました。それにはこの香りが一番良く効きますので・・・お気に・・・召しません、でしたか？」

匠の表情が全く変わらないせいで、加賀美の語尾が段々と小さくなる。顔色を伺いながら１つ１つ確認し、説明を始めた。

「・・・これは、利尻昆布でだしを取り、天然のうなぎを素焼きにして入れたおじやと、はまぐりの潮汁。秋ナスのフライ。きゅうりとたこの酢の物に大根の即席漬でございます。」

今回は徹底して純和風である。それについて匠は一切口を挟まず、箸とおじや入りの椀を手を取つた。そして一口すすると、ジロリ、と加賀美を睨んだ。目と目が合った瞬間、加賀美はメデューサに見られた気がして硬直した。

「加賀美。」

はい。と返事をしようとしたが、息が詰まって声が出ない。代わりにヒエツ！と変な音がした。

## 第75話

「・・・おまえに一軒、店をやる。これからはそこで腕をふるえ。いいな。」

突然、加賀美の身体が仰向けに倒れた。

「おいえ！おい！しつかりしろ！」

平手で数回殴られようやく気が付いた加賀美は、それまでの記憶がすっかりどこかへ飛んでいつてしまった。

「あ、ああれ？オレ、何してんだ？あれ？ 確か、厨房にいたはずなんだけどな。」ポリポリ頭を掻きながら起き上がって見たものの、かなり様子がおかしい。

「おい！」

その声にやつと匠の眼前に自分がいることに気づき、大きく目を見開いた。

「アアアア。」言葉にならない。

これでは話にならないと匠も認めざるを得ない。仕方なく料理長を呼んで来いと命じ、加賀美を下がらせた。

「あれでは可哀想よ。」

事の成り行きを見ていた沙織が口を開いた。しかし匠はそれには何も反応せず、ただ黙って目の前の料理を平らげた。

「オレはそんなに恐ろしいか。」

かつて聞いたことのないセリフに沙織は持っていたティーカップを落としそうになった。

「え？何て言ったの？」もう一度、確認しなければならない。

「オレは周囲の人間から恐れられているのか。」

「・・・そう、ね。物心ついたときから一緒にいる私でも世の中で一番怖いのは匠さんなんだから、他の人にとってみれば閻魔大王みたいな存在だと思うわ。だから匠さんと目が合うのが怖いよ。機嫌

を損ねたら一大事、と意識下に植えつけられているんだわ。」

「オレは好き嫌いで人を判断しない。」

「それは。あなたと付き合いの長い私や榊原さんしか知らないことよ。たいていの人はそうは思っていないわ。それに亜紀さんに対する態度を見る限りで言えば、その見方は当たっていると思うわ。」

「亜紀？あいつは二重人格だ。見てくれの良い奴に良い人間はいない。」

その名前を口にするのも不愉快だ、と言わんばかりの匠に沙織は目を見張った。

## 第76話

「外見の良い人でもいい人はいるわ。」優しい表情になる。

「そんな人間がいるわけではない。」

「まア、そんなこと言つて。匠さん。鏡を見たことがあつて？」

「鏡？ 顔を洗うとき誰でも見るだろう。」

「それなら口が裂けたつてそんなこと言えないと思うわ。あなたより外見の良い人なんてどこを探してもいないわ。」

「くだらない。オレは自分の顔が一番嫌いだ。」一番嫌いだ、を特に強調し吐き捨てた。

「そんなこと人前では言わない方がいいわ。」

「それこそ馬鹿げている。ホストじゃあるまいし。いいか、人間の顔の良し悪しは内面からにじみ出てくるものなんだ。オレはそれしか信じてない。そういう意味だ。」

「それならあなたは誰を信じているの？」

「完璧な人間はいない。でもそれに近い人はたった1人だけいる。」  
遠くを見つめる匠の目は異様な光を帯びている。

「誰なの？」

「得宗寺秀一。おまえの父親だ。オレはあの人に近づきたいと思つている。今はその足元にも及ばない。日が経つにつれあの方は遠ざかつていく。距離が一向に縮まらない。オレは毎日それを縮めようとがいている。イライラするほどだ。」ぐつと手を握り締め、ひと言ひと言を悔しそうに漏らす。そんな姿を沙織は初めて見た。これまで匠はパーフェクトに全てをこなし、望むものは全部叶ってきた。そんな男にも他人に言えない心の葛藤があったのだ。誰にも言えない悩みを打ち明けられ、沙織は感動のあまり顔を覆った。涙が止めどなくあふれ出す。それを見た匠の顔が歪んだ。

「何故泣くんだ。オレは自分でも結構強い男だと自負している。でもおまえに泣かれるとどうしていいかわからなくなるんだ。泣

くな！」とうとう怒鳴ってしまった。ところがいつもより若干弱めだ。それでも充分効果はあった。

「ごめん、なさい。　　変よね、私ったら。」流れ落ちる涙を拭きながらも彼女の表情は明るい。

「おまえ、ふた目と見られん顔をしているぞ。今の顔を見たら生徒会長の恋心も一遍に冷めるだろうな。」

「そんな、意地悪ね。　　会長さんも私のことなんて、もう何とも思っていないわ。」

そんなことはない。会長は今でもおまえのことが好きなんだ。喉まで出かかった言葉をぐっと飲み込んだ。

「・・・あたりまえだ。おまえのことを本気で好きになる男がいたらお目にかかりたいものだ。」

つい憎まれ口をたたき、匠は照れくさを隠すためにあらぬ方向を向いた。

## 第77話

「うううん！」

その時、ドアの向こうで大きな咳払いがした。料理長が来たようだ。匠はことのほか低い声で入室を許可した。

「御用と伺いましたが。」白井は緊張した面持ちながらも何かニヤニヤしている。おそらく匠たちの会話を外で聞いていたに違いない。「立ち聞きしていたのか。」既に普段の匠に戻っている。

「とんでもない！私がここに来たとき、聞こえてきたのは本気で好きになる男がゝのクダリだけですよ。」手をブンブン振り、白井は慌てて否定した。

「ふん、どうだな。それより随分遅かったな。アフリカから来たのか。」チクリと厭味を言う。

「いいえ。加賀美の言っている意味がわからず今までかかったんですよ。それで何なんですか？」

「まったく。あいつは・・・今度、国語の勉強をさせる。榊原にもこれから言うことなんだが、料理長の許可をもらわないといけないことだから加賀美に行かせた。今度、レストランを開こうと

思う。出資者は周防建設だが、実際はオレがやる。その料理長に加賀美を置きたい。あんたはどう思う。」

「は？」

「加賀美を引き抜きたい。」

「は？」

「何度も言わせるな。イエスカノーか。それだけ言え。イエスなら榊原にこの件を伝えなければならない。」

「はあ・・・少し、考える時間をいただけませんか。その、あまりにも、急な話で・・・」

「急な話？ オレのメモを見たんじゃないのか。見たなら少しくらい頭を働かせてもいいと思うがな。オレはあいつの腕を買った。

「で、ですが、あの子にはまだ、経験がありません。確かにぼっちゃんの名を榊原さんに見せられた時はあの子にチャンスが来た。と思いました。しかし、それはあくまでもこの厨房内でのことです。いきなり店を任せるだなんて。いくらなんでも無謀すぎます。」

「経験？ それは若い、ということか。」

「もちろん、それもあります。ですがそれだけじゃない。経験というのは年月を重ね、初めて取得できるものです。あの子にはそれがない。」

「そうか。と、いうことは、オレもその部類に入る、ということだな。何しろオレはまだ１７歳だからな。」

「ぼ、ぼっちゃんは別です！ぼっちゃんは並の１７歳じゃありません。私はぼっちゃんを小さい頃から見てきました。経験からするともう１人前です。」

「言ってる事が矛盾している。まあいい。ではこうしよう。料理長は加賀美。そして顧問兼アドバイザーとして加賀美の祖母をつける。これでどうだ。」

新たな提案に白井は啞然とした。本格的な料理をしたことのない一般人をアドバイザーに据えるだ！とんでもない事を言う奴だ！白井の顔色が変わる。すかさず匠はそれを見て取った。



## 第78話

「この若造が何を言いやがる、そういう目つきだぞ。 凶星だ

ろう。でもオレは常識を破りたいんだ。経験とか年齢とかで安穩と居座っている連中のな。ただ責任者にはおまえの言う経験者を置く。各セクションごとに経験者を据えたとそれだけで重厚感が出る。ただし料理長は加賀美だ。」

「ぼっちゃん。ぼっちゃんはなぜあの子をそんなに買うんですか？」  
匠の入れ込みように白井の心に疑惑が浮かび上がった。

「おまえにはわからないのか。あいつの料理には気配りがある。昼飯を食べた時、感じた。1度目の夕食は大ハズレだったが、2度目の料理は最高だった。オレの漠然としたヒントを解釈し、状態を把握した結果のサーヴィスだ。」

「気配り、ですか。」

「そうだ。まだ何か言いたそうだな。」

「いいえ、ぼっちゃんの口からそういう言葉が出てきたのが信じられなかっただけです。」

「オレは機械じゃない。心はある。勘違いするな。」

「す、すみません。」

「それで？ オレの案は是か否か。それによって加賀美の将来が決まる。どうだ。」

どうだ、と促され、白井は少し考えた後、「ぼっちゃんの意味に従います。」と答えた。

その答えに匠は嬉しそうに微笑んだ。そしてインターホンで榊原を呼ぶとホッとひと息ついた。

「匠さん、緊張していたのね。」

巨体を丸め出て行った白井のうしろ姿を見送り沙織が言った。匠の心中を見抜いていたのだ。

「おまえに見抜かれるようじゃオレもまだまだだな。確かに料理長

の言っている事は至極当然のことだった。だから了承してもらえるかどうかが不安だった。オレは少ない可能性に賭けてみたんだ。」

「じゃ、これからは私の出番が減るのね。」

寂しそうに呟く沙織に匠は即座に言った。

「くだらんことを言うな。料理人の作る食い物を毎日食ってたら胃が持たない。おまえは今まで通りの仕事をしていればいいんだ。余計なことを言わせるな。」

「はい。」

「その調子なら明日からでも大丈夫そうだな。」

「ええ、何日も休んだからカンが鈍っているかもしれないけれど。大丈夫よ。」

その時ドアがノックされ榊原が入って来た。

## 第79話

「お呼びですか。」

白井とは違い、匠の急な呼び出しにも榊原は恐れた様子はない。

「用があるから呼んだんだ。」匠もまたそれを気にかけることもない。

「はい。」

「白井にも言ったが、加賀美を引き抜く。以前から構想していたレストランの料理長として迎えたいんだ。」

冗談を言っているような口ぶりにさすがの榊原も目をむいた。

「料理長から概略は聞きましたが、冗談ではないのですね？」

執事ともなると少々のことでは動揺しないらしい。それでもその声には即信じがたいといったニュアンスが含まれていた。

「冗談？何億ものプロジェクトを冗談で言う奴がいたら見てみたいものだ。これは真面目な話だ。」

じつと榊原を見つめる匠の瞳は静かな光を帯びていた。からかっている目ではない。榊原は初めてその話を真摯に受け止めた。

「では、どんな様にご報告しないといけませんね。」

「ああ、そうだな。」

「今度お帰りになられたら申し上げましょう。」

「いいや、これはビジネスの話だ。オレから言う。」

「そうですか。わかりました。それで、いつから始められるのですか。」

「着工はまだ先の話だ。今はデザインを練っている段階だからな。しかし加賀美にはそこから参加してもらいたい。できればすぐにもそっちに行かせて欲しいと思っている。」

「・・・承知いたしました。それでは今日中にでも加賀美を解雇させるよう、料理長に伝えましょう。でも明日から加賀美はどうすればよろしいでしょう。そのあたりも言わないといけませんね。」

「明日は周防建設に来るよう伝えてくれ。時間は、そうだな。午後6時にしてくれ。学校が終わったらオレも行く。」

「かしこまりました。では早速そのようにいたします。」  
会釈をして出て行きかけた榊原を匠が不意に呼び止めた。

「もし。早苗さんが起きたら今晚はゆっくり休むよう言ってくれ。

ここに来て早々沙織の看病でカンヅメになっていたから、気が休まる事もなかっただろう。おまえと積もる話もあるだろうしな。今夜はオレがここにいるから来る必要はない。」

「・・・お心遣いありがとうございます。ではそうさせていただきます。」

再び軽く頭を下げて榊原は出て行った。

## 第80話

2人きりになると急に沙織はソワソワしだした。時計を見ると既に11半を回っている。匠はソファに深く腰掛けたまま微動だにしない。それが余計に彼女を落ち着かなくさせているのだ。ベッドから降りてみたり、ドレッサーの前に座って必要以上に髪をとかしてみたり。まだ紫色に腫れている顔半分に触れ、あの時の恐ろしさを思い出すと涙が勝手に零れ落ちた。

その時、彼女の周囲の空気が動き、身体が宙に浮いたかと思った瞬間、ベッドに投げ出された。

「キャッ!!」

声を上げた彼女の目に映ったものは、ひどく歪んだ匠の顔だった。

「静かにしろ! 榊原がいなくなった途端、蜂のように動き回りやがって。少しは気を遣え! オレは明日早いんだ。おまえのフラフラに付き合ってられるほど暇じゃない!」

一方的に怒鳴るとジロリと睨み、今度は長ソファに沙織に背を向けゴロリと横になった。いつものことながら沙織はこういう時、匠にとつての自分は何なのだろうと思う。異性として見ていないのではないか。まして、恋愛の対象などもつての外なのではないか。何度も自問してきたが、未だにはつきりとした回答は得られていないのだ。匠に気づかれないよう、小さなため息をつく、朝早い、と言った匠の言葉を思い出し、それに間に合うよう起きなければと、改めて横になった。

翌朝。普段通りの朝食がたくみの空腹感をそそった。ご飯に味噌汁、焼き魚、海苔の佃煮、青菜のお浸し、野菜サラダとデザート。味はプロに到底及ばないが、沙織の料理は安心して食することができる。ごはんを3杯もおかわりし、着替えのために一旦周防家に戻った。

7時、という時間帯は周防家にとって活動を始めるには早いのであ

る。そのせいか両親共まだ起床しておらず、匠は落ち着いてシャワーを使い、支度することができた。

## 第81話

それから1週間あまり、学校では特に何事もなく過ぎた。沙織の容態もほぼ快復し、登校できるようになった翌日。年に一度は必ず行なわれる行事。次年度の生徒会役員選挙が2週間後に告示されると発表があった。現生徒会長が推したのが、あることが恋敵であるはずの匠であった。それを同級生から聞いた匠は、会長にしてやられた、と思った。沙織の件でひどく傷つけられた会長がこんな形で仕返しをしてきたのだった。役員その他、教師たちまでもが全員同意しているという。いくら匠がタフな人間でもこれ以上役目を押し付けられては身体が持たない。正式が依頼がある前に手を打たねばならない。匠はかねてからこいつなら、と目星をつけていた隣のクラスの吉本という生徒を立候補させることにした。もちろん根回しは充分にしての話だ。吉本も匠の後押しということで立候補に前向きになり、自らも周囲にそれとなくPRすると約束してくれた。そういったこともあって、实际会長から正式な依頼があった時には既に遅く、匠は吉本の選対委員長として名乗りを上げていた。匠の思惑通り、告示の日には誰一人立候補する生徒がおらず、吉本の無投票当選となった。一般社会の選挙とは異なり、この場合再選挙というケースも考えられたが、天下の周防匠が吉本を推している限り、何度やってもムダだと誰しもがわかっていた。そのおかげで選挙は成立し、吉本が新生徒会長に任ぜられることとなった。彼が会長になったことで、睡蓮政治を懸念する教師も一部あったが、周防匠が仕切っている限り、学校の体質そのものが悪化することは考えにくいため、まあいいだろう。ということでケリがついた。面白くないのは前会長を主とする一派である。会長にしてみればこれで周防匠の鼻を明かせると目論んでいたものがことごとく失敗したからだ。自分が在校中に何とか仕返ししてやろうと躍起になるのも無理はなかった。

## 第82話

「則之、いいのかい？こんなところに住まわしてもらって。」  
「う、うん。いいみたいだよ。ばあちゃんも一緒っていうのが条件なんだけど。・・それにしてもすごい・・ね。」

言わずと知れた加賀美と祖母のヤエである。加賀美は得宗寺家を解雇になった後、すぐ匠の元へ行った。すると簡単な説明をされ、有無を言わず5LDKの超豪華マンションに連れて来られた。

加賀美則之は幼少の頃に両親と死別し、母方の祖母に育てられた。高校卒業後、料理学校へアルバイトをしながら通い、首席で卒業するとすぐ得宗寺家の厨房に就職した。得宗寺家の調理場に勤められるという事は大層な出世、と学校では目されていた。いわば加賀美はエリートコースを歩み始めた卒業生、ということになるのだ。しかも卒業後、数年でレストランの料理長に抜擢されたのだから鼻高々になってもおかしくはないのだが、元来、気の優しい彼は、突然降ってきた幸運に戸惑い、大きな不安を抱える事になってしまった。祖母と一緒に、という条件がなければプレッシャーに押しつぶされていただろう。それをよくわかつているヤエは、自慢の孫を心配そうに見つめた。

「おまえにそんな大それたことができるんだろうかねえ。私はね、おまえには目立ったことはして欲しくないんだよ。おまえと一緒に前の家に住んでいればいいんだよ。おまえが頂いてくるお給料で充分だったんだからね。それなのに・・こんなことになってしまって・・私は明日からどうなるか、心配で仕方がないよ。」

「そんな・・ばあちゃんにそんなこと言われたらオレはどうすればいいんだよ。お屋敷はクビになっちまうし、匠様のところにも行けないってなったら、どこも雇ってくれるとこなんてないよ。」とうとう加賀美は泣きべそをかいてしまった。

「・・そうだね。・・私が弱気になってちゃダメだね。おまえにし



すっかりしたお嫁さんを迎えるまでは弱音を吐いちゃいけないんだ。ヨシッ！ダメで元々。矢でも鉄砲でも持って来いだ！・・・あ！そういえば私はまだその匠様って人に会ってないんだけど、明日会わせてもらえるのかね？おまえのお礼も言いたいし。というお人なんだい？」

「どういうって・・・そうだなあ・・・ひと言で言えば・・・オレら凡人には理解できない人ってことかなあ。でもものスゴク怖い人なんだ。あの人に対抗できる人はだんな様とお嬢様くらいなんじゃないかなあ。」加賀美も祖母が相手だとかかなり雄弁で、口ぶりも滑らかだ。

「わからない人なのに怖いんかい？・・・不思議なお人だねえ。」

「そうなんだ。とつても不思議な人なんだ。まだ高校生なのにサ。」そのひと言でヤエの顔が強張った。

「高校生だつてえ？！おまえ、そんな子供にいいように動かされて黙って言いなりになったのかい！それでも私の孫かい！少しは恥を知りなさい！」

「なななんだよオ。急に、びっくりするじゃないかア。」

「おまえ、すぐにその何とかって高校生のところに行つてこの話はなかったことにしてくれつて言つておいで！私はそんな風におまえを育てた覚えはないよッ！」

「ま、待つてくれよ。」

「何を待つんだよ！ほんとにおまえつて子は。人がいいつていうんだか、気が弱いつていうんだか！ンともう！情けない子だねえ、全く！」

「だから、オレの話も聞いてくれつて。」

必死に頼み込む加賀美に、少しは耳を傾ける気になったのか、ヤエはしぶしぶ怒鳴るのをやめた。

「じゃ、言つてごらん。おまえの言い訳を。」

それでもヤエはブツブツ言いながらすわり心地のいいソファに腰をおろした。加賀美は借りてきた猫の如く、落ち着かない様子でヤエ

の前に正座するとポツポツと話し始めた。

### 第83話

「じゃ何かい。その匠つて子は高校生でありながらいくつもの会社を持つてる、つてのかい？へッ！信じられないね！」

「名義は他の人みたいなんだけど、実際は匠様が仕切ってるんだ。オレも調理場の先輩たでいから羨ましがられたんだよ。だからこそオレは怖いんだ。失敗したときのことを考えるとサ。ホラ、今でも手が震えるよ。」

見れば本当に加賀美の手はブルブル震えている。そこでようやくヤエは孫の言う事を半分だけ信じることにした。残りは周防匠という高校生に直接会ってみてからの事だ。百戦錬磨のヤエの心中を年若い加賀美は知る由もなかった。

「面会？誰だ。」

下校した匠を珍しく在宅していた明子が見とめ、声をかけた。

「カガミなんとかつていう人のおばあさんらしいわ。あなたに会って孫のお礼が言いたいそうよ。私はこれから『さざ波会』のメンバーとマクベスを観に行くから、あとはお願いね。」

玄関先ですれ違いざまにそれだけ言い残し、明子は浮かれ足で出て行った。母のうしろ姿を呆れ顔で見送ると、匠は真っ直ぐ客間に向かった。常日ごろ、傍若無人と思われる匠も年長者に対しては礼儀を重んじていた。第一印象が後々まで後を引く、ということを身に染みて知っているに他ならない。たとえ従業員の家族といえど、初めから高飛車な言い方はしなかった。

「初めまして。ぼくが周防匠です。このたびは則之さんにわがままを言つてしまい、おばあさまにも大変ご心配をおかけいたしました。申し訳ありません。」

大きな身体を折り曲げ、丁寧に挨拶する匠をヤエはひと目で気に入ってしまった。もちろんたくみの外見が大いに役立ったことは言う

までもない。年甲斐もなくしどろもどろになるヤエをにこにこしながら見つめる匠。椅子を勧め、自分も真正面に座る。尊大な態度にならぬよう、細心の注意を払いながら背筋を伸ばした。

## 第84話

「母の話ですとぼくにお礼を言いに見えられたとか。本来ならこういうわけで、とこちらからお詫び方々お伺いせねばならないのに、先にいらしていただいて。重ねてお詫びいたします。」

「は、はあ。あ、いいえ！とんでもございませんです！うちの則之がとんでもない役を仰せつかったとかで、果たしてお役に立てますかどうか・・・」

「大丈夫。と踏んだからこそお願いしたのです。でも則之さんお一人ではありませんよ。おばあさまにも働いていただかなくてはなりませんからね。二人三脚でお願いいたします。もちろん、待遇も相当地に考慮させていただきます。」

和やかな雰囲気です。2人はしばらく雑談を交わしていた。するとドアをノックする音が聞こえ、入ってきたのは和菓子とお茶を携えた沙織だった。ヤエがこの人は？という顔をしたので改めて紹介することになった。

「初めまして。わたくし、得宗寺沙織と申します。加賀美さんのおばあさまと伺いました。よろしくお願いいたします。」

これまたミスなんとかに出たら優勝間違いなし！の女性である。ヤエは穴があつたら入りたい気分になった。しかも得宗寺。ということは則之がつい先日まで世話になっていたお屋敷ではなかるうか。それにしてもなぜお屋敷の人間が周防家にいるのだらう。それもまるでこの家の者です。と言わんばかりの態度である。加えて匠と並ぶとなんともいえない雰囲気がい、見ている者を幸せな気分させるのだ。まさに絵になる2人だ。

「もしかしたら・・・則之が以前お世話になっていたお屋敷のお嬢様でしょうか。」

「ええ。わたくしの方こそ加賀美さんにはお世話になっておりました。改めて御礼を申し上げます。」

しつかりとした受け答えに、ヤエは沙織も気に入ってしまった。

「そ、そんな。お嬢様。私のような者にそんなご丁寧な・・・どうぞお手をお上げ下さいまし。」

ヤエは自分が年上であることも忘れ、2人のオーラに圧倒されていた。

「で、ですが、なぜお嬢様がこちらに？」

老女の質問を沙織はにこやかに受け流し、わたくしはこれで。と辞去した。その早さに言葉もなく見送ったヤエだったが、匠の険しい目つきに釘付けになった。2人には何かあるのだ。瞬時に何かを悟り、これ以上詮索するのは賢明ではないと適当なところで周防家をあとにした。

## 第85話

「匠様とお嬢様の関係？なんでそんなこと聞くんだよ。ばあちゃんに關係あるのか？そんなこと。」

帰宅した加賀美は玄關に入るなりお玉を持ったヤエに捕まり質問攻めにあつた。

「あるんだよ。これから一緒に仕事をしていくんだろ。だったら大有りじゃないか。あの2人がどういう間柄かつてのは大きな問題だよ。」

年寄りといつてもヤエはまだ60を少し過ぎたばかりなので頭も力クシャクとしている。ことに男女間の話となると興味津々。目が輝いてくるのだ。

「オレも！ちよつとしか知らないんだ。2人が幼馴染みつてことと、匠様の身の回りの世話をお嬢様がやってるつてことと、料理は他人が作ったものは一切口にしない。つてことくらいなんだ。あとは知らない。」

祖母の勢いに押され、怖々と答える加賀美。

「それだけ？それだけつてことはないだろうよ。おまえ、何か隠してないかい。」

「か、隠すなんて。本当に知らないんだよ！勘弁してくれよ。」

「じゃ、お互いどう思ってるんだい？そのくらいは知ってるんだろ？」

「し、知らないよオ、そんな事。オレたち調理場の人間がそんなことまで知ってるわけないだろ。」

「本当かい？　マアいいだろ。私が見た限りではお互い好きなのにプライドがジャマしてるつて感じだね。こりや面白くなつてきたよ。ウフフフ。」

含み笑いをし肩をすくめる祖母に、加賀美は内心、またばあちゃんのお節介が始まった、と思った。

「何をしようとしているのかわからないけど、匠様には気をつけてくれよ。普段は怒ったりしないけど、怒るとものすごく怖いんだ。執事の榊原さんでも相手できないくらいなんだからな。・・・ああ！今からもう恐ろしいよオ・・・」

半べそを掻き始めた孫を何とかなだめ、ヤエは夕食の準備に取り掛かった。



## 第86話

得宗寺家に戻った鈴波早苗、改め、榊原早苗は、沙織の復帰と平行し執事夫人として又、沙織が成人し本当の女主人になるまでの仮の女主人として得宗寺家を切り盛りし始めた。テキパキと指示を出すさまはまるでコンピューターのようで、以前の彼女を知っている者なら首を傾げるほどだった。事実、夫である榊原も気押されっぱなしで、どちらが執事なのかわからない始末だ。そういう早苗を若い従業員たでは煙たがったが、結果が現れるとそれも除々になくなった。匠などはそれを見て冗談交じりに執事を交換したらどうだ。と榊原に詰め寄る具合だ。慌てた榊原は早苗にもう少し控えるようにと忠告するも逆効果で、かえって早苗を煽ることになってしまったのだ。それでも沙織に対しては菩薩の如く優しく、母親のいない彼女を愛し、慈しんだ。沙織も彼女を本当の母親のように頼っていた。

季節は秋から冬へと移り、クリスマスの時期を迎えた。冬、デパートはクリスマス商戦が激化していたが、得宗寺家では例年、各方面から主だった著名人を招き、パーティを開いていた。今年も例外ではなく、招待客のリストアップに榊原始め、早苗も実行委員の名簿に名を連ねていた。主催はもちろん得宗寺秀一である。ところが彼はその時期、ほとんど日本にいない。そのため当日帰国し、その足で会場に直行するというのが通例となっていた。招待客はどんなに厳選しても1000人は下らない。その中には各国大使やその家族、政財界は当然のこと、文化人やスポーツ選手も多々含まれていた。日時と場所は毎年決まっているため、頭を悩ますことはないのだが、料理と客選びに実行委員たちは四苦八苦するのだ。特に今年は秀一から密命を帯びているということもあり、例年より苦労も倍増していた。そのことを考えると榊原は背筋が凍るほどの恐ろし

さを覚えるのだが、いかんせん、主人の命令とあらばいたし方ない。責めは自分が負い、最悪ならその立場を辞すれば良いだけの事なのだ。しかし、とも考える。これは秀一自身が立てた計画であり、たとえ大ごとになったとしても自分が責任を感じる必要はないのではないだろうか、と。いや、それでも特宗寺家の奥向きは全て任されているということは、やはり、有事の際は自分が責任を負わねばならないだろう。彼の心中は穏やかではなかった。

## 第87話

そして、とうとう、その日がやってきた。3日前から沢木と他の秘書達も連日交代で会場のセッティングを手伝っていた。表向きのパーティではないため会社関係者はあくまでも裏方に徹しており、彼らは全てオブザーバーとして参加していた。クリスマスパーティーということで会場はイルミネーションで盛大に装飾され、それに見合った客が時間の進行とともに続々と集まってきた。主人である秀一も10時頃には会場入りし、榊原からプログラムの進行について説明を受けていた。沙織は早苗達の手によって完璧に着飾られ、まるで結婚式に向かう花嫁のようになっていた。

除々に慌しくなってきた会場に、ひとつ、足りないものがあつた。それに気づいたのは沢木である。彼は誰にも気づかれることなく修一の傍に近づき、何かを耳打ちした。すると秀一の顔が少し曇り、何事か小声で指示を出した。沢木はかすかに頷き、またスツとその場を離れた。そして榊原を見つけると再び何かを耳打ちした。榊原の反応は秀一よりわかりやすく、数人の使用人たちが手を止め2人を見た。彼らを見無視し、2人は裏側の通路に出るとどこかに急いで電話をかけた。時計を見ると間もなく6時になるうとしている。20回ほど呼び出し音を聞くとようやく相手がでた。

「なんだ！オレは今忙しいんだ！電話なんかかけるな！」

「匠さん。何やってるんですか！早く来て下さい！」

怒鳴る匠に一步も怯まず、榊原も大きな声を出した。

「忙しいと言ってるだろ！だいたい何だ、今頃！」

「今頃ってこっちのセリフですよッ！今どこにいるんですか！」

12月だというのに榊原の額には汗が滲んでいる。

「ち、ちよっと今、取り込んで、っつ！」

そこで匠の声が途切れ、少し間があつて若い女性の声がした。

「あたし、剣道部のマネージャーで山本っていいます。今、周防君、病院にいるんです。周防君ケガしちゃって。治療してもらってるとこんなです。すいません！」

匠がケガ？榊原の顔にどつと汗が噴き出した。

「ケガ？ケガってどういうことです！　どこの病院にいるんですか！」

携帯を持つ手にぐっと力が入る。ケガという言葉に沢木が身を乗り出した。

「えっと、えっと、あ、緑ヶ丘病院です。　あ、はい。あ、すみません。今、先生に呼ばれたんです。」

山本と名乗った女性徒はそこで一方的に電話を切った。榊原は何がどうなっているのかわからないままとにかく秀一に知らせなければと、沢木と共に急ぎ足で会場に戻った。

## 第88話

山本から聞いた事実のみを伝えると、秀一は正面を向いたまま唇をほとんど動かさず沢木に病院へ赴くよう命じた。時計は6時15分を過ぎたところだ。当初の予定を大幅に変更せざるをえまい。当初、クリスマスパーティーの場を借りて、匠と沙織の婚約披露及び次期得宗グループ総帥として匠を紹介してしまおう、という腹積もりだった。しかし当の本人が不在ではその価値が大幅に下がってしまう。それによって見込んでいた株価の上昇も半減してしまうだろう。急遽、秀一は榊原たち実行委員に予定の変更を告げ、新しくクリスマスプレゼント付き抽選会をやることにした。手っ取り早く招待状の整理番号を基に抽選する方式を取った。景品は後ほど届ける、ということとで済ませ、クジの準備と景品を何にするか決めなければならぬ。ようやく大役から解放されると踏んでいた榊原だったが、不測の事態により再び頭を悩ます事になった。使える時間はごくわずかだ。

沢木はホテルから緑ヶ丘病院へタクシーを飛ばした。ケガと一口にいつてもどの程度なのか、なぜそうなったのか、はつきりしないことには対処の仕様が無いのだ。

受付で案内を請うと、緊急の手術のため準備中です。との答えが返ってきた。手術？どういうことだ？教えられたとおり手術室へ行くと、廊下には数名の高校生がいた。沢木の姿を見つけると即座に1人の女性徒が駆け寄ってきた。

「周防君のお家の方ですか？あたし、山本です。さっき電話で。」

山本です、と名乗られても直接話をしていない沢木は一瞬迷ったがすぐ察知し、山本の話に合わせることにした。

「ああ、きみか。いったいどういことなんだね。」

沢木も若いが、こと高校生の中に入ってはおじさんといってもいいくらいなので、自然に口調が年長者のものになってしまう。すると1人の女性徒が急に「あたしのせいで、あたしのせいでせんぱいがあー！」とわめきながら泣き崩れた。その子を別の生徒がどこかへ連れて行くと、男子生徒が沢木の前に立った。

## 第89話

「剣道部副主将の佐々木です。すみませんがちょっと。」佐々木は沢木を生徒達から離れた所へ誘った。

「実は。」と一呼吸置いてから、

「練習中に勢い余った部員たちがぶつかって、さっきの子がたまたま近くにいた周防に身体ごと倒れたんです。それで周防が下敷きになって。それで普通ではありえないことなんですけど、あの子の竹刀が折れて周防の左腕に突き刺さってしまつて・・・すみません！オレ達の不注意でこんなことになってしまつて・・・」

佐々木は責任を感じているのか憔悴しきつている。半ば泣いているようにも見える。沢木は彼の肩にそつと手を置いた。

「大丈夫だ。きみが気にする事はないよ。不可抗力だつたんだからね。それで、先生は何と言つたんだい？」

それに対し、佐々木はポケットからメモを取り出し読んだ。

「左ゼンワントウコツ？・・・シャツコツ？・・・カイハウコツセツと左ソクフクブザシヨウ？と言われました。コツセツしているから緊急で手術しなければならなかつてことで。それで。」

「誰の許可も得ないで手術に入つたのか？」

「周防がそれでいいつて聞かなかつたつス。」佐々木の半泣きが本格的になつてきた。

「うーん。」

沢木も唸つたきり黙るほかはない。匠の性格なら当然そうするだろう。それにしても。と沢木は集まつている生徒たちをゆっくり見回した。沢木が到着したときより明らかに人数が増えている。だがここは病院であり手術室の前である。こう大勢の人間がいては迷惑千万であろう。彼は敏腕秘書の腕前を存分に発揮し、彼らのうち2、3人だけを残し、あとは帰るよう諭した。協議の結果、佐々木とマネージャーの山本、それにケガを負わせ今大泣きしている千葉由美

子、彼女の介添えとして安西という女性徒の4人が残る事になった。残りの生徒は匠を気にしながらも異論を唱えることなく病院を後にした。沢木もまた、榊原に事のあらましを連絡し詳細は後刻、と告げ電話を切った。



## 第90話

それから2時間後。ようやく手術室のランプが消え医師が出てきた。

「先生！」

全員が一斉に押し寄せたせい、か医師はちょっと驚いた表情を見せたが、すぐ気を取り直し沢木に向かって言葉をかけた。

「ご家族の方ですか？経過を説明しますのでこちらへどうぞ。患者さんは麻酔が覚めたら出て来られますからもう少しお待ち下さい。」

医師は先に立って面談室と書かれた部屋に入り、沢木を招いた。生徒達は当然、家族ではないため、（とはいっても沢木も同様であるが、身内に近い存在であることには相違ない。）説明は沢木1人が聞くことになった。椅子に座るとすぐ医師は備え付けてあった紙にサラサラと腕の絵を書き、沢木の前に差し出した。そして左腕の前と後ろにある骨が折れ、衝撃が強かった為に骨が皮膚を破って出てきてしまった。手術では折れた部分をボルトで留め、ピンで繋いで筋肉と皮膚を縫い合わせた。何もなければ1週間程度で退院可能だが、左側腹部、いわゆるわき腹の打撲もあるので今の段階では退院がいつになるかはわからない。手術を緊急で行なったのは少しでも早い方が良く、と判断したためだ。と身振りを交え説明した。最後に何か質問があればどうぞ。と付け加え言葉を切った。

「はあ、え、と。 あ、いえ。 今のところありません。」

沢木の頭脳は匠の状態が意外に重かったせいで思考する機能が作動しない。それどころか、骨折、手術、入院、という段階で止まってしまったようだ。医師への礼もそこに面談室を出ると、痺れを切らして待っていた生徒達にざっと経過を話し、とにかく今日は遅いし、残っていてもどうにもならないからと、彼らを説得し帰宅させた。

## 第91話

彼らと入れ違いにパーティを終えた匠の両親、秀一、沙織、榊原夫妻が息せき切って駆け込んできた。秀一の顔が目に入った途端、沢木の思考回路が目まぐるしく回転し始めた。手術室の前まで彼らを導くと、ちょうど麻酔から醒めた匠がストレッチャーに乗せられ手術室から出てきた。しかし完全に覚醒したわけではないようで、瞼も半開しかしていない。いち早く駆け寄ったのは沙織と明子の女性陣。何度も匠の名を呼び、そのまま付き添って病室へ向かった。男性陣は沢木から説明を聞きながらその後を追った。

「ということは匠は大丈夫なんですか？」説明から内容がよく飲み込めない正彦が口火を切った。

「はい。骨折の程度はわかりませんが、何もなければ1週間程度で退院可能だそうです。」

一度言ったことを面倒くさがらず沢木は答えたが、その目じりで秀一の不快は表情を捉えていた。秀一は復唱すること、されることを好まないのだ。それでも沢木は続けた。一般人に秀一の感覚は理解できないだろうと思いつつ。

「そう・・・ですか。」

正彦のひどくがっかりした様子に榊原が慰めの言葉をかけた。その榊原も疲れた顔をしている。連日パーティの準備に終われ、いざ当日になってこのような事態が生じたのだから無理もない。倒れなければいいが、と沢木は思った。

「会長。パーティの方は滞りなく進行されたのですか？」

「多少のミスはあったが、榊原にしては良くやった方だった。」

沢木の質問に秀一は無表情で答えた。しかし滅多に榊原を褒めた事のない秀一にしては最大の賛辞である。2人はお互い顔を見合わせた。

## 第92話

病室に移された匠は、麻酔が完全に切れていないせいでぐっすりと眠っている。そのかたわらでその手をしっかりと握り締めた沙織の姿と、息子が不慮の事故に遭いどうしていいのかわからずウロウロしている明子がいた。看護師が点滴と何かのチューブをてきぱきとセットし、先生が間もなくみえますからと言って出て行った。匠の左腕は上部から手首まで包帯で巻かれ、とても痛々しく見えた。しかしその身体全体からは相変わらず独特のオーラを放っている。その中で誰も口を開くことなく医師が来るのを待った。

しばらくしてドアがノックされ医師と看護師が入ってきた。沢木には見覚えのある顔だったが、他の面々は初対面のため改めて沢木が紹介した。医師も入った途端、新顔が何人もいたため一歩後ずさったが、沢木から事情を説明されると「ああ、そうだったんですか。」とだけ言った。それから術後の状態をチェックし看護師に簡単な指示を出した。その後明日また来ますからと一同に軽く会釈して出て行った。指示を受けた看護師は体温、血圧、脈を測り、チューブの先につけられたパックを見て（それは尿量を計るパックだったらしい）何かありましたら枕元のボタンを押してくださいと告げ、穏やかな笑顔をたたえ戻っていった。

4人は銘々ソファに腰を落ち着け一様に安堵の声を漏らした。時計を見ると既に午前0時を回っていた。皆疲れた顔をしていた。タフな秀一でさえぐったりしている。ただ1人、沙織だけは匠の傍から離れず同じ姿勢を保っている。全員着替えるのもそこそこ会場を後にしてきたため、男たちはフォーマルのままだ。女性陣はドレスを脱いで普段着になっている。沢木は榊原と2人、部屋の隅に椅子をずらしヒソヒソと話し始めた。パーティの経過を聞いたためらしい。時折目を見張ったりしながら熱心に榊原の話に聞き入っている。明子は沙織と反対側の椅子に腰掛けハラハラと涙するばかり。

自然に正彦は秀一とペアを組む形になった。彼にしてみれば親会社  
の総帥である秀一など雲をつき抜け成層圏を突き破るような存在で  
ある。滅多なことでは口をきくことすらできないのだ。おまけにか  
なり疲れているように見える今、下手に話しかけようものならどん  
な仕打ちをされるかわからない。それを踏まえ、恐る恐る声をかけ  
てみた。

### 第93話

「お、からだ、だいじょぶ、ですか？」

その声に秀一はジロリと正彦を見据えた。まるでわかっていることを聞くな、と言いたげな顔つきだ。一瞬、正彦は怯んだが、それでも勇気を奮い起こし生唾をゴクリと飲み込んでもう一度聞いた。

「お、からだは、大丈夫で、しょうか。お疲れ、のように、お見受けいたしますが……」

同じ質問に秀一はあからさまに眉をひそめた。

「……疲れてなどおらん。」

ピシヤリと吐き捨てられた正彦。それ以上の言葉が見つからない。

ほんの数秒後、今度は秀一が口を開いた。

「おまえに話がある。」

真剣な目つきで凝視され正彦は直立した。      はなしとはいったい何だろう。

「匠のことだ。実は今日のパーティで匠と沙織を婚約させ私の後継者として発表する予定だったのだ。」

「えっ？」

簡単に言っただけの秀一に正彦はわが耳を疑った。匠を跡継ぎにする？会長はそう言わなかっただろうか……ポカンとした表情の正彦に秀一は口の端に笑みを浮かべた。

「そう決めたのだが、親としての意見を聞きたい。どうだ。」

どうだ、と言われても何と答えて良いか正彦には言葉が見つからない。言語そのものを忘れてしまったようだ。あまりにも話が大きすぎてすぐには信じられないからだ。トンビが鷹を生む？そんなありきたりなことわざや慣用句では表現できない。おまけに沙織という世にも類まれなる宝が付いてくるのだ。

「是か非か。どちらだ。」

言葉を失った正彦に秀一は返答を迫った。

「はあ・・・よ、よろしく、おねがい、いたし、ます。」

それだけ言っのが精一杯だ。それでも秀一は大いに満足したようだった。

「では、匠が退院次第居を移すよう、手配してくれ。」

「は？ は、はあ。 ですが・あ、いえ、何でもありません。」

蛇に睨まれた蛙。その表現がぴたりと当てはまる正彦である。すると秀一は珍しくへりくだる構えをした。

「あ、その。匠はだな。以前、私がこの話を持ち出したとき、周防家の跡継ぎは自分しかないから話を受ける事はできないと言っていた。それについてきみはどう思う。やはり、周防家を継ぐ人間が必要か。」

「は、はあ・・・確かに、私たちには匠しか子供はおりません。できればそうあつて欲しいと願つてはありました。ですが、そのことでこの子を縛り付けたくはありません。もし、この子が周防建設の存続を考え、おのれを犠牲にしているのであれば、それは私たちの本意ではありません。どうぞ、会長の手でこの子を最高の経営者にしてやって下さい。それを見届ける事ができるのなら本望です。」

たとえ蛙のごとき存在でも、やはり正彦は父親である。息子の幸せを第一に考えていた。母親の明子しかりである。もつとも明子は沙織を匠以上にかわいがっていたので異存があるはずはない。いつぞやなどは早く孫の顔が見たいと言つていたほどだった。

「そうか！それを聞いて安心した。ではさっそく取り掛かってもらいたい。」

そこで2人の会話は途切れた。榊原の奮闘ぶりをじつと聞いていた沢木は時折、チラチラと秀一を窺っていたが、2人の会話が一段落したのを機会に榊原にねぎらいの言葉をかけ、秀一に近寄り何やら耳打ちした。それから正彦、明子、榊原の順に見渡しある提案をした。

「今晚はもう遅いですしこのままここにいても何もありませんので一旦引き上げてはいかがでしょうか。」

みな一様に疲労の色が濃く、明子などは目の下にはつきりと隈が現れている。沢木の提案は秀一の言葉と受け取った面々は、その場所から重い腰を上げた。沙織も、と明子は声をかけたが、自分に残ると頑として譲らず、沙織だけは残ることになった。それでは、と着替えと朝食を持って来るわ、と明子は帰って行った。朝になってそれらを持参したのは明子ではなく早苗であつたが。

## 第94話

匠は秀一と父正彦の会話を一句漏らさず聞いていた。医師の回診の際はうつろな状態であつたが、2人が話し始めた頃には麻酔からぼ覚醒していた。それでも気づかぬふりをしていたのだ。身体は微動だにしないが、頭の中は徐々に回転しだしていた。かたわらにはじつと自分を覗き込む沙織がいた。

「匠さん！」その声も涙のせいで震えている。

「ったく。うるさい連中だ。」

術後、初めて発した声に匠はとまどつた。麻酔のせいで声がガラガラになつていたのだ。おそらく時間の経過と共に直るだろう。

「気がついていたの？」

沙織はすでに匠の意識が戻つていた事に驚いた。

「ずいぶん前からな。・・・それにあいつらあんな相談しやがつて。」

「あいつらつて？」

「おまえ・・・聞いていなかったのか。おまえの親父とウチの親父の話。」

イライラした様子がはつきりと現れている。しかしわからないものはわからない。匠しか見ていなかった彼女には父親たちが何の話をしていたのか全く耳に入っていなかったのだ。

「ごめんなさい。」しょんぼりとうな垂れる。

「ったく。おまえって奴は。」

あからさまに眉をひそめる匠。それでも沙織には匠が心底怒っていない事がわかつていた。少し気を取り直し、傷の痛みはないかと聞いた。

「・・・このくらいの痛みは痛みのうちに入らない。」

と言い放つ匠の額にはすでにあぶら汗が滲んでいる。麻酔が切れた後の傷の痛みは沙織も一度経験していた。小学校の時に盲腸の手術



をしていたからだ。あんな小さな傷でさえ痛さを我慢できず痛み止めを打ってもらったのだ。匠の傷が痛くないわけがない。

「看護師さん呼びましょうか？」そう言って額の汗を拭く。

「バカを言うな。」答えとは反対にその声はひどく苦しそうに聞こえた。

## 第95話

ちようどその時、当直の看護師が巡視のために入ってきた。匠の顔を見ると、

「痛いのは我慢しなくていいですよ。管が入っているからすぐ楽になりますからね。」

そう言いながら点滴とは別の管に薬を注入した。その後、脈を取り血圧と体温を測って出て行った。その姿を目で追っていた匠は露骨に嫌な顔をした。

「余計なことを。」ボソボソと毒ついたが、段々と痛みが薄らぐにつれ苦痛で歪んでいた顔が穏やかになってきた。苦しんでいる匠を見ているのに忍びなかった沙織は内心ホッとした。そこでどうしてこんなケガをしたのか詳しく話を聞こうと思った。

「沢木さんから少し聞いたのだけれど、どうしてこんなことになったの？」

「・・・オレの不注意だ。なぜそんなことを聞く。」

「女の子がぶつかっただってホント？」

「ああ。でもこうなっただのはオレのせいだ。これ以上聞くな。うっとうしい。」

「はい・・・あの。」

「何だ。」

「昨日、何の日だったか覚えてる？」沙織は質問を変えた。

「昨日？・・・」

「クリスマスパーティーだったんだけど。」

「クリスマス、マス？　ああ、忘れてた。・・・そうか。・・・おまえ、壁の花だったのか。」

毎年行なわれているクリスマスパーティーでは沙織のエスコート役は匠と決まっていた。パーティーの最後には必ずワルツが流れ、それに合わせて皆踊るのが恒例だった。

「そう・・最初はそうだったのだけれど、匠さんが欠席ということ  
がわかって・・そうしたら、休む暇なくダンスに誘われてしまって・  
・」困惑した顔で匠から視線を外した。

「そうか。それは良かったじゃないか。では来年からそうしよう。オレがいなければ世の男どもが喜ぶ。」

平然と言う匠に沙織は視線を外したまま悲しげに、そうね。と呟いた。こらえようとしても自然に涙が溢れ出す。

「ただし、オレの希望が叶えば、の話だな。」

沙織の心のうちを読んでいるのかどうか、匠は意味不明のことを口にした。それでも今の彼女にその意図するところを考えている余裕はない。少しでも父親同士の話を耳にしていればそれも理解できたのかもしれないが、あいにく彼女は本当に2人の会話を聞いていなかった。

## 第96話

「・・・沙織。」

「はい。」

顔を上げると匠がじつとこちらを見ている。いまさらではあるが、沙織の頬がほんのりと紅くなった。見つめられ恥ずかしそうにうつむいた。

「おまえの。夢は何だ。」

突然思ってもみなかった問いに、沙織の頭は真っ白になった。

「え？」聞き返すのが精一杯だ。

「夢だ。将来、何がしたい。こうなりたいとか。そういう希望だ。」

「夢・・・私は、私の夢はあの日に決まったの。あの日以来、一度だつて変わっていないわ。」

「あの日？　なんのことだかわからないな。はっきり言え。何をいつ、どう決心したんだ。」口調は変わらないが声のトーンが下がる。

「あなたが、私をくれと榊原さんに言ったときから私の夢は決まったの・・・あなたのお嫁さんになることが私の夢よ。」

今度は沙織が見つめる番だった。その視線をしっかりと受け止めた匠だったが・・・

「くだらんな。おまえの生涯をかけた夢はそんなことか。」

あっさりと却下されてしまった。

「くだらない・・・」呆然と見つめる沙織。

「ああ、くだらん。そんなことおまえの親父が望めばいとも簡単に叶うじゃないか。そんなものは夢とはいわない。」

半ば軽蔑した言い方に沙織は傷ついた。

「・・・かた、かたちだけなら、そうかもしれない。けれど、あなたの心まで従わせることはできないわ。」

「心？気持ちの問題か。じゃ、聞くが、具体的にどうすればおまえ

の言う夢が叶ったことになるんだ。」

「どう、って・・そんなこと、私の口から言えないわ。」真つ赤になつて下を向く。

「なぜ言えない。今、言わないとこの先チャンスはないと思え。それでもいいなら勝手にするんだな。ただ、これだけは言っておく。オレはおまえがいないと生きていけない。おまえが誘拐された時、身体が引き裂かれる想いというものを味わった。あんな想いは二度としたくない。これがオレの本音だ。」

## 第97話

眉ひとつ、表情ひとつ変えず齒の浮くようなセリフを言っている匠に、沙織の身体は硬直した。なに？今、匠さんは何て言ったの？その文字ばかりが目の前を何度も交差する。何の反応も示さない沙織に匠はそのまま続けた。

「以前、オレは秀一氏からの申し出を断った。やりたいことがあるから。と言った。それはまだ得宗グループが着手していない領域だとも言った。だがそれはウソだ。オレは技術者になりたいんだ。それも産業用のロボットを開発する設計技師だ。ロボットといっても人間の体をしたものばかりではない。人の入れないところへ踏み込み救助をしたり、人の身体の中に入って治療する、というものだ。グループが着手していないと言ったら秀一氏はすぐ食指を伸ばした。しかし得宗グループはその方面で既にある種の功績を残している。経営者として入るのではなく、1技術者として生きたい。それがオレの夢だ・・・しかし・・・今の状況では無理だということはわかってる。たとえおまえとの話がなくとも周防建設を背負わなくてはならない。どちらに転んでも技術者というのは許されないだろうと思う。叶いそうで叶わないのがオレの夢だ。」

子供の頃から望んだものは全て手に入り、同級生からは憧れの的だった匠にも手に入らないものがあつたのだ。沙織は電灯に映し出された青白い匠の顔を見た。

「だから、おまえの夢はくだらないと言ったんだ。でも、まあ、仕方がない。おまえだからな。オレたちのどちらかの夢が叶えばそれでいいのかもしれない。たとえおまえの、く、だ、ら、ん、夢でもな。」

そう言つて沙織を見た匠の目には穏やかな笑みがにじんでいた。

## 第98話

病室の窓から見える景色が徐々に白み、ようやく長い夜が終わりを告げた。

「朝、か。じつとこうしているのも疲れるな。第一寝返りができない。背中が痛くてたまらない。沙織、背中をマッサージしてくれ。」

さつきまでの優しさは影を潜め、匠は身体を少し傾けフツと息を吐いた。言われたとおり背中を揉んでいると、看護師が朝の検温です、と入ってきた。

「あらあら。朝から見せつけてくれるわね。気になってたんだけど、この方は周防さんのお身内の方なの？」

「え、ええ。まあ。」

「周防さんて高校生よね？外見といい、話し方とかとてもそうは見えないけど。てことは、結婚しているはずないでしょうから。妹さん？お姉さん？なわけないわよねえ。」

おしゃべり好きなその看護師は、脈を取り、血圧を測って尿量を見た。最後に体温計を見て、

「おしつこの管はあとで先生が回診したときに外しますからね。」

と、匠たちが口を挟む隙を与えず、一方的にしゃべって出て行った。

「朝からうるさい看護師だ。妹？姉？どう見たってきょうだいには見えないだろう。おい。」

一時、マッサージを中断していた沙織だが、匠の声に再び背後に回り背中を揉み始めた。

「おかしいわよね。でも本当のところ、あの人に私たちはどう見えただのかしら。」

心持弾んだ声に匠は首だけを回し、不審な目を向けた。

「やけに楽しそうだな。」

「え？そ、そんなことないわ。あなたの思い過ごしよ。」そうは言

っても口元がほころぶ。

「そうだとしたら、私が楽しそうに見えるのだとしたら、それはきつとあなたが私に自分の夢を話してくれたことよ。今までそんなこと一度だってなかったわ。それに・・・私はあなたにとって必要とされる存在だと言ってもらえた事が何より嬉しいの。女性としてみてくれた事が嬉しい・・・の。」

語尾は涙で詰まってしまう、殆ど聞き取れないほどだ。匠はチツと舌打ちして「またか。」と呟いた。

「そんなことくらいで泣くな。朝から辛気臭くてうんざりする。ブスが顔が余計ブスになる。それよりも何時になった。」

匠の問いに沙織は掛け時計を見た。

「6時半　よ。」なかなか止まらない涙は沙織の美しい声をも邪魔していた。



## 第99話

「泣くな。そろそろ誰か来る頃だ。おまえはそんな顔を見せるつもりか。顔を洗って少し外の風にでも当たって来い。」

沙織に背を向けたままの姿勢で命ずると匠は仰向けになり目を閉じた。麻酔が効いている間中ずっと寝ていたとはいっても、夜通し同じ体勢で寝かされるのはかなり堪える。目をつぶるとすぐ呼吸が一定し、沙織の目にも匠が眠ってしまったのがわかった。

匠に命ぜられるまでもなく沙織ははれぼったい目を鎮めるため屋上に出た。朝の光がようやくあたりを照らし出し周囲を包み始めた。ここからみる街の中がこんなに美しいとは。17年間生きてきて初めて知ったことだった。ひんやりした風が熱を持った頬を心地よく撫で、彼女の美しい髪を揺らす。その風に乗ってどこからか鼻歌が聞こえてきた。耳を澄まして聞いてみるとそれは今の時期に相応しくない、さくらさくらとちようちよ、だった。いったい誰が歌っているのだろう。あたりを見回すと水槽タンクの陰に人影が見える。沙織はびっくりさせないよう静かに近寄り声をかけた。ところがその人物は、沙織が想像した以上に驚いたようだった。

「ご、ごめんなさい！驚かすつもりはなかったんです！」沙織も相手の反応の大きさにびっくりした。

「い、いや、こちらこそ。すみません。びっくりさせてしまつて。こんな時間に人がいるとは思わなかったんで。」

それは白衣を着た若い男だった。

「私もびっくりしましたわ。だってこんな時間にさくらさくらとちようちよが聞こえてきたんですもの。」

につこり微笑む沙織にその男は真っ赤になった。

「い、いえ。なんだか知らないうちに歌ってたんです。あ、失礼しました。ぼくはここで外科医をしている宮沢賢治といいます。」

「宮沢賢治？」名乗られた名前に沙織は目を見張った。

「そうですねえ。誰でもそう思いますよねえ。ぼくはこの名前を付けた両親を恨みますよ。毎回毎回乗るたびにみんなびつくりするんだ。おまけに名前に負けてるって必ず言われる。せめて漢字だけでも違う字を使ってくれたらよかったのに、漢字まで同じなんですよ。ああ、やっぱなア。」

宮沢賢治は頭を抱えしやがみこんだ。それを見た沙織は宮沢の側でただオロオロするばかり。

「ご、ごめんなさい。そんなつもりじゃなかったんです。ただ、もう、びつくりしてしまつて。有名な作家と同じ名前の人がいるなんて誰も想像しないでしょう？ごめんなさい。」

「いいんです。・・・もう慣れてるから・・・でも、あなたのようにキレイな人に心配してもらつて結構気持ちがいいかも。」  
顔を上げ、ニコツと笑う宮沢に、さっきの心配は何だったのだろうか。と沙織は少々呆れた。こんなあに軽そうな人が本当に医者なの？それが表情に出たのか、宮沢はパツと立ち上がり、白衣のホコリを払うとまた笑顔を見せた。

「疑ってますね？でも本当ですよ。ぼくはここに勤めているんです。今日は当直だったんですけど、新鮮な空気に当たろうと思ってここに来たんです。で、あなたは？」

宮沢は沙織の手を取って立ち上がらせた。

## 第100話

「あ、ごめんなさい。私は沙織、といいます。別にあなたを疑ったわけではなく、本当にごめんなさい。」

「ほらほらやつぱり疑った。・・・さおり、さん？　名字は？」

「みよ、みょうじは・・・あの、さ、榊原です。」

とつさに榊原を名乗った。どういうわけか突然榊原の顔が浮かび、その名を口にしたのだ。初対面の人に得宗寺といえはそれだけで萎縮してしまうからだ。これまでは名前を名乗りさえすれば済んでいたが、改めて名字は？と訊ねられ、つい榊原を名乗ってしまった。しかし宮沢は一向に気にしたふうもなく、

「じゃ、これからはさおりさんと呼んでいいですか？　ぼくたち、友達になりましょう！　さおりさんもぼくのこととは名前で呼んでください。・・・あ！　もうこんな時間だっ！　サボっているのがバレたら大変だ！　じゃ、さおりさん、またあとで！」

白衣をひるがえし茶目つ気たっぷりに手を振って宮沢は屋上から消えた。沙織はそのお茶目な外科医に好感を持った。

沙織が病室に戻ると1人の女性徒が匠の枕元で泣いていた。匠はすでに目を覚ましていてじっとその子の話に耳を傾けている。その様子が深刻そうで沙織は静かにドアを閉め、いったん廊下に出た。少し院内を散策しようと歩き出したところ、バッタリとさきほどの宮沢と遭遇した。あまりの偶然にお互い顔を見合わせて笑った。宮沢は手術後の患者を診察に來たと言って、ホラ、と聴診器を見せた。さおりさんはなぜここに？と聞かれ、沙織は知り合いが入院している、とだけ答えた。

「そうですか。お、そうだ。今日ぼくは当直明けでこのあと休みなんです。もし良かったらデートしませんか？」

いきなりの誘いでキョトンとした沙織に、宮沢はもう一度同じ事を言った。

「あ、あの。急に仰られても・私たちさつきお会いしたばかりですから。それに、私と一緒にいたら宮沢先生にご迷惑がかりますわ。」

返事に窮し、遠まわしに断ったつもりだったが宮沢には通じないようだ。

「迷惑？大丈夫ですよ。今、おもしろい映画やってるんです。それを見てその後、食事に行きましょう。心配しなくても大丈夫。ちゃんと家まで送りますから。ね？」

ね？とウインクまでして強引に誘う宮沢に沙織は心底困ってしまった。

## 第101話

確かに軽いデートなのかもしれない。しかしそれは、さほど重要ではない。あの誘拐事件以来、沙織には影ながら数人のSPが付いている。彼らは沙織の行動を逐一榊原に報告する使命も帯びており、簡単にデートする、というわけにはいかないのだ。ただし、ひとつだけ例外があった。沙織が匠と一緒にであるということが確認された場合のみ、彼らにはしばしの休息が与えられるのだ。

「ごめんなさい。せっかく誘っていただいたのですけれど、やはり行けません。私、看病しなくてはならないんです。」

「そうですか。じゃ、今度の日曜はいかがですか？」明らかに取り違えている。

「あ、あの。そういうことではなく・・・すみません！」

慌てて頭を下げると沙織は走って病室に戻った。

さっきの女性徒はもういなかった。代わりに早苗が着替えと朝食を持って来ていた。匠は窓の方を向いたままこちらを見ようとしないう。怒っているのかそうでないのか、そこから読み取る事はできない。早苗は沙織が入ってきたことで緊張の糸がほぐれたのか笑顔を見せた。

「おはようございます。お着替えと朝食をお持ちしました。匠さんの分も用意してありますが、回診の後で召し上がられるように、と榊原が申しておりました。」

早苗は沙織に向かって話しかけながら時々視線をベッドに向けている。よほど匠の存在が気になるのだろうか。彼女が気の毒になった沙織は穏やかな笑みを浮かべ、そつと耳打ちした。

「そんなに気を遣わなくても大丈夫よ。それよりも朝早くから忙しい思いをさせてごめんなさいね。ここは私がしますからあなたはお帰りになって。ね？」

早苗が持参した包みを受け取り、沙織は急き立てて彼女を帰した。それから小さな吐息を漏らし、包みを備え付けのキッチンに置いた。一呼吸おいてベッド脇の椅子に腰を下ろすと、黙ったままの匠に声をかけた。

「匠さん、どうしたの？ さつきからずっと黙ったままなんて・・・何か、怒っているの？」

「別に。 どうしてそう思うんだ。」

やっと喋った匠の声は普段となんら変わらない。しかし相変わらず窓を向いたままだ。

「さつきの。 女の子は誰なの？」 気になっていることを聞いてみた。

「さつき？ ああ、あの子は剣道部員だ。」

「そう、泣いていたみたいだったけど、何かあったの？」

「何でもない。 それにおまえが気にする必要はない。 部内のことに口出しするな。」

冷たい言い方に沙織は言葉なく頷いた。

「それよりも、どこへ行っていた。」

その時になってようやく匠はぐるりと首を回した。

## 第102話

「屋上と院内を少し歩いて来たの。」

「それで。銀河鉄道ってわけか。」

「あつ！」

匠はすでに宮沢の存在を知っていたのだ。驚いた沙織は身体が次第に震えてくるのを禁じえなかった。真っ青になった彼女を匠は冷めた目で見ている。

「いつからおまえは榊原を名乗るようになったんだ。」

軽蔑した言い方に沙織の顔がさらに能面のようになった。

「おまえのSPには感謝しなくちゃな。なんでもかんでも全部注進してくる。おせっかいにもほどがある。どうせオレが退院するまでの自由時間だ。おまえも他の男とデートできるなら今のうちにおいた方がいい。それから。今日はもういいから帰れ。冬休みに入ったといつても家ですることがあるだろう。榊原に聞いてオレの部屋に荷物を運んでおいてくれ。」

あとはもういい、といわんばかりに匠は再び顔を背けた。ショックのあまり動く事ができずにいた沙織も彼の沈黙により徐々に緊張が解けてきた。それでも顔には血の気が戻らない。身体だけが命令通り反応し気落ちしたまま病室を後にした。その少し後方を数名のSPがピタリと付いていった。

その日のうちに尿の管が外され身体の自由を取り戻した匠は、宮沢賢治なる医師を探しに病室を出た。SPから当直明けとの報告があったため不在かもしれないと懸念したが、それには及ばず、沙織にフラれたせいなのかまだ院内にいた。面会を請うと、怪訝な顔つきで現れた。

「ぼくが宮沢ですが、あなたは？ お見かけしたところ整形の患者さんのようですが？」

「ええ、そうです。昨日手術しました。周防匠といます。」

「すおう、さん？ それでよくに御用とは？ 立ち話もなんですか  
ら・・・と、あそこに椅子に掛けましょう。」

そう言つて宮沢は匠を面会者用のソファに誘つた。



## 第103話

「さて、と。たしか初対面だと思いますが。」

「お忙しいところお呼び立てして申し訳ありません。回りにくい言い方はせず単刀直入に窺います。よろしいですか。」

「もちろんです。もって回った言い方はぼくも嫌いですから。」

「今朝、さあ、あ、いや、榊原沙織という女性に会いましたね？」

「ええ、サオリさん！いやあ、あんなに美しい人には会った事ありません。一目ボレってやつですか、速攻でデートに誘ったんですけど断られてしまいました。でも、それが何か。」そう言って宮沢は天真爛漫な笑顔を見せた。匠はその笑顔に好感を持った。と同時に畏怖も覚えた。こういう人間が意外に危ないのだ。一度カン違いをさせてしまうといずれアダになってしまうことが大々にしてあるものだ。

「こちらの早合点ならあらかじめ謝ります。今日は断られたと仰いました、これから先あの子を誘われる気持ちはありますか。」一応、遠まわしに聞いてみた。

「誘う？ ああ、デートですね。もちろんですよ。あんな美人、今まで見たことがないですからね！ でも、なぜそんな事を聞くんです？ あ、もしかしたら、彼氏、ですか？」

それまでの笑顔が無くなり、片方の眉が上り上がった。

「厳密にいえば少々違いますが、そう解釈していただいてもまあ結構です。」

「なんだか回りくどい言い方だなア。はっきり言って下さい。はっきり。」

「そうですね。　そうまで仰るなら言いますが・・私はあの子のいいなすけです。2、3週間後には婚約し、私の誕生日に入籍する予定です。」

匠にしてみれば普通に言っただけだったが、宮沢にはかなり奇異

に聞こえたようだ。

「いいなずけ？　どういうことですか？　もしそれが本当なら、今どき随分古臭い話ですね。それに本当にあなたが相手なんですか？　なんだか他人事のようにぼくには聞こえましたけど。それに誕生日ってどういうことですか？」

## 第104話

「私が18になったら入籍する、ということです。」

「18？ えッ、つてことは今17？ うそッ。 ほんとと同じくらいだと思った。 なあんだ、そうなんだ。 えっ？ つてことは高校生？」「2年です。 アレも同じ高校の同級生です。」

「アレ？ そ・そう。 アレ。 アレね・・それでぼくにクギを刺しに来た。 というわけか。」

「まあ。 そんなところです。 わかっただけですか。」

なるべくへりくだって話をしていた匠だったが、宮沢は匠が随分年下だと知り、急に横柄な態度に変わった。 もっとも普通の高校生ならそれでもいいが、いかんせん、匠は普通ではない。 初対面ということもあり、匠は冷静な態度を崩さず続けた。

「ですから今後、アレに近づかないようお願いいたします。」

「ナンセンスだ。」 宮沢はくぐもる声で呟いた。

「何をもってしてそう仰るんです？」

聞こえていた、ということに宮沢は目を丸くした。 囁いた程度だったのに・・・

「きみは地獄耳か！ そう、ナンセンスと言った。 今どき許婚とか18になったら入籍するとか。 くだらない！ オレはそういうものが大っ嫌いだ！ だいたいそんなことを言う人間に限って古臭い習慣に囚われて肝心な事実を見落とすんだ。 ケッ！ きみもそのクチだろう。 高校生だつて？ 親のスネをかじってる身分で結婚？ 笑わせてくれるね。 オレは生真面目な人間じゃないが、その手の冗談は好きになれないな。 今朝、彼女に断られたときはどうでもいいやって思ったけど、こんな形でけん制されると逆にやってやろうって気持ちになるね。 スネかじりの奴に負けてはいられない。 オレはきみから彼女を奪う！」

堂々と宮沢は宣戦布告した。 スネかじり。 という言葉は匠の最も忌

み嫌う言葉ではあるが、これ以上目の前の男を奮起させることはやめにした。

## 第105話

「そうですね。わかりました。ではご自由にどうぞ。ただし、今の話はあなたのためを思っただけのことです。下手に関わらない方がいい。と申し上げたかったのですが、ご理解いただけなかったようです。・・・最後にもう1つ。あなたに与えられた時間は今日から数えて約3週間前後です。それを考慮して素早く実行に移されることですね。では、私はこれで。お忙しいところお呼び立てして申し訳ありませんでした。」

立ち去ろうとした匠を宮沢が「ちょっと。」と、引き止めた。

「何か。」

「彼女の連絡先を教えてくださいませんか。」

「聞かなかつたんですか。」匠は軽蔑の眼差しを向けた。

「さっきも言った通り、今朝の時点ではそこまで考えていなかったんだ。だから聞かなかつた。教えてくださいよ。」

「簡単ですよ。電話帳に載ってます。得宗寺秀一宅に電話すればオペレーターが出ますから、沙織に繋いで。と言うだけでいいですから。」

「得宗寺?」

匠の腕に掛けられていた手がビクツと動いた。

「そうです。得宗寺沙織。それが彼女の本名です。」

掴まれていた腕を静かに解くと、匠は後ろを振り返ることなくその場から去った。宮沢は何かとんでもないものを見たような表情で立ち尽くしていた。

手術が巧いのか、匠の身体がすこぶる強靱なのか定かではないが、術後3日目にして退院の許可が下りた。元々主たるケガが腕なので普通に歩けるし、内臓は何ともないため早々に許可が出たとも

いえる。腹部は強めの打撲だからこれもまた特に入院して治療する  
ほどでもない。従って喜ぶべきことなのではあるが、匠は素直に喜  
べない。退院後は自宅が周防家から得宗寺家へ変わるからである。  
そのことはすでに榊原から聞いていた。もちろん、匠は父たちの話  
から周知はしていたが、あえてそのことは伏せておいた。口にした  
ところで決定が変わるものではないからだ。かいがいしく身の回り  
の荷物をまとめている沙織を見て、ふと、宮沢のことが気になった。

## 第106話

「沙織。」

「はい？」手を止め顔を上げた。

「銀河鉄道はその後何か言ってきたか。」さも興味なさそうに聞く。

「ぎんが？・・・宮沢先生のこと？」

「ああ。」

「いいえ。別に何も・・・それがどうかしたの？」

「おまえを奪う。と豪語していた。」

「えっ！ ま、まア。」

「オレは。自由にしていい。と言ったんだがな。」

「えっ？」

「オレが退院するまでの間だけしか猶予がないから急げとアドバイ  
スしたんだが・・・やはり、得宗寺の名前にビビったか。」

「えっ？ 言ったの？」

「いいや。連絡先を教えろと言うから得宗寺秀一の名前で電話帳を  
見る。と言っただけだ。・・・それにしてもこれは不便だな。」

三角巾で吊られた腕をまじまじと見た。医師の説明では、しばらく  
の間その状態でいなければならぬ。ということだった。

「手が止まってるぞ。 まあ、こんなに早く帰ることになるとは思  
ってもみなかったんだけどな。だからといってグズグズしているの  
はもつと嫌いだ。」

「せっかく。お友達になれると思ったのに・・・」悲しそうにうなだ  
れる沙織。

「ともだち？ だれの・・・ああ、銀河鉄道か。 友達ならいるだろ  
う。 おまえに金魚のフンみたいにくつついている1、2、3が。」

「みつちゃんたちは女の子よ。」

「へえ、そうか。おまえ、男友達が欲しかったのか。 男漁りが趣味  
だとは知らなかったな。それは悪い事をした。じゃ、今から行って

誘ってくださいって言ってやるのか？」

匠の瞳は冷たく、声には嘲りが含まれていた。

「そんな。ひどいわ。男漁りだなんて。」

「それ以外の何ものでもないだろう。オレとしてはか・な・り・優しく言っただけだ。こう言っただけでもいい。サカリのついた猫、か？」

「えっ。 そんな・ひどい。」

「おまえにひどいと言われる筋合いはない。事実を言ったまでだ。

メソメソしている暇はない。行くぞ。」

スツと立ち上がり、いったんドアまで行きかけた匠だったが、大股で沙織の前に立つと、あっという間にその可愛い唇に自分の唇を重ねた。それはほんの一瞬のことだったが、沙織は永遠に続くのではないかと錯覚した。

「おまえに男友達はいる。オレだけで充分だということがわかったか。」

その熱っぽい低音が沙織の耳元に響いた。ぼーとした沙織がわずかに頷くと、匠はもう一度囁いた。

「榊原たちが待っている。先に行くぞ。」

次の瞬間、匠は超然と立ち上がり後ろを振り向くことなく出て行った。沙織は今起きた事が理解できず、白魚のような指で自分の唇を触った。それから少しして匠に置いて行かれた事に気づき、慌ててその後を追った。



## 第107話

巷ではクリスマス商戦も終わり、今度はお正月から春に向けての商戦が始まっていた。得宗グループのデパートも例外ではなく、皆、売上に躍起となっている。そんな中、暮も押し迫った31日。身内だけで匠と沙織の婚約が発表された。本来なら大々的にパーティなどを開くところであるが、本人達がまだ高校生であり、学校や友人に知られたくないという強い要望で、得宗寺家の従業員と匠の両親のみ、出席した。大晦日ということで従業員は希望者だけの参加だったのだが、全員が快く出席すると返答した。秀一の威光もあったかもしれないが、若い2人をこれから守り立てていこうという気概が感じられた。

12時。濃紺のスーツを羽織り左腕を吊った匠と、ピンクの牡丹をあしらった清楚な振袖を着た沙織がロビーに現れると、全員が割れんばかりの拍手で出迎えた。日ごろ笑顔をあまり見せない匠だが、拍手の歓迎に自然と口元がほころんだ。沙織はほんのり頬を染め、ぴったり匠の半歩後ろに付いている。榊原の司会で立食形式パーティが始められた。無礼講ということもあり、2人はそれぞれの輪の中心になった。親たちは年配者同士、料理長やルーム係長たちも交え自然と一団になった。沙織を中心とする女性グループがキャッキャツと華やかなのに対し、匠を中心とした若者男性グループは必然的に話題が仕事に関することになり、余人を寄せ付けない雰囲気である。中にはなぜ加賀美を抜擢したのか、と具体的な質問も飛び出し、さながら会議のようになる場面もあった。それに対し、匠は1つ1つ明確に答えた。そんな彼をじつと秀一は見守っていたのだが、ふいに誰かが目の前に立った。眉をひそめ顔を上げると、それは目に涙を溜めた明子だった。ハンカチを手でもみくちやにしながらしきりに何か言いたそうにしている。

「あ、あの・・・あの子は私たちに似ず、少しは出来の良い子だと思

います。・・ち、小さい頃からほったらかしにしてきたというのに、沙織ちゃんのお陰で大きくなれました。ありがとうございます・・これから、これからは会長さんの頭痛のタネになるかもしれないませんが、どうぞ、どうぞ、末永くお願いいたします。」

深々と頭を下げる明子に、1人息子を奪ってしまったという罪悪感が突然秀一の心にわきあがった。

## 第108話

「いや、こちらこそあなた方の大切な息子さんを頂いてしまつて申し訳ないと思つております。お2人の期待に応えられるよう私もしつかり匠君を指導したいと考えています。時には叱り付ける事もあるかと思いますが、そこはご容赦下さい。」

秀一に考えてもみなかつた感謝を述べられあたふたしてしまつた明子。

「あららら！そんな・・・とんでもございません！こちらこそ宜しく願ひいたします。」

慌ててお礼を言い、早々に秀一の視界から消えた。眼前には再び匠の姿があるはずだつた。若者集団は相変わらず部屋の一角を占め、活気溢れる談義をしている。秀一は匠の姿を目で追つた。するとその隣に当の本人が音もなく近寄つた。滅多なことでは驚かない秀一の身体がピクリと動いた。

「驚かせて申し訳ありません。」謝つてはいるものの、心底そうは思つていないようだ。

「口先だけで謝られても嬉しくはない。それよりもどうしたのだ。あの集団の中にいたのではなかつたのか。」

周囲を慮り、2人は顔を正面に向けたまま話し始めた。

「事業計画の話ばかりで退屈してしまいました。もつとも今後のプライベートを聞かれるよりはまだ、まし、ですけれど。」

「なるほどな。沙織との生活より仕事の話の方が楽か。それも一興だ。だが私は仕事のためだけにいまえを迎え入れたわけではない。」

「なんといつても沙織が一番だからな。あの子を泣かせたら許さんぞ。」

「それならもうぼくはあなたに数え切れないほど殺されてますよ。」

「だが女の問題は起こしとらんだろ。2人の間であの子が泣こうとそれはおまえ達の問題だ。しかし第3者。特に女の問題が絡んだ

場合は勝手が異なる。あのなんとかいう、おまえの従妹とは片が付いたのか。」

「よくご存知ですね。鼻からあの子のことは相手にしていませんよ。あの子は見かけはいいが中身は最悪です。」

「そうか。ではおまえのケガのもとになった剣道部員はどうだ。ケガを理由におまえに近づこうとしているようだ。」

「ふッ。あなたにかかつては隠し事は不可能ですね。何でもお見通しだ。それも沙織に付けたSPからの情報ですか。確かに完治するまで身の回りの世話をさせて欲しいと言われましたが断りました。それを受け入れたら何をするにしてもあれこれと1から説明しなくてはならなくなる。」

「その点、沙織ならそんな面倒はいらないということか。」

「まア、そういうことです。・・・それよりも伺いたい事があるのですが、宜しいでしょうか。」

「うむ。」

その時初めて匠は義父となる秀一を見た。

## 第109話

「この婚姻でぼくが得る権限はどのようなものでしょう。そうですね、たとえば・・人事に関すること・・いかがでしょう。」

「権限？ 人事？ 具体的に言いなさい。」

「得宗グループのみならず、公の機関も含めて、です。」

「ある程度は可能だ。だが、なぜそんな事を聞く。」

「ええ、ちよつと。ただ口にすると差しさわりがあるので言えませんが。」

「私情を挟むことは許されないぞ。」

「わかつています。しかし部下をないがしろにし、他人を見下している人間に役職を与え、大きな顔をさせておくのは笑止千万です。

他人の振り見て我が振り直せ。という最も悪い見本を見せてもらい、ぼくとしてはいい勉強になったと思います。それでもあいつた人間には遭いたくありません。いかがでしょうか。」

匠の言葉に秀一は目を細めた。それは彼がよく見せる怒りの表情だった。

「そいつの名は。」

「言わずともすぐおわかりになると思います。有名らしいですから。」

「そういうことならおまえの好きにするがいい。」

「ありがとうございます。早速着手させていただきます。それからお約束いただいた日下たちへの報酬の件ですが、今までのところ特に希望が出ていません。それではいつまでたっても埒が明きませんので、臨時ボーナスということで金一封を出したらいかがでしょうか。もちろん暮のボーナスも例年より弾みましたが、別口で謝礼金として出せば良いと思うのですが。」

「うむ。おまえの思うとおりにしなさい。」

「はい。ではすぐ手配いたします。」

そう言つて立ち上がろうとした匠の袖を秀一は引いた。改めて腰を下ろす匠。

「何でしょうか。」

「おまえの、希望はないのか。今の2件は双方、他人事だ。」

「いいえ。今のぼくには望むものはありません。それに・・望んでも詮無い事です。・・強いて言えば、あなたのご期待に副えるよう頑張ることでしょうか。」

「そうか。わかった。」

「では、手配してまいります。」

「私の部屋の電話を使いなさい。誰に連絡するにしても直通で通じる電話だ。」

「はい。そういたします。」

## 第110話

ちよつとトイレに、といった感じでホールを出て匠はすぐ秀一の部屋へ行つた。そして言われたとおり電話帳をめくり目当ての人物のボタンを押した。相手は在宅中で、用件を伝えるとすぐ善処します。との答えが返つてきた。結果、正月明けに真田の憂鬱が解消されたことは言うまでもないことだった。と同時に、アニメゲイトのメンバーたちと沢木に対しても特別ボーナスが支給された。

翌日から秀一の匠への教育が始まつた。手術したことなど休息の理由にはならない。世間では正月だというのに匠にはその気分を味わう事さえ許されない。冬休みを利用し、秀一はまず、各国の主だった傘下会社に匠を連れて行つた。ニューヨーク、ロンドン、パリ、e t c . 分刻みで各地区を回らねばならないため最後のアムステルダムを辞去したときには匠の身体は疲労困憊状態になっていた。タフで誇る秀一の顔にも疲労の皺が刻み込まれている。ホテルに戻ると10時をかなり回っていた。これまでの外国訪問は旅行が主だったが、今回は仕事オンリーだった。そのせいで景色を眺める余裕は全くなかった。常にこんなことを秀一はしているのか、と改めて匠は義父となる秀一の凄さを実感した。お互いを配慮し、毎回別々の部屋を取ってくれた秘書たちの顔を思い浮かべていると電話が鳴つた。

「Hello . . . I a m . . . T h a n k s . . . もしもし。」

交換手の声が消え、代わりに日本語が聞こえてきた。電話の主は沙織だった。途端に匠の声が無愛想になった。

「なんだ。」

「いま、お話しても、大丈夫？」相変わらず遠慮がちな言い方だ。

「用件は。」

「あ、あの。用事というほどじゃないのだけれど。」

「たいした用事でもないのに電話してきたのか。」

「え？あ、そ、そうよね。ご、ごめんなさい。切るわね。」

その時匠は思い出した。秀一が言った“沙織を泣かせたら許さない”という言葉を。

「切らなくていい。とにかく言ってみろ。」

「あ、あの。今日から3学期が始まるけれど、お帰りはいつかな、  
と思つて。」

「3学期？ ああ、忘れてた。時差でこっちはまだ明日になってないんだ。先生には適当な理由をつけて休むと言ってくれ。」

「はい。それから、お父様と一緒に大変でしょうけれど、風邪引かないように気をつけてね。」

「ああ。帰国は3日後になると思う。会長はこのままロシアに向かうらしいから、そう榊原に伝えておいてくれ。」

「はい。」

沙織の返事を待たず匠は受話器を置いた。電話料金が嵩むこともあったが、長電話が嫌いな匠である。



## 第111話

一方、色々聞きたい沙織にとって今ほど落胆したことはなかった。なにしろ、かつて、こんなに離れていたことがなかったからだ。匠が合宿や試合で遠征している時でさえ、こんなに顔を見なかったことはなかった。受話器を置くとひとりでに涙がこぼれた。せめてあとひと言、何でもいいから言って欲しかった。振り返ると早苗が立っていた。沙織は思わずその胸に飛び込み泣いた。

「大丈夫。匠さんはきつとお嬢様のお気持ちをわかっていらつしやいますよ。お嬢様だって本当はわかっていらつしやるんでしょう？ あの方のお心を。」

早苗の優しさに沙織はうなずいた。それでも顔が見えない分、言葉にして欲しかったのだ。

「さあ、今日から学校が始まりますよ。匠さんがいらつしやらないのですからお嬢様がしっかりなさらないと。あ少しの辛抱ですよ。いいですね？」

母親のような早苗の胸に抱かれて沙織は生まれて初めて安らぎを感じた。

「あ、りが、とう。」

「まあ！とんでもありません。お礼なんて。私でよければいつでもお嬢様のお傍におりますからね。」

男の子1人しかない早苗にとって沙織は本当の娘のようだった。まして、物心つかないうちに実母を泣くし、その後は匠という一風変わった隣に住む男の子の世話をしなければならなくなったのだ。不憫に思わないわけがない。余りあるほどの資産を持ちながらも愛に縁のない娘なのだ。早苗の目から見ても匠が沙織を愛していることは明白だ。しかしそれがどれほどのものなのか見当がつかない。匠の性格からして一生、その口から甘い言葉が出るとは考えにくい。匠と結婚する沙織は世の女性からしてみれば十分嫉妬を買いそうだ

が、その実、沙織ほど気の毒な女性はいないだろう。早苗の夫、榊原でさえ、沙織が疲れた顔をしていると労いの言葉をかけている。と、突然、早苗は思い出した。沙織の看病をしていたとき、匠に疲れただろうから休め、と言われたことを。……。匠は沙織以外の人間に対しては優しく接することができるのだ。そう考えて、匠の沙織に対する冷酷さを今一度見直してみると……。それは愛情の裏返しではなからうか。冷たくすればするほどそれは愛の告白をしているのではないだろうか。きっとそうに違いない。それでも自分の思惑をそのまま口にする早苗ではなかった。彼女は何とか沙織を元氣付け学校に送り出した。

## 第112話

1人、成田空港に降り立った匠は、榊原が手配した車に乗ると、後部座席に深く身体を沈めた。その車は普段、秀一しか乗らない専用車であったが、これを機にと、匠が乗ることを秀一自ら承認したのだった。車体はどんな外敵からも身を守る優れもので、1台数千万もする特注品である。内部は快適に過ごせるよう改良が施されており、旅の疲れも手伝って匠は乗ると間もなく深い眠りに落ちた。

匠帰国の報は飛行機が到着した時点で運転手の田中からもたらされていた。車が得宗寺家に着いた時には既に従業員の殆どが玄関に集結していた。不在だったのは、くしくも学校に行っていた沙織だけだった。

1人1人から労いの言葉をかけられながら部屋に入った匠はゆつくりする間もなく、榊原から主の私室へ来てくれると言われたオレには着替える時間もないのかと榊原を恨んでみても始まらない。それが得宗寺家を継ぐ者の宿命なのだ。

秀一の部屋では榊原が神妙な顔つきで待っていた。

「帰る早々呼び出されるとは思わなかったな。」

ソファにかけながら匠は厭味たつぷりに言った。しかしそれも今日の榊原には全く効果がない。表情ひとつ変えないのだ。

「どんな様からのご伝言でございます。」

「伝言？なんだ。」匠の顔がひきしまった。

「1つ、どんな様がご不在中はこの部屋を使用すること。2つ、その間の決済全てを匠さんが行なう事。3つ、学業をおろそかにせず精進し、順位を落とさない事。4つ、匠さん個人が携わっているアニメゲイト並びに新規の事業を余人に譲渡すること。5つ。」

箇条書きされた紙を淡々と読み上げる執事に、匠はうんざりした顔を向けた。

「まだあるのか。」

「あと2つでございます。」

「2つ？ いったいあの人はオレをなんだと思ってるんだ。オレにも限界があるってことを知らないのか。それで？ あと2つってのは何だ。」

「5つ・・・周防建設の後継者リストを早急に作り、その中から適任者を3名選出すること。最後。と、これは特にどんな様が力説しておられた事項でございます。前述の5項目よりも優先するよう。とのことございました。」

「今までの件よりも重要なことなのか？・・・ははア。今年の業績を更新させるといふんだな。そうだろう？ わかった、わかった。仰せの通りにいたします。」

「宜しいんですか？ 最後まで聞かず安請け合いして。後悔しませんか？」

ここで初めて榊原の口元がほころんだ。

「あの人のことだ。業務拡大が最大の優先順位だろう。・・・でもまあいい。言ってみてくれ。」

「二言はありませんね？ 承知したとどんな様に伝えて宜しいですね？」

「わかつてる。二言はない。」

そう言つて匠は疲れた身体をソファに投げ出した。

## 第113話

「それでは、申し上げます。最後の1つ。．．．それはお嬢様を愛し、今年中に2世を設けること。以上でございます。では早速返事を．．！ 何をするんです！」

秀一に報告するため部屋を出ようとした榊原の腕を突如力任せに掴んだ匠。榊原の身体がグラリと傾き転びそうになった。

「イタイ！ イタイですよ！ 匠さん！」

悲痛な叫びも今の匠には聞こえない。さらに掴んだ手に力を込めた。「うっ！」痛さのあまり、榊原の額には汗がにじんでいる。

「今、何と言った。．．2世を設けるだと？ ふざけるのもいい

加減にしろ！ オレはあの人の命令に従ってこの家に入ってやった。私生活のことまで口出しされるのはごめんだ。もし、これ以上指図されるならオレは今すぐここから出て行く。」

極度の怒りで匠の声は沈み、榊原は全身が総毛立った。

「で、ですが、そ、それは、わたしのくち、からは申せません。．．

わ、わた、しは、だんな、さまからの、でんごん、を、お伝えしただけ、ですから。」

どんなに気を張っても榊原の口からは喘ぎ声しか出ない。

「そうか？ ならオレがじかに言おう。その後どうなるうとオレの知ったこっちゃない。」

そこで匠は手を離し、直通電話をかけるべくデスクに近づいた。ところが今度は榊原が慌てた。そんなことをされては執事としての力量を問われるばかりではなく、これまで培ってきた信用を一遍に失ってしまうからだ。

「ま、まってください！ そんなことをされては私が困りますッ！」

榊原は身を挺して匠の前に立ちはだかった。

「おまえの考えていることくらいお見通しだ。だがな、たとえおまえの立場がそうであってもオレは許せない。いいからどけ！」

榊原のディフェンスをさらりとかわし受話器を取る。一瞬の後、秀一の声が榊原の耳にも届いた。匠から直接電話がかかったせいか、秀一の声はいつになく楽しそうだ。匠も義父の話が途切れるのを辛抱強く待った。そして話の区切りがついたところで静かに切り出した。

## 第114話

「榊原から伝言を聞きました。」

その声の低さに榊原は両のこめかみを押さえしやがみこんだ。

「そうか。それで？」

「5つまでは可能ですが、最後の1つは承服いたしかねます。」

「最後？」

「お忘れですか。子供の件です。」

「おお！そうだった！だが、承知できんという理由はなんだ。結婚すれば当たり前のことだ。おまえは4月生まれだから法的にも申し分なかるう。親のスネをかじっている分際ならいざ知らず、おまえは既に収入を得ていて自立可能だ。何の問題もなかるう？それに子供を持つことで責任感も生まれる。もっとも、おまえに無責任という文言は無用だな。」

これがカミソリと異名を持つ得宗寺秀一の言うセリフか。とあきれるほどの親バカぶりだ。さらに付け加える。

「私も早く孫の顔が見たいしな。」

そのひと言が匠の神経を逆なでした。

「いい加減にしてください！なにが早く孫の顔が見たいだ。たとえばあなたの言う通りだとしても真っ平ごめんだ！」

「そう怒るな。おまえまさか、沙織が嫌いなのか。それでそんなことを言うのか？」

「そういう問題ではありません！精神的に早すぎる、と言ってるんです！」

「ほほう。おまえの口からそんなセリフを聞こうとは前代未聞の珍事だ。おまえがそうなら世の中にすっかりした大人など皆無だろうな。とにかく論ずるよりやってみろ。私はこれから会議がある。吉報を待っているぞ。」

秀一は匠の怒りなど全く意に介さず電話を切った。彼の怒りはもは

や頂点に達し、そばでしゃがみこんでいる榊原を完全に無視し、大きな音を立ててドアを開け出て行った。



## 第115話

自室に戻った匠を帰宅していた沙織が出迎えた。大晦日に顔を見て以来の対面に心なしに落ち着かない様子だったが、匠の顔を見るなり身体が凍りついた。

「なにか、あったの？」

恐る恐る訊ねる沙織に、匠は侮蔑にも似た嘲笑を見せた。

「オレは今日ほど前言撤回したいと思ったことはない。」

「え？ いったいどうしたというの？」

匠の腕に手をかけようとした沙織を虫でも振り払うように撥ね退けると匠は言った。

「おまえの親父はご親切にもオレとおまえの未来図を描いてくれたよ。今年中に子供を作れと言われた。」

まるで他人事のような口ぶりに、沙織はようやく“未来図”の真意を悟った。瞬時に真っ赤になってうつむいた。

「期待に添いたい。ところだが、何もかも思い通りにさせてたまるか。オレがそういう考えだということを忘れるな。」

「・・・は、はい。」

正当な理由がない限り、己の信念を曲げない匠であった。どういいういきさつでそういう結果になったのか沙織には見当もつかなかったが、今は静かにそれを受け入れるしかなかった。

翌日。匠と沙織が久方ぶりに一緒に登校すると、正面玄関に一台のパトカーが赤色灯をつけたまま止まっていた。その周囲は黒山の人ばかりで、一見して何か良くないことが起こったことがわかった。匠が足早に近づくとサッと彼らは両脇に別れ、道を作った。そこには見覚えのある真田がいた。新年早々目の上のタンコブが移動になったおかげか、心持ちすっきりしたように見える。

「お待ちしておりましたよ！」開口一番。真田が喜びの声を上

げた。

「どうしたんですか。こんなに朝早く。」

真田が赤色灯をつけたパトカーでわざわざ匠に会いに来たとは思えない。戸惑っているのを察知して真田は匠をひと気のないところへ導いた。挨拶もそこそこに（というより真田は今回の人事異動に匠が全面的に関わっていることを知らなかった。もちろん匠も恩着せがましくそんなことを明かすつもりはなかった。）真田は来訪の旨を説明し始めた。

## 第116話

「実は、今朝の6時頃、こちらの警備会社から我々に通報があったんです。」

「通報？」

「ええ。北側校舎3階の女子トイレで生徒が首を吊っているという内容でした。・・・おや？その腕はどうなさいました？」

ギプスはまだ取れないが、なるべく普段と変わらぬ服装をしていたせいで真田が気づくのに遅れたのも無理はない。

「ええ。ちよつと練習中にケガをしたんです。それよりも話を続けて下さい。首を吊ったというのはどういことですか。」

「我々が現場に駆けつけた時には既に死亡しておりました。現在は検死のため遺体は緑ヶ丘病院に搬送しました。」

「自殺。ですか？」

「それが、なんとも言えないのです。」

「と、言うこと？」

匠の瞳が静かな光を帯び始めた。興味を持ち始めた証拠だ。

「遺書らしき物も見当たらず、遺体の傍には第三者がいたような形跡があるのです。」

「第三者？ということは殺された、ということですか？」

「うーん。それがはつきりしないです。」

それから真田が説明したところによると、110番通報があつたのは5時50分頃。ちよつと宿直当番だったのが真田の部下で、昨年警視庁に配属になった若干23歳の佐藤という刑事だった。彼はすぐ真田に連絡を取り、その指示のもと数名の警官と共に現場に駆けつけた。真田が合流したのが6時40分。現場には通報した警備員が彼らを首を長くして待っていた。真田たちが到着すると、こつちこつちと大げさに手招きした。

一番奥のトイレの上部に対角線に棒を張り、頑丈なロープで輪

を作つてその生徒は制服のままこちらに背を向け宙に浮いていた。生徒手帳から3年生の坂下まゆみという女性徒であることが判明。すぐ家族に連絡すると同時に、鑑識係が呼ばれた。

その後、現場写真を撮り終え、遺体が病院に運ばれたのは匠たちが登校するわずか数分前にことだった。真田が警官たちに指示を与えようとパトカーに戻つて来たときにはすでに大勢の生徒たちで一杯になっていた。彼らに揉まれながらパトカーに近づき無線連絡をしている最中、ちょうどいい具合に匠が現れた、ということだった。

## 第117話

「……それで、第3者の存在とは？」

外での立ち話は少しの間でも足元から寒さが滲んでくる。匠は真田を促し剣道部の部室へ連れて行った。

部室の中は当番の者が電気を入れてくれたのか、ヒーターがほどよい具合に効いていて2人を優しく迎え入れた。全国レベルの剣道部は予算もたっぷり取れるため、部員専用の応接室なども備え付けられている。部室というより豪華な一戸建ての家、といった感じである。そして匠自らコーヒーマシンを淹れ真田に勧めると改めて第三者の存在を聞いた。

「ええ。吊られたロープにはトイレが洋式だったせいで踏み台を要せずだったようですが、入り口に遺体のものとは明らかに異なる靴の跡がありました。もちろん発見者のものでもありません。彼の話では掃除は最低でも1日3回は行っているはずだということでした。それにわずかでしたが土も残っていました。乾燥はしていましたが古いものではないようです。ですから他殺のセンもあながち拭い切れず困っていたところですよ。」

「土のついた靴……か。その他には。」

「今のところありません。これからの捜査で新しい手掛りが発見されると思うのですが、と言って自殺のセンも捨て切れません。表立って争った形跡もありませんでしたし、自らこういうカンジで……首にロープを掛けたようなんです。」

真田は手振りでロープを自分の首に掛ける真似をした。

「自殺というには靴跡が気になり、他殺というにはロープの掛け方……か……難しいですね……それで？　ぼくにどうしろと仰るんです？」

「それなんです！」

待つてましたとばかりに真田はポンと膝を叩いた。

「それ、とは？」

嫌な予感がする。と匠は思った。また厄介な事に巻き込まれそうだ・

「ええ！是非、周防さんのお力をお貸しただけじゃないかと！以前、周防さんの学校が朱雀高と聞いていたのを思い出し、なんとか協力をお願いしたいと！お忙しいのは重々承知しておりますが、そこをなんとか、お願いできないでしょうかッ！」

勢い良く頭を下げすぎてテーブルにガツン！と額をぶつける真田を見て、『予感的中』の文字が目の前を通過した。匠は小さくため息をつく、いったんうつむいてからゆっくり顔を上げるとにっこり笑った。

## 第118話

「ところで。 真田刑事。 いや、 警部と申し上げた方が宜しいでしょうか？」 その口からは事件とは全く無関係の言葉が出た。

「は？」

「昇進されたのでしょうか？ おめでとうございます。」

「なぜそれを？」 キョトンとした顔の真田。

「有馬さんはどちらに行かれたのですか？」 真田の疑問を意に介さず匠は質問を続けた。

「えっ？ どうしてそれを・・・あっ！」

真田の顔から見る見るうちに血の気が引いていく。 何かを悟ったようだ。 匠は少しだけ微笑んだ。

「話を元に戻しましょう。・・・3年生である坂下さんがわざわざ学校の、それも普段あまり使われていないトイレで自殺というのも変ですね。 ここは夜10時になると自動ロックで全面的に封鎖されます。 それは朝6時になるまでどんな理由があろうと解除されません。 いったい死後どれくらい経過していたのでしょうか。・・・真田さん、真田さん、 どうしました？ ばくの話、聞いてます？ しつかりして下さい！」

匠に声を荒げられハッと我に返った真田はあたふたと手帳を取り出した。

「え、 は、 はい。 か、 監察医の、 話ですと・・・およそ2、3時間かと、 ハイ。」 極度の緊張からか、 さして暑くもないのに真田の額には汗が滲んでいる。

「と、 いうことは夜中の1時から4時の間、 ということになりますね。 坂下さんともう1人は昨夜の10時前からトイレにいたことになる。 長時間そこで何をしていたんでしょう。 暖房も切られている上に他の部屋より寒いトイレだ。 そんなところにどんな用事があったのか。」

「これから死のうという人間に暑さ寒さはあまり関係ないのでは？」  
真田は心細げに口を挟んだ。

「なるほど。これから死ぬ人間が寒さを感じていたら自殺なんかできないうねえ。まして非常灯がついているといっても暗いところだ。それだけでも常人なら恐ろしくてじっとしてなんかいられませんよね。」

案外あっさりとは匠は真田の意見に同調した。ところが真田にしてみれば匠が淡白だったのがかえって気になった。

「な、なにか、お気に障ったのでしょうか。」

「えっ。いいえ、なにも。真田さんの仰る通りだと思っただけです。たしかにその通りですね。雑念が入ったら自殺なんて大それたことはできない。」

「ということは？周防さんのお考えではこれは他殺だと？」

真田の顔に少し赤みが差した。刑事魂が頭をもたげてきたのだろうか。

「そうは言ってませんよ。あくまでも状況で考えた場合を言ってるんです。とにかく捜査が進めばいろんな事がわかってくるでしょうから、それを待ちましょう。・・・申し訳ありませんが、これから授業がありますのでまた後ほどお話を伺う、ということで失礼しても宜しいでしょうか。」

「え、あ、はい。お時間を取らせてすみませんでした。何かわかり次第連絡いたします。」

それをしおに2人共立ち上がり匠は教室へ、真田は部下の待つ現場へ戻った。



## 第119話

ケガのためしばらく稽古を休むことになった匠は、放課後になると得宗寺家の送迎車に乗り帰宅した。沙織は一足先に帰宅していて従来通り、匠のために夕食の用意をして待っていた。内々で披露したとはいえ、匠のたつての希望で2人は部屋を異にしており、2人はそれぞれ独自のプライベートを保っていた。もちろん必要とあればお互いの部屋に入室は可能だが、なるべくそうならないよう気を配っていた。以前ならお互いの家を自由に出入りしていたが、匠が得宗寺家に入ってからというもの、掃除、洗濯以外は沙織も意識して匠の部屋には入らなくなっていた。不便はあるが、そのぶん、誰にも煩わされること啼く自由な時間を満喫できた。

匠は沙織に手伝ってもらいながら私服に着替えた。いつも沙織のコーディネートに任せている彼だが、何を着てもモデルのように着こなしてしまうのでそれほど沙織も苦労はしない。

着替えが済むと匠はだるそうにソファに身を沈め目を閉じた。ほぼ同時にドアの向こうで聞きなれた榊原の遠慮がちな声がした。沙織がドアを開け彼を招き入れた。

「匠さんにお客様です。」

入るなり榊原は執事的口調で言った。しかし匠は無言のまま聞いていてのかいなのか判断がつかない。代わって沙織が誰何した。「警視庁の真田、と仰る方でございます。周防家で匠さんがこちらにいる。と聞いて来たと仰っておりますが、いかがいたしましたよう。」

「通せ。」そこでようやく匠が口を開いた。

「かしこまりました。こちらにお通しいたしますか？それとも別室にいたしますようか。」

「ここでいい。」

「かしこまりました。」

執事らしい態度で榊原が出て行くと、沙織もまた急いで部屋を出ようと匠の洗濯物をかき集めた。

「おい。」

「はい？」

「おまえはここにいて真田さんの接待をしてくれ。今朝部室で飲んだコーヒーはまずかった。」

「誰が淹れたの？」

「オレだ。」

「まあ！それならどうして私を呼んでくれなかったの？美味しく淹れてあげたのに。」そう言って恨めしそうに匠を見る。

「そんなことで威張るな。」

その言葉にはそんなことで頭を煩わしたくないという態度が表れていた。それでも沙織は嬉しそうにお茶の準備を始めた。匠はソファに座ったまま真田が来るまでの間、日課となっている新聞を読み始めた。たかが新聞、といっても彼の前に置かれたものは日本全国から送られてきた地方紙も混じっているため部数は軽く60は超えていた。それを隅から隅まで（テレビ欄は除いて）読破しなければならぬ。それだけでも何時間もかかってしまうのだ。本来なら真田に会う時間などないはずなのだが、乗ってしまった船を途中で捨ててしまうことは匠のプライドが許さなかった。

## 第120話

ほどなく榊原に案内され真田がキョロキョロしながら入って来た。広大な得宗寺家の敷地面積に驚いたのか腰が引けているようだ。匠が自分の前のソファを勧めると真田はテーブルの上に置かれた新聞の量に目を丸くした。

「これは・・・」

「今日の新聞ですよ。これから読むんです。」

「こんなに・・・いたいどれくらい・・・？」

「日本全国津々浦々。新聞は各県にあるでしょう。ぼくの日課ですよ。というより仕事でしょうか。一面はどこも同じようなものだからね。コツさえ掴めばそんなに大変でもありませんよ。むしろ行かずして各県の話題がわかるのですから楽しい方が多いですね。」簡単に言っただけの匠に真田の顔は驚きから賞賛へと変わった。

「やはりあなたはすごい人だ！学校だけでも大変なのにこんなことまで。私なんか1つのことでも身体が2つ3つ欲しいと思うのに。」

これだけのことをたった1人でやってしまうなんて！

「ぼくもこの身体が分離されて各方面に顔を出せたら、とよく思いますよ。」

ウソか真か、匠の口ぶりには余裕さえ感じる。

「ほんとうですか？ とても信じられない。」

「あなたにウソを言っても何の得にもなりませんよ。それに警察の方にウソを言ったら捕まってしまうですよ。・・・それより何かわかったのですか？」

匠は沙織が淹れたコーヒーを真田に勧め、自らも美味そうに飲んだ。「あっ！は、はい。それがわかった部分と不可解な部分とがありまして、何とも判断がつかないんです。」

真田は手帳を取り出すとペラペラとめくった。

「と、言うത്？」

「はい・・・あのう・・・」

そこで真田は口ごもり、チラッと沙織に目をやった。

「ご心配なく。単なる助手ですから何を聞いても他言はしません。」

「はあ、ですが・・・」

「ご心配には及びません。意外に役に立つんでしょ。初対面でもないことですし、どうぞ気になさらずに。ところで、判断がつかないとはどういうことですか？」

話を元に戻そうとする匠に引きずられ、真田も意を固めたようだ。コーヒーをぐくりと一口飲むと、ソーサーごと端へ押しやった。

「実は、昨日の彼女の行動なんですが、朝、家を出たきり全く足取りが掴めないのです。両親に聞いたのですが、学校へ行った時には特に変わった様子はなかったそうです。いずれにしても両親が混乱していて落ち着いて話を聞ける状態ではなかったのですが。今までもクラブの後身指導で朝早く出かけたきり夜遅かったりすることはよくあったそうです。それから教室においてあったカバンの中から驚くべきものが見つかったんです。」

そう言つて真田は手提げ袋からキャラクターものの手帳と一枚の写真を取り出しテーブルの上に置いた。それを見た瞬間、匠は大きく目を見開いた。

## 第121話

なんと、それは匠のスナップ写真であり、開かれた手帳にも匠の顔だけを切り抜いた写真と全身像の写真が貼られていた。パラパラとページをめくると匠の行動が日付順に克明に記されている。更に驚くべきことは匠本人でさえ忘れていた小さな練習試合の結果までが年代順に記録されていた。それは匠が頭角を現し始めた小学校3年生の頃までさかのぼられていた。

「これは・・・」

言葉を失い、匠は目で真田に訴えた。沙織も「まあ！」と言ったきりで言葉が続かない。

「これを見たとき私もなんと言っているか、本当に驚きました。ところが彼女の友人の間ではかなり有名な話で、将来自分は周防さんのお嫁さんになると公言していたそうなんです。この写真も自分で撮るため写真部に入り、時々新聞部に撮ったものを提供していたそうです。もっとも彼女のはほとんどが周防さんのものだったようで、新聞部員も閉口つと、失礼。あの、なんと言いましようか・・・困ったこともあったそうです。すみません。なんだか変なことを口走ってしまつて。」

暖房は効いているがそれほど暑いわけではない。にもかかわらず、真田は額に吹き出た汗を何度もぬぐった。

「いいえ。お気になさらず先を続けてください。」

「は、はい。・・・ですから交友関係といってもあまり広くはないように、教室でも少し浮いた存在だったそうです。その数少ない友人からの情報によれば、クリスマス以降、彼女がふさがちだったとかで、周防さんの話をする他突然涙ぐんだり、時には泣いてしまうこともあったそうです。2、3日前などはあまりのひどさに1人にしてはおけないといったような話も友人間で交わされていたそうです。ただ、なぜクリスマス以降なのか、皆目見当がつかないと付け

加えていました。ですから友人たちは事件の一報を聞くとまっさきにやってしまった。と思ったそうです。ただ、自殺かどうかまだわからないということを伝えると、しきりに首をかしげていました。・

・まあ、今日一日でわかったことがこのあたりまでで、周防さんのお役に立つかどうか心配なのですが。」

今度は頭をポリポリ搔いて恐縮している。情報量の少ないことを恥じているように見えた。

「いいえ。充分役に立ちましたよ。なにしろ僕がかかわっていたんですからね。ただ、あらかじめ言っておきますが、僕は無関係ですよ。その坂下まゆみという3年生の存在すら知らなかったんですから。まあ言い訳がましいと言われればそれまでですが。」

「ええ！それはもちろんですとも！同じクラスの生徒からもそのことはウラが取れてますから。『坂下さんはああ言ってるけれど、周防君、彼女のことなんて知らないはず。彼女の1人芝居はミエミエだ。』と口を揃えて言っていました。ご安心ください。」

当然の事、と真田は胸を張った。

「それをうかがって安心しました。・・・では、真田さんの今日一日の疲れを取る面白い情報をお教えいたしましょうか。それによつてあなたの疑問が1つ解けるかもしれない。」

面白いという割りには匠の目は笑っていない。むしろ怒っているのではないか、と真田は肌で感じた。

「なんでしょう。あなたの目は面白がっているようには見えませんが。」

不安の色を隠さず真田は言った。

「怒ってる？　そう見えたのならそうなのでしょうね。でも客観視すればこんなに愉快な話は滅多にありませんよ。」

「わかりました。聞かせてください。」

真田はぐつと身を乗り出した。

## 第122話

「な、なんですってえ！」

匠の話が終わるや否や、真田は素っ頓狂な声を上げ椅子から転げ落ちた。

「おもしろい話でしょう？」

「そ、そんな、おもしろいだなんて・・・」

「所詮、ぼくの人生は得宗寺秀一という怪物に牛耳られているということですよ。まさかぼくもこの年で妻帯者になるとは思いませんでしたからね。」

匠の話というのは自身の結婚のことだった。話のあいだ中、沙織はじつと隅の椅子にかけたまま微動だにしない。表情も強張ったまま、およそ新婚夫婦とは思えない緊張感があつた。真田はそんな沙織が急に可哀想になった。匠は得宗寺秀一に牛耳られていると言ったが、この新妻とて同じ想いをしているのではなからうか、と。あながち資産家の娘が100%幸福とはいえないと思つた。

「・・・とはいっても。ぼくが18にならなければ正式な夫婦とはいえませんから、義父が解消したいと言えばすぐ以前の生活に戻るわけですから、今のぼくとしては宙に浮いているような存在ではないんですけれどね。」

「はあ・・・」

その自虐的な口調に真田は何と答えていいのかわからない。

「それを坂下さんが知ったのかどうか定かではありませんが、クリスマス以降変わったのであれば何らかの方法でその情報を得たのでしょうね。こんなことを言う自信過剰な男と思われても仕方がないのですが、この場合的を射ているでしょう。そう思いませんか？」

そう思いませんか、と聞かれ真田は困ってしまった。それでもこの証言は極めて重要と判断した彼は手帳に？ 周防匠氏婚姻の件、と記した。

「不思議なのは　　その生徒の存在をばくが全く知らなかったことです。ばく自身も覚えていない記録を残し、こんなにたくさんの写真を撮っていたなら知っていてもいいはずなのに。そうでしょう?」

匠の話聞きながら真田は再び手帳に?　周防氏、坂本まゆみの存在認識せず。と書き、顔を上げた。

「そうですね。私も同感です。数年にわたってこれだけの仕事をしてきたなら誰もが気づくと思います。それを当の周防さんがご存じない。というのは変ですね。」

「・・・あの。」

そのとき初めて沙織が口を挟み、2人は同時に彼女に注目した。今まで部屋の隅で小さくなつて控えていた彼女がいったい何を言い出すのだろう。

「なんだ。」

その冷たい言い方に真田はハッと匠の端正な横顔を見た。これが新妻に対する口のきき方だろうか。真田は再び彼女を気の毒に思い、と同時に周防匠という男に対し畏怖を覚えた。



## 第122話

「坂下さんのことなのですけれど・・・」

「おまえ、知ってるのか。」スツと匠は目を細めた。

「はい。小学部の頃から匠さんを追いかけていたのは知っていました。何度か脅されたこともあったから・・・」そのときの様子を思い出したのか、沙織は上着のすそをギュツと握り締めた。

「脅された？ なぜそのときオレに言わなかった。」

「あなたに言ったら坂本さんはただでは済まないと思ったから言えなかったの。私が我慢していれば良かったから。それに坂本さんの熱もいずれ冷めるだろうと思っていたし、まさかお父様があなたをこんな風に縛ってしまうとは夢にも思わなかった。」うつむき身体を締め、しゃがんでいる沙織。膝元にポタポタと涙が零れ落ちた。

「そのせいでおまえはオレに恥をかかせたことがわかっていないよ。うだな。真田さん。申し訳ないがちよつと失礼します。」匠はそう言って部屋を出て行った。

気まずい空気の中、残された真田は沙織がいることも忘れ、ホウツとため息をついた。そして突然沙織がいたことを思い出した。

「すみません。」

真田は決して小さいほうではない。柔剣道もかなりの腕前だし、現場ではバリバリ仕事をこなしてきた猛者である。その彼の身体がアルマジロのごとく小さく丸まっているのだ。その姿に沙織は思いがけず微笑んでいた。

「そんなに気を使わないでください。匠さんはすぐ戻ってきますから。」

その言葉に真田は気になったことを聞いてみた。

「あの・・・私、なにか周防さんの機嫌を損ねるようなこと、言いましたか？ なんか気分を害されたような気がするんですが。」

それに対し、沙織は少し間を置いてから静かに話し出した。

「いいえ、真田さんのせいではありませんわ。原因は私です。でもあなたに八つ当たりはしませんからご安心ください。」

「どういうことです？　そういえばあなたに対してとても冷たいですね。なぜですか？」

「そう、見えわますか？ 私には普段通りの匠さんにしか見えませんけれど。真田さんの目にそう映ったのなら謝ります。私と話す時は小さい頃からあの調子ですからお気になさらないで。おそらく今も隠し事をしていた私を諫めるために席を外したのだと思います。」

「そうなんですか？ 私には周防さんがあなたを憎んでいるようにしか見えなかったんですけどねえ。あれが普通ねえ・・・うーん、わからん。」

「ある意味そうかもしれません。だって私との婚姻であの人の夢は叶わなくなってしまったのですもの。」ここで沙織は寂しそうに微笑んだ。

「あの、こんなことを伺うのはプライベートの侵害と思われるようなんですが、あえてお聞きします。あなた方はお互いをどう思っているのですか？ どうみても政略結婚としか思えないんですが。」

「まあ・・・ストレートな質問に沙織の顔は真っ赤になった。」

「す、すみません！　あまりにも不躰でした。」大慌てで真田は頭を下げた。

## 第124話

「いいえ・・匠さんの気持ちは私にもわかりません。・・けれど、私にはあの人すべてです。もしあの人傍にいらなくなることがあつたなら、たぶん、呼吸すらできなくなってしまう。と思います。それはあの人私の前に現れたときから変わっていません。」

穏やかだがはつきりと言い切る沙織に真田の心臓は急にドクドクと音を立てて動き始めた。その衝撃で身体が前後に揺れているのがわかった。これほどまでの強く激しい思いが存在することをこれまで生きてきた中で経験したことがなかった。相手は自分よりひとまわりも若い高校生である。子供ともいえる年齢の人間に魂を揺さぶられるとは。そんな真田の妄想を見抜いたかどうかかわからないが、沙織は改めて穏やかな微笑みを向けた。

「でも・・このことはここだけの話にしてくださいね。・・これ以上匠さんの重荷になりたくありませんから。私は匠さんにとって空気であればいいんです。」

「そんな、空気だなんて。あなたのように美しい人を空気と思える男がいたら是非お目にかかりたいです。」

真田は正直な気持ちを口にした。今の彼は自分の職務を完全に忘れていた。

「まあ！ 警察の方がそんな冗談を仰るなんて。」

「じょ、冗談はないです！ 本当のことツす！」

「そんな風に仰っていたら女冥利に尽きますわ。でもそれは真田さんの奥様に仰って差し上げるべきですわ。」

「いやあ。」途端に真田は真っ赤になつて頭を掻いた。

「そう言える相手がいればいいんですけどねえ。 実は恥ずかしながら私はまだ独身なんですよ。 35にもなつて、と未だに母親に叱られるんです。」

「まあ！ ごめんなさい！ そうとは知らなかったものですから。」  
「いいえ、慣れてますから。これでもいずれは所帯を持つとは思  
ってるんですよ。ただこんな仕事をしてますから来てくれる人がい  
るかどうか・・・」

「大丈夫ですわ。真田さんを心から愛してくれる女性はきっと現れ  
ます。それまで焦る必要はないと思いますわ。」

美しい顔を少し傾け微笑む沙織に、真田の心臓はまた激しく動き出  
した。

## 第125話

ちょうどその時、ドアが開き匠が袋を携え入って来た。少し時間を置いたせいか、さつきとはちよつと違つ、と真田は感じた。

「お待たせして申し訳ありません。」

そう言つてチラツと沙織を見た。すると沙織は用があつたら呼んで下さいと言つて出て行つた。

沙織がいなくなると真田は正直がっかりした。彼女との会話をもう少し楽しみたかつたからだ。その様子を見て匠はフツと口を緩めた。

「あなたは正直な方だ。沙織を追い払つた僕が恨めしいでしょうが、これから話すことを聞かせたくなかたんですよ。ですがお気に召されたのなら後ほどまた呼びましょう。」

「は？あ、いや、それは・・・いえ、それには及びません。」真田は真つ赤になつて手を振つた。

「そうですか？僕が入って来たときの様子では楽しそうに見えましてたけれどね。」

「や、まいったな。前にお会いしたときも美しい人だと思つていたのですが、今日またお会いしてみても更に美しくなられたような気がします。美男美女のカップルというのはあなた方のことを言うんですね。」

美男美女。その言葉に匠は眉を顰めた。彼の忌み嫌う文言の1つだからだ。だがその微妙な変化も沙織を想い舞い上がっている真田の目には映らなかつた。

「少なくとも！・・・」

思いの外、声の調子が強かつたのかハツとして真田は匠を見た。

「あ、失礼。少なくとも、僕は普通だと思ひますけれどね。」

「ふつう？ あなた方が？ ご冗談でしょう！ 飛んでもありませんよ。ねえ？普通じゃありませんて。常にお互いを見られてる

からでしょうかねえ。サラツとそんなこと言えるなんて。 私などとは美しさの基準が全ツ然違いますよ。」改めて真田は驚きの声を漏らした。

「冗談はこのくらいにしてそろそろ本題に入っても宜しいでしょうか。」

一刻も早く匠はこの話題から逃れたかった。沙織が話の種にされるのは昔から嫌だったからだ。しかしその思惑を知り合って間もない真田が汲み取れる由もない。慌ててメモ帳を持ち直した。

「さつき、沙織が言ったことを確認してきましたのですが。．．」  
そう言つて長い足を左右組み替えた。

「はい？」

「脅迫の件ですよ。その確認と調査のために席を外したのですが、意外に時間を食つてしまいました。従業員の口が堅くてなかなか話してくれず困りました。」

「えっ？そうだったんですか？ 私はてつきり．．」また頭を掻いた。

「あんなことくらいで腹を立てていたらあの大ボケとは付き合えませんよ。 気分を害したことは認めますが、だからといってワンクツションを置くほどじゃありません。 執事に確認しに行つたんです。 ところで、脅迫の件は事実でした。 彼らはなるべく沙織に悟られないようこういうものを処分していたそうです。」

匠は持つてきた袋からあるものを取り出した。それはカミソリの刃が数十枚と脅迫状の数々だった。榊原はあまりの多さにそれとなく沙織に坂下なる女性のことを聞いたらしい。そこで初めて脅迫が屋敷の内外で行われていたことを知つたというのだ。 度重なる脅しに榊原は家を預かる執事として主である秀一か匠に報告しようと進言した。ところが当の沙織が自分が我慢すればいいことだから、と事を大きくしないで欲しいと涙ながらに訴えられ、榊原もやむなく承知した。それ以降、彼らは沙織の目にそれらが触れぬよう注意を払つてきた。ということだった。 今にして思えばせめて匠にだけは打

ち明けておくべきだったと反省していた。

「そうだったんですか。・・・お気の毒に・・・」真田はつい本音を漏らした。

「結論から言えば、執事たちが義父ないし僕にひと言でも報告していればこういうことにはならなかったかもしれないし、逆にもっとひどい結果になっていたかもしれない。どちらにしても明るい結末にはならなかったとは思いますが。」

匠はフツと息を吐き天井を見上げた。その顔は苦悩しているようにも見て取れるが、凡人の自分にはこのスーパー高校生がいま、何を考えているのか到底わからないだろうと真田は感じた。

## 第126話

その時、真田の携帯が鳴った。ちょっと失礼、と真田は断って電話を耳に当てた。

「はい。おお！矢田君か。どうした・・・うんうん。なに！わかった、すぐ行く！」

部下の1人である矢田刑事からの電話は新しい情報をもたらしたようだ。

「すみません。現場に戻らなくてはなくなりました。」

そう言つてすまなそうに立ち上がる真田に匠は自分も同行して良いかどうか尋ねた。

「ええ、もちろんです！いやあ、周防さんに一緒に行っていただければそれだけ手間が省けます。どうかよろしくお願いします！」

2人は共に長い回廊を玄関へと向かった。

「お出かけでございますか？」

背後から榊原の声がした。びっくりして振り返る真田をよそに泰然と立ち止まり、匠は煩わしげな目を向けた。

「ああ。」

「お歸りは。」

「わからない。沙織にもそう伝えておいてくれ。」

「かしこまりました。」

「では参りましょうか。」真田に向けられた匠の表情は一変し穏やかになっている。真田は言葉なくただ匠の後をついて行くしかなかった。

その後、匠の外出を知らされた沙織はただ淋しそうに微笑んだ。

現場での調査は一応済んだ。ということで一旦警察関係者は引き上げていたので匠たちは直接署に向かった。真田に電話をかけた矢田は彼らを玄関まで迎えていたが、匠と一緒に車から降りるのを



見ると何やらコソコソと真田に耳打ちした。それに対し真田は安心しろというように矢田の肩をポンポンと叩き、先に立って署内に入った。そのすぐ後を匠が続き、矢田は最後に匠の背中を見る形で中に入った。

8 畳ほどの小会議室で朱雀高の制服を着た女性徒が所在無さに腰掛けていたが、真田の後ろから匠が鴨居を気にしながら入っていくと、小さく「アッ！」と声を上げた。彼女の目は信じられないものを見た、と物語っているようだ。3人がそれぞれ椅子に掛けても彼女の視線は匠に釘付けになったまま凍りついている。匠がフツと笑いかけると、途端に顔が真っ赤になった。

## 第127話

「さあ。さっきの話をこっちの刑事さんにも話してくれるかな？」

矢田刑事がやさしく語りかけると彼女はハツとして視線を真田に移した。そして2、3度頷くと、

「あ、あの、あ・たし、山本真央っていいです。まゆみとは小学部から同じクラスでわりと仲が良かったんです。だからまゆみが周防君を好きになったときなんか、絶対ムリだからやめなさいって何度も言ったんです。それなのにまゆみったら全ッ然あたしの言うこと聞かなくて。だんだんエスカレートしていったんです。・  
・初めは、ってか、小学部の頃はただ試合があるときとか、練習のときに入りとか出待ちするくらいだったのに、中学に入った途端、ストーカーのようになってしまつて・・最近はなんかとつてもシヨクなことがあつたつて言つて、とつても落ち込んでいたんです。」

山本真央という少女の証言に真田は時折匠を垣間見た。だがその都度、匠はわずかに首を振るばかりで一向に接点が見当たらない。しかし、ストーカー行為を匠が全く気づかないことのほうが真田には奇異に思えた。

「坂本さんはどんな風にしてストーカー行為のようなことをしていたのかな。きみの知っている範囲で答えてくれるかな。」

「あたしも、何度か付き合つたことあるンだけど、まゆみは周防君チから学校までの通学路の何ヶ所かにビデオを取り付けていたの。もちろんそれは部活動の一環でことで学校から持ち出したやつだったから、自腹じゃないの。朝はだいたい時間がわかるけど、帰りの時間がわからないから苦労するつて言つてたわ。24時間作動できるビデオなんて学校には置いてないつてことみたいだったから。あたし、まゆみに頼まれて何度か手伝つたことがあつたの。でも、

とっても大変だった・・・こんなに苦労するほどの男なのか、とも思ってたわ。けど・・・」

最後に真央はチラッと匠を見た。真田もつられて匠を見たが、当の本人は腕を組み、目を閉じていたのでその表情からは何も推し量ることはできない。真央はホッとひと息ついた。

「けど、どうしたんだい？」矢田刑事が先を促した。

「けど・・・そうやっているうちにまゆみの気持ちもわかるようになってきたの。でもカン違いしないで。あたしは別に周防君が好きになったンじゃなくて、まゆみの気持ちかわかるって言うだけよ。」

「ああ、わかるよ。誰もそんなこと思っちゃいないさ。きみはあくまでも坂本さんの友達だからね。・・・それにしてもビデオを取り付けるというのは普通じゃないよね？取り付けたのは坂本さん本人？」

「だと、思うわ。だって他の人に言ったらすぐみんなにバレるでしょう？」

「そうだね。で、きみが手伝わないときは坂本さんが一人で操作してたの？」

「たぶん。でも毎日やることができないって言ってたから、もしかしたら一週間に何回かだったかもしれない。できないときは写真部員の特権をフルに活用したって言ってた。風景を撮るふりをして写真撮ってたって言ってたし。」

「なるほどね。・・・で、きみはなぜ最初の頃ムリだからって反対してたの？」

「だって、そんなのわかりきってるわ。非の打ち所が無い人よ。一般民が太刀打ちできる相手じゃないわ。それに得宗寺さんを敵に回してまで勝負する気にはなれないでしょう？誰だってそう思うわ。周防君と得宗寺さんは何回もベストカップル賞に選ばれてるくらいなんだから、その間に割って入ろうとする人は少なくとも朱雀高にはいないわ。」

「その得宗寺さんだけだね、坂本さんは得宗寺さんを脅していた事

実があるんだけど、きみは知っていたかな？」

矢田刑事に代わり、真田が口を挟むと真央はビクツと身体を震わせた。しかしその姿に動揺は見受けられない。知っていたことは明らかのようなのだ。

「・・・カミソリを入れた手紙を見せられたことがあった。・・・あ、たし・・・でも止められなかった。あの時のまゆみを見てたらかっと、誰も、できなかったと、思う。」

そのときの状況を思い出したのか、一点を見つめ、怯えた声を出す真央。

「きみを、脅した。ということなのかな？」

その質問には即答せず、真央は小さく首を振った。

## 第128話

「あたしたち・・友達だった・・けど、そのことがあってから怖くなつて。だんだんと話をしなくなつてきてた。・・でも、こんなことになるならもつと話を聞いてあげればよかった。」

張り詰めていた神経が突然切れたのか真央は人目もはばからずオイオイ泣き出した。脇に控えていた婦警が気を利かせ彼女を別室に連れて行こうとすると、ふと何かを思い出したのかふいに立ち止まった。

「どうしました？」

「クリスマスのこと。まゆみがあんまり落ち込んでるみたいだったから、あたし、大丈夫って声をかけたの。そしたらまゆみ、あたしにはヒロミがついてるから平気よって言つてた。でも・・今までそんな名前聞いたことなかったから、だれ？って聞いたの。・・そしたら・・最強の支援者よって。それだけ言つて淋しそうに笑つてた。それ以上は秘密だからって教えてもらえなかったの。」

そう言つて出て行きかけ再び立ち止まった。匠を除く全員が注目すると、真央はかなりためらっていたが、意を決したように振り返つた。その視線は匠へ注がれた。

「あの・・周防クン。」

全員が匠を見た。それまでじつと目を閉じていた匠はゆっくり目を開き、けだるそうに真央を見た。

「周防クンにお願いがあるの。」

「・・・・」

「こんなことになつたけど、まゆみを恨まないで。まゆみはただあなたのことが好きだっただけなんだから・・。」

既に彼女は落ち着きを取り戻しているようだった。それでも目には涙が浮かんでいる。

「・・・わかりました。先輩。そういたします。故人となつた人を

恨んでも仕方ありません。」

匠の答えに真央は淋しそうに微笑み、婦警の伴われて出て行った。真田は丁寧だが、どこか奇妙な匠の話し方に違和感を覚え、2人が出て行くとすぐそれを口にした。ところが匠は1つでも先輩には違いないからそう言ったまで、と平然としている。

「そう、ですか。・・・私らの時代は高校つていうとあまり上下関係はなかったんで、タメ口きいてましたけどねえ。そういうもんなんですからねえ。もっともそのせいで警察学校では苦労しましたけどもいや、話を逸らしてすみません。今の話で何かわかりましたか？ヒロミという人物が新たに浮上してきましたが、その名前に心当たりはないですか？」

「いいえ、ありません。もっとも周囲の人間すべてを把握しているわけではありませんから、ぼくだけが知らない、ということとは十分考えられますが。それに男女関係なく使用されている名前の1つですから、それだけでは性別すら特定できませんね。偽名という可能性もある。・・・それにしても。何が目的で彼女に近づいたんでしょうね。そのヒロミ、という人物は。一見して坂下という女性は、ごく平凡な高校生にしか見えないんですけどね。」

「わかりました。そのあたりを周囲の人間に当たってみます。」  
真田は矢田に目配せをすると彼も心得たものですぐ行動を起こした。矢田を見送ると、匠は小さく息を吐いた。そして心の中で恐らくムリでしょう、と呟いた。

「真田さん。申し訳ありませんが、一旦帰宅しても宜しいでしょうか。矢田さんからの報告をここでじっと待っていても仕方がありませんから。」

「は？あ、はい。すみません。ずっとおつきあいしていただいてわかりました。矢田から何かしら連絡があればすぐご報告します。ありがとうございます。あ、車で送りますから少々お待ちを。」  
「それにはおおよびません。恐らく迎えの車が来ていると思いますから。」

なるほど玄関に出てみると1台の高級車が止まっている。驚く真田を尻目に匠は静かに後部座席に乗り込んだ。車は音もなく滑り出し、あっという間に警視庁の前から消え去った。

## 第129話

「田中。悪いが行ってもらいたい所がある。大丈夫か。」

座席に座るとすぐ匠は運転手の田中に声を掛けた。

「はい。どこへなりと。」

運転手の田中は秀一が信頼する人物の1人であり、10年以上秀一だけのお抱え運転手だった。それだけに車の運転にかけては絶対的な自信を持ち、同乗者に家の中にいるような錯覚をおこさせてしまうほどだ。匠と沙織のお披露目以降匠の運転も任されるようになり、益々その自信を深めていた。

「堂内町の山本という家に行ってくれ。」

「かしこまりました。」

「匠さま。」

田中はハンドルを回し車をUターンさせながらバックミラー越しに若き主を見た。

「なんだ。」

「ここから堂内町までは小一時間ほどかかります。それまでお休みになられてはいかがですか。着きましたら声を掛けますから。」

「そうか。じゃ、頼むよ。」

そう言つて匠は目を閉じた。すると間もなく深い眠りに落ちたのを田中は確信した。

「・・・・さま。・・匠様。・・着きました。到着いたしましたよ。」

穏やかな声が匠を心地よい眠りから現実へ引き戻した。

「・・・・ン？　そうか。・・悪いがここでちよつと待っていてくれ。この家に用事があるんだ。」

「はい。」

匠は車を降りると『山本』と記された表札の下にあるブザーを押し



た。しばらくして姿を現した女の子は立っていたのが匠だとわかる  
と幽霊でも見たような顔をした。

優しい笑顔で何やら話しかけ、中に招き入れられるところまでを田  
中は見ていた。そしてあの笑顔を一度でもいいからお嬢様に見せて  
頂きたいものだ、と心底思った。

30分ほどして匠は入ったときと同じ笑顔を湛えながら出てき  
た。あとから続いてきた女の子の表情は夢見心地といったところで  
足もおぼつかない感じだ。2、3言玄関先で言葉を交わした後、田  
中は我が目を疑った。あろうことか、匠はその娘の額にキスをした  
のだ。その後愛おしそうに娘を抱き寄せもう一度名残惜しそうに髪  
にキスをして何かを囁いた。最後は手を振って別れ、田中の元に戻  
ってきた。田中は何も言えずそのまま車を発進させたが、10分も  
走るとどうにも黙っていることができなくなった。我慢の限界、と  
いったところだ。

「あ、の。」

返事がない。田中はミラーを通して後ろを見た。その顔は暗く、何  
かの痛みを必死で耐えているように見えた。

「お加減がよろしくないようですが。」

到底、聞きたいことは聞けなくなった。

「……いいや。」

口を開くのも面倒といわんばかりの答えが返ってきた。

「お顔の色がすぐれません。どこかへ寄りましょうか。」

「大丈夫だ。……家に直行してくれ。」

「はい。かしこまりました。」

## 第130話

「あの。申し上げて宜しいでしょうか。」

しばらく黙って車を駆っていた田中だったが、ますます心配になってきた。

「・・・なんだ。」

「おじようさま、を、悲しませるような事だけはなさらないください。私の願いは得宗寺家の安泰です。出すぎたことを言うようですが、先ほどの一件は私の胸のうちに収めておきますから、今後あのようなことはお控え願えませんか。」

「・・・たしかに出すぎた暴言だ。」

その続きを言おうとしたとき、匠の携帯が鳴った。

「はい・・・きみか。どうしたんだい？ え？ そんなことあるわけないだろう。きみは黙ってオレの愛を受け入れればいいんだ。」

ああ、心配しなくても大丈夫だ。・・・好きだよ、真央さん。」

電話の主はさっきの女の子らしかった。田中は電話中の匠の表情を可能な限り見ていた。それはおよそ恋をしている者のそれではなかった。口では愛だの好きだのと言ってはいるものの、顔色は悪く何の感情も表れてはいない。むしろその言葉を発する度必死にこみ上げてくる怒りを抑えているようだった。長々とした会話が終わりようやく電話を切ると、匠はそれを放り投げた。といっても車の中である。電話は助手席に転がった。すると再び呼び出し音が鳴った。5回、10回。何度鳴っても匠は動かない。田中はチラチラと電話を横目で見ながら声をかけた。しかし匠は完全に電話を無視した。やっと諦めたのか、かなりの回数の後、着信音は切れた。一連の行為で田中は何かを得心したのかミラー越しににっこりと笑った。

「私の思い過ぎでした。出すぎたことを申しました。申し訳ございませんでした。」

それに対し、匠は暗く沈んだ目をミラーに向け、黙っているという

意味で人差し指を口にあてた。その後、車はそのまま得宗寺家に直行した。

「おかえりなさいませ。」

夜も更けていたが榊原は匠を玄関先まで出迎えた。

「ああ。」

匠の返事は相変わらず素っ気無い。だがそんなことを気にする執事ではない。

「ご夕食はいかがいたしましたしょう。」

匠と肩を並べ、しかし半步下がって歩く。

「部屋に運んでくれ。」

「かしこまりました。」

そう言つて榊原は調理場へ向かうため、匠と別れた。

自室に入ると匠はそのままベッドに倒れこんだ。今日一日の何と長かったことが。追い討ちをかけたのが 山本真央との会話だった。自ら進んでしたことなのに、砂を嚙んだようなイヤな気分がつまでたつても拭えないのだ。思い出したくないのに山本家での30分が否応なしに何度も脳裏によみがえる。口火を切ったのは匠の方だった・・・

## 第131話

「実はお願いがあつて無礼を省みず来てしまつたんです。」

「え？」

「さつき山本さんの態度にひどく感動して、どうしてもぼくの願いを聞いて頂きたいと思いました。」

「なんですか、いったい。」

「山本さんの坂本さんに対する友情に、です。ぼくにはあれほど真剣になれる友達はいません。どうかぼくの彼女として付き合つていただけませんか。あ、イヤなら友達から始めても結構です。ぼくと付き合つて下さい！」

必死の形相で匠は真央に頼み込んだ。拝み倒したと言つても過言ではない。しかし当の真央としてはにわかには信じ難い。天下の周防匠が自分のような平凡な高校生に交際を申し込む？天地がひっくり返つても有り得ない事だ。でも・・・世の中に絶対なんてないんだわ、と思い直した。

「と、得宗寺さんはどうするの？」知らず知らず上目遣いになり媚を売る。

「きみが氣にすることはないよ。元々幼馴染みというだけでそれ以上の気持ちはお互いないから。」

「そうなの？」疑わしそうな目が一挙に喜びに変わる。

「そうさ。きみに会うまでの前座のようなものだつたんだ。これからはきみ一筋に生きるよ。だから付き合つてくれないか？」

ありつたけの笑顔で真央を見つめ、しなやかな手でその手を握る。かつて匠は女性に対し自分からアプローチしたことがなかった。する必要などなかった。ただ匠がその氣にならなかつただけで、もし少しでも脈ありの態度を匂わせたなら何十人、いや数え切れないほどの女性がその虜になつていただろう。それゆえ、真央に対し匠が取つた行動は万に一つの奇跡に等しかつた。

「うれしい！あたし、いっぱい尽くすわ！ ああどうしよう！ ねえ、みんなにこのこと話てもいい？ いいわよね！」

大はしゃぎの真央に匠は少し困った顔をした。

「それはちよつと・・・みんなじゃなくて本当に仲のいい友人だけにしてくれないかな。だって、ホラ、ぼくの立場ってものもあるしね？」

「そ、そうよね。うん、わかった。じゃ、そうする。・・・でもウソみたい！ あたしがあの周防匠の彼女だなんて！ ねえ、匠って呼んでいい？ ア、もちろん2人きりの時よ。それ以外はヒミツですもんね！ あ　　！うれしー！」

今にも飛び上がりそうに喜々とする真央。途端に隣に座りしなだれかかると、顔を匠の方に向け目を閉じ唇を突き出した。キスしてくれという意味なのだろう。匠は額にキスするにとどめた。

「今日はこれで我慢して。だって最初から飛ばしたらあとの楽しみが無くなるだろう？ ・・・ねえ、それよりきみン家、誰もいないの？」

真央は少し不満そうに唇を引っ込め、渋々その質問に答えた。

「うちは両親が離婚して妹はお父さんのところにいるから、あたしはお母さんと2人暮らしなの。お母さんはトラックの運転手してるから何日も帰って来ないことがよくあるわ。今日もどこにいるかわからないし・・・だからあたし、将来絶対玉の輿に乗るって決めたの。したらお母さんにも楽しませてあげられるし・・・」

「そうか・・・じゃ、これからしばらくが全面的にバックアップしよう。今日はもう遅いし明日も学校で会えるからこのまま帰るよ。名残惜しいけどね。」

そう言って立ち上がると匠は真っ直ぐ玄関に向かい外に出た。といっても小さな家のこと。匠の歩幅ではものの4、5歩程度で外に出ることができた。

## 第132話

田中が見ていたことはすぐ気づいた。だからこそあんな大胆な行動を取る必要があったのだ。何度もそう自分に言い聞かせても傍に寄った時の真央の体臭は今も鼻について離れない。本来の体臭と安っぽいコロンのにおいが混ざり合い異様なにおいだった。思い出すだけで吐き気がしてきそうだった。車の中で田中に話しかけられたときも全神経を集中していたのでろくな返事もできなかった。幸か不幸か、そのおかげで田中はあらぬ方向に勘違いしてくれたのだが。

「やめてくれ！」思わず叫び声をあげ、両手で耳をふさいだ。

ガシャン！！ガラスの割れる音がした。恐る恐る目を開けると沙織が棒立ちになっていた。

「ご、ごめんなさい！」

匠の視線に我に返った沙織は急いで割れたコップを拾い上げた。それをじつと見つめていた匠だったが、実際は見えてはいなかった。真央の臭いと共にあの家全体が目の前にチラついてどうしても離れてくれないのだ。

「匠さん、匠さん。どうしたの、何かあったの？」

コップを片付け終えた沙織に身体を揺すられようやく現実に戻った。

「ああ・・・なんでもない。・・・おまえこそなにかあったのか。」

その声には全く生気がない。セリフを棒読みしてるようだ。

「お食事を持ってきたの・・・食べる？」心配そうに覗き込む。

ゆっくりベッドから起き上がり匠は眉間をギュッと押した。フワツといい香りがする。沙織の清潔感溢れる体臭が匠の鼻腔をくすぐった。フツと息を吐くと匠は沙織の手を取りその身体を引き寄せた。突然のことに驚いた沙織も匠の力強い腕の中でしっとりと落ち着いている。匠は沙織の髪に顔をうずめた。沙織は匠の身体が微かに震

えているのを感じ顔を上げた。

「泣いてるの？」

次の瞬間、匠は沙織の華奢な身体が折れそうなほど強く抱きしめ、怒りと苦悶の入り混じった荒々しいキスをした。

「・・・こらえてくれ・・・」

「え？　なんて言ったの？　匠・・・さん？」

しかし匠は何も言わず、ただ沙織を抱きしめたまま苦渋の涙を流した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0941g/>

---

TAKUMI

2010年10月21日13時38分発行